

城山

(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

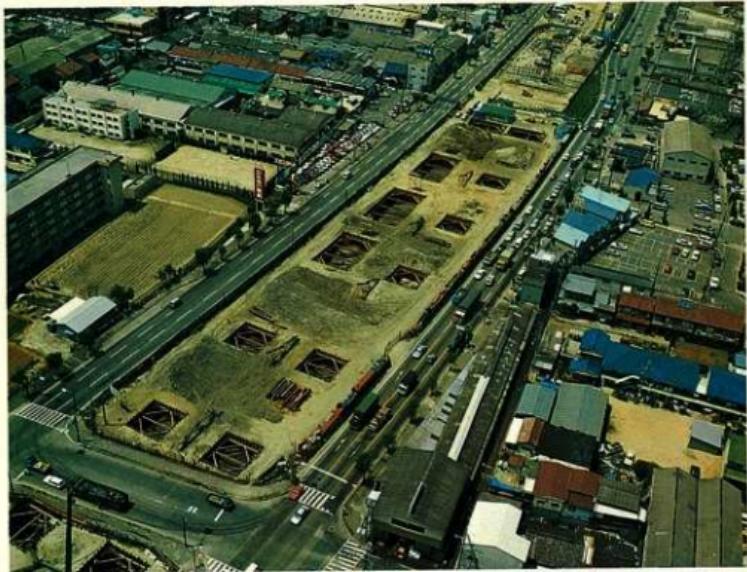
大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

城山

(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

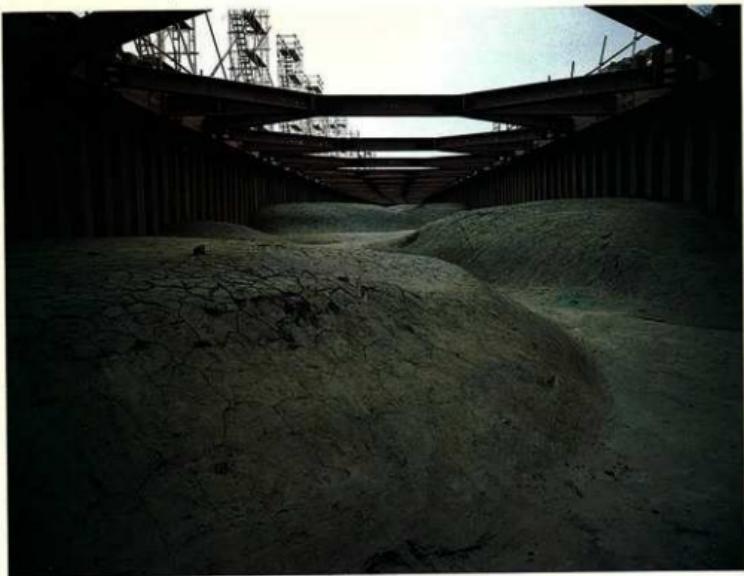
大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター



城山遺跡（その1）航空写真



AN rトレンチ出土旧石器

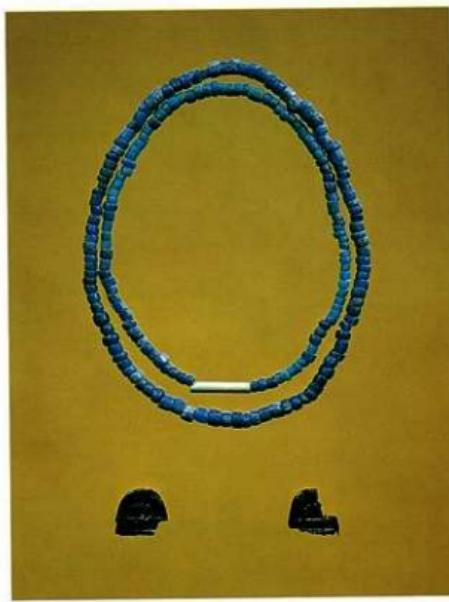


A-N トレンチ方形周溝墓全景（北より）



AN pトレンチ17号・29号方形周溝墓 瓦棺・供獻土器検出状況（北上より）

卷頭図版 3



C トレンチ城山 4 号墳主体部副葬品・玉類・豎櫛

卷頭図版 4



C トレンチ溝状造構出土 和同開珎・万年通宝・神功開宝

序 文

城山遺跡は、亀井、加美、久宝寺、山賀、瓜生堂遺跡等と共に弥生時代以来の河内の「クニ」の歩みを解明する上で不可欠の重要な遺跡であり、立地的にも羽曳野丘陵から北に派生した河内台地の縁辺、長原台地部に所在する等、河内平野中央部より穏やかな自然環境的位置を占め、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代はもとより、中、近世まで連綿と明確にその足跡がたどれる複合遺跡である。又、河内平野中央部との比較の上でも大いに注目を集めている遺跡である。

本書は、近畿自動車道天理・吹田線（松原～東大阪間）が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された15遺跡の内の1つで昭和58年3月以来、発掘調査を実施してきたものの調査概要を収録した。

今回の調査によって、特に40基もの弥生時代の方形周溝墓を検出すると共に、周辺調査結果を勘案すれば南北500m、東西100mの間に数百基もの方形周溝墓の存在を推測させる等の大きな成果を得た。かくも累々と連続して構築された方形周溝墓群の意味することを解明することは真に、河内の「クニ」の歩みを明らかにする上で、寄与するところ大なるものがあろう。今後の研究に大いに期待したい。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財團法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 吉房康幸

序 文

難波津と呼ばれ、住吉大社、生玉神社に代表される海神の社を持つ大阪は、古代より海上交通を発達させ、瀬戸内海航路の終点として西日本各地との交易はもとより、大陸や朝鮮半島との門戸としても確固たる地盤を築いた我国の先進文化の窓口であった。

この難波津へもたらされた異国の文化が、やがて我国の先進文化として根ざし、伝統の文化と同化しながら独自の河内あるいは畿内文化を形成していった。その意味で河内平野の歴史の解明は、我国の文化のルーツを探る重要な位置を占めていると云えよう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的にその実施を依頼され、既に長原遺跡をはじめ14遺跡の調査が完了し、亀井北遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和60年10月に調査が完了した大阪市平野区長吉出戸3丁目地内に所在する城山遺跡の発掘調査の概要を記したものである。検出された弥生時代の方形周溝墓群は、盛土の高さが2mにもおよぶもので、全体数が数100基を超えると考えられており、当時の墓制を究明する重要な成果であると自負している。

最後に、立派な調査成果を挙げられた調査関係者各位の努力に敬意を表するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な進行に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚くお礼申し上げる次第です。

昭和61年3月

財団法人大阪文化財センター
理事長 加藤三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区長吉出土5・6丁目に所在する城山遺跡（その1）調査区の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び(財)大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用724,158,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は昭和58年2月1日から昭和60年10月30までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と併行して実施した。
また、遺構図面や写真資料等の概略的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と昭和60年9月1日から同年10月30までの2ヶ月間に実施した。
6. 本調査及び本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下、(財)大阪文化財センターが実施し、発掘調査、遺物整理とともに杉本二郎・岩瀬透が担当した。調査ならびに本書作成に関連した者は以下の組織表とおりである。

調査関係者組織表

〈事務局〉	理事兼事務局長	小林廣喜（60年1月まで、以後理事専任）
	専務理事	住羽地米治（60年3月まで）
	事務局長	畔謙造（60年3月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（60年4月から）
	事務局次長兼総務課長	大塚恭朗（58年4月まで）
	同	尾田勝之（60年4月まで、以後次長専任）
	総務課長兼庶務係長	阪上允子（60年4月まで主幹兼庶務係長）
		主査 田中喜代子 主事 秋山芳廣、灰本明子
		千野和之、田口宗義、館山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子 主事 小島容子
〈調査総括責任者〉	業務課長	石神 怡（59年3月まで）
	同	泉本知秀（60年4月まで）
	業務課長兼業務第2係長	中西靖人（60年4月まで主幹兼業務第1係長）
	業務課主幹	椋尾考彦（58年5月まで）
	同	吉村信男（58年5月から）
〈長田分室〉	業務第1係	技師 山口誠治 片山彰一
〈長吉分室〉	業務第2係	係長 赤木克視 技師 平井貞子

業務第3係

係長 広瀬和雄 技師一石神幸子、藤沢真依、杉本二郎、
辻本 武、藤永正明、上林史郎、入江正則、阿部幸
一、岩瀬 透、西村尋文

7. 本書の執筆は赤木、阿部、杉本、岩瀬、山口がおこなった。
8. 縄文土器の鑑定に関して当センター技師 大野 薫氏、又、石器の一部分の実測、整図にあたって当センター技師 松山 聰氏の協力を得た。
9. 本書の編集は杉本、岩瀬がおこなった。
10. 調査、整理にあたっては下記の学生諸氏の協力を得た。
石田棲子、井上まゆみ、上野あけみ、小川雅人、尾山澄子、加藤 茂、金谷浩治、川口剛司、
川崎 恵、倉谷保裕、奥屋礼美子、後藤慎二、治部田幸久、高木直樹、辻谷庸子、豊留広樹、
長岡光信、堀内承治、松葉宣裕、山科太郎、藤田裕司
11. 本書の地区割りには国土座標を基準に割り付けており、遺構実測図の方位はすべて真北を示す。又レベル高は（東京湾標準潮位）による。
12. 遺構番号に関しては、各節ごとにナンバーリングを行った。
13. 方形周溝墓の番号は基本的には北から付けているが、ANトレンチは後で延長した調査区のため南から北へ向かって番号を付した。ANトレンチ調査後行った切り抜き部の調査では北から順番番号を与えた。本書では北から順番に説明を加えたが、方形周溝墓の名称は当初与えた番号を使用しており、そのため番号が前後するが御許し願いたい。
14. 本書に記載した遺物には一連番号を与え、実測図・写真が対照できるようにした。
15. 遺物実測図の縮尺は以下の通りである。

土器・埴輪	1/4	1/6
石器	1/2	1/6
木製品	1/4	
古墳副葬品	1/4	1/6

16. 生駒西麓丘の土器については白ぬきの番号とした。
17. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成したが、そのすべてを本書に掲載することが不可能であるため、本書記載以外の資料については(財)大阪文化財センターにて保管している。広く利用される事を希望する。

城山(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

巻頭カラー写真図版 1～4

序文

例言

第1章	はじめに	赤木克視	1
第2章	調査の方法	赤木克視	2
第3章	位置と環境	阿部幸一・岩瀬透	4
第4章	調査の成果		7
第1節	遺構面の概要と基本層序	杉本二郎	7
第2節	旧石器時代	杉本二郎	13
第3節	縄文時代晚期～弥生時代前期	杉本二郎	15
第4節	弥生時代中・後期	杉本二郎・岩瀬透	21
第5節	古墳時代	岩瀬透	136
第6節	飛鳥・奈良・平安時代	岩瀬透	152
第7節	中・近世	岩瀬透	162
第5章	まとめ	杉本二郎・岩瀬透	166
第6章	城山遺跡出土植物遺体について	山口誠治	190
附 章	龜井遺跡31トレンチ	杉本二郎・岩瀬透	195

挿図目次

第1図	トレンチ配置図	3
第2図	調査区割付け図	3
第3図	城山遺跡周辺遺跡分布図	6
第4図	基本土層図 (A N・Aトレンチ)	9,10
第5図	基本土層図 (B・Cトレンチ)	11,12
第6図	白色粘土上面検出土塚・旧石器出土位置図	13
第7図	土塚断面実測図	13
第8図	A Nトレンチ白色粘土上面出土石器実測図	14
第9図	弥生前期以前自然河川略図	15
第10図	A Nトレンチ北端落ち込み出土縄文土器	15
第11図	Aトレンチ出土縄文土器	16
第12図	A・ANトレンチ出土縄文土器	17
第13図	Bトレンチ自然河川出土石器・Aトレンチ出土弥生前期土器	18
第14図	Aトレンチ出土弥生前期土器	19
第15図	Aトレンチ出土弥生前期土器	20
第16図	方形周溝墓略図	21
第17図	24号・27号・22号・21号方形周溝墓出土遺物	22
第18図	23号方形周溝墓盛土断面図	23
第19図	23号方形周溝墓1号・2号・3号主体部平面図・断面図	24
第20図	23号方形周溝墓周辺全図	25,26
第21図	23号方形周溝墓4号・5号主体部平面図・断面図	27
第22図	23号方形周溝墓11号土器棺	28
第23図	23号方形周溝墓11号～16号・24号土器棺平面図・断面図	29,30
第24図	23号方形周溝墓12号土器棺	31
第25図	23号方形周溝墓13号・14号土器棺	32
第26図	23号方形周溝墓15号土器棺	33
第27図	23号方形周溝墓16号・24号土器棺	34
第28図	23号方形周溝墓北西周溝出土遺物	35
第29図	23号方形周溝墓北西周溝出土遺物	36
第30図	23号方形周溝墓北東周溝遺物出土状況図	37
第31図	23号方形周溝墓北東周溝出土遺物	38

第32図	23号方形周溝墓北東周溝出土遺物	39
第33図	23号方形周溝墓北東周溝出土遺物	40
第34図	23号方形周溝墓南東周溝遺物出土狀況図	41
第35図	23号方形周溝墓南東周溝出土遺物	42
第36図	23号方形周溝墓南東周溝出土遺物	43
第37図	23号方形周溝墓南東周溝出土遺物	44
第38図	23号方形周溝墓南西周溝出土遺物	45
第39図	23号方形周溝墓南東周溝出土遺物・南東平坦部出土遺物	46
第40図	23号方形周溝墓盛土内出土遺物	47
第41図	23号方形周溝墓盛土下溝	48
第42図	23号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物	49
第43図	34号方形周溝墓盛土上出土遺物	50
第44図	19号方形周溝墓盛土断面図	50
第45図	19号方形周溝墓周辺全体図	51, 52
第46図	19号方形周溝墓1号・2号主体部平面図・断面図	53
第47図	19号方形周溝墓9号土器棺	54
第48図	19号方形周溝墓9号・10号・17号・18号・25号・26号土器棺平面図・断面図	55, 56
第49図	19号方形周溝墓10号土器棺	57
第50図	19号方形周溝墓17号土器棺	58
第51図	19号方形周溝墓25号土器棺	59
第52図	19号方形周溝墓18号土器棺身	60
第53図	19号方形周溝墓18号土器棺蓋	61
第54図	19号方形周溝墓26号土器棺身	62
第55図	19号方形周溝墓26号土器棺蓋	63
第56図	19号方形周溝墓北東・南東周溝出土遺物	64
第57図	19号方形周溝墓南西周溝出土遺物	65
第58図	19号方形周溝墓盛土内出土遺物	66
第59図	19号方形周溝墓盛土下溝	67
第60図	19号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物	67
第61図	29号方形周溝墓19号・23号土器棺平面図・断面図	69
第62図	29号方形周溝墓19号土器棺	70
第63図	29号方形周溝墓23号土器棺	71
第64図	29号方形周溝墓南東周溝出土遺物	72
第65図	17号方形周溝墓盛土断面図	73

第66図	17号方形周溝墓1号・2号・3号主体部平面図・断面図	74
第67図	17号方形周溝墓周辺全体図	75, 76
第68図	17号方形周溝墓4号・5号主体部平面・断面図	77
第69図	17号方形周溝墓7号・8号土器棺	78
第70図	17号方形周溝墓7号・8号・20~22号土器棺平面図・断面図	79, 80
第71図	17号方形周溝墓20号土器棺	81
第72図	17号方形周溝墓21号土器棺	82
第73図	17号方形周溝墓22号土器棺	83
第74図	17号方形周溝墓北東周溝出土遺物	84
第75図	17号方形周溝墓北東周溝出土遺物	85
第76図	17号方形周溝墓南東周溝出土遺物	86
第77図	17号方形周溝墓南東周溝出土遺物	87
第78図	17号方形周溝墓南西周溝出土遺物	88
第79図	17号方形周溝墓南西周溝出土遺物	89
第80図	17号方形周溝墓南西周溝出土遺物	90
第81図	17号方形周溝墓北西周溝遺物出土状況図	91
第82図	17号方形周溝墓北西周溝出土遺物	92
第83図	17号方形周溝墓北西周溝出土遺物	93
第84図	17号方形周溝墓盛土内出土遺物・4号主体部墓塚内出土遺物	94
第85図	17号方形周溝墓盛土下溝	95
第86図	17号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物	96
第87図	16号方形周溝墓主体部平面図・断面図	97
第88図	16号方形周溝墓墓塚内出土遺物・南西周溝・北西周溝出土遺物	98
第89図	16号方形周溝墓北西周溝出土遺物	99
第90図	1号方形周溝墓6号土器棺平面図・断面図	100
第91図	1号方形周溝墓6号土器棺	100
第92図	1号~4号方形周溝墓周辺全体図	101
第93図	1号・3号方形周溝墓出土遺物	102
第94図	4号方形周溝墓1号・2号土器棺平面図・断面図	103
第95図	4号方形周溝墓1号土器棺	104
第96図	4号方形周溝墓2号土器棺・周溝出土遺物	105
第97図	4号方形周溝墓周溝出土遺物	106
第98図	5号~10号方形周溝墓周辺全体図	107
第99図	6号方形周溝墓主体部平面図・断面図	108

第100図	6号方形周溝墓周溝内出土遺物・盛土内出土遺物	109
第101図	5号・40号方形周溝墓出土遺物	111
第102図	7号方形周溝墓3号・4号土器棺平面図・断面図	112
第103図	7号方形周溝墓3号土器棺	113
第104図	7号方形周溝墓4号土器棺	114
第105図	7号方形周溝墓出土遺物	115
第106図	8号方形周溝墓5号土器棺平面図・断面図	116
第107図	8号方形周溝墓周溝出土遺物	116
第108図	8号方形周溝墓5号土器棺	117
第109図	42号・12号・36号方形周溝墓出土遺物	119
第110図	13号方形周溝墓出土遺物	120
第111図	13号方形周溝墓付近出土遺物	121
第112図	14号・25号方形周溝墓平面実測図	122
第113図	14号方形周溝墓出土遺物	123
第114図	住居址・溝・土塙略図	124
第115図	竪穴住居址出土遺物	125
第116図	竪穴住居址平面図・断面図	125
第117図	竪穴住居址付近出土遺物	126
第118図	竪穴住居址付近出土遺物	127
第119図	竪穴住居址付近出土遺物	128
第120図	溝1 土塙1遺物出土状況図	129
第121図	溝1出土遺物	130
第122図	溝1出土遺物	131
第123図	溝1出土遺物	132
第124図	溝2・溝3・土塙2・土塙3出土遺物	133
第125図	弥生時代後期溝・土塙・ピット平面図	134
第126図	A Nトレンチ出土弥生時代後期土器	135
第127図	黒色粘土上面出土遺物	137
第128図	古墳時代中・後期造構略図	138
第129図	城山1号墳平面図	139
第130図	城山1号墳周溝出土遺物	139
第131図	城山2号墳・7号墳外形測量図	140
第132図	城山2号墳・7号墳出土遺物	141
第133図	城山3号墳出土遺物	142

第134図	城山4号墳平面図・主体部位置図	143
第135図	城山4号墳主体部内副葬品出土状況図	144
第136図	城山4号墳主体部内出土玉類	145
第137図	城山4号墳主体部内副葬品・墓塚内・周溝内出土遺物	146
第138図	城山5号墳平面図・主体部位置図	147
第139図	城山5号墳主体部平面図・断面図	147
第140図	城山5号墳主体部土器館・墓塚内・周溝出土遺物、城山6号墳周溝出土遺物	148
第141図	城山6号墳平面図・主体部位置図	149
第142図	城山6号墳主体部内副葬品出土状況図	149
第143図	城山6号墳主体部平面図・断面図	149
第144図	溝状造構平面図	150
第145図	自然河川南肩東壁断面図	150
第146図	自然河川埋没後堆積層出土遺物	151
第147図	飛鳥・奈良・平安時代造構略図	152
第148図	自然河川1出土遺物	153
第149図	自然河川1埋没後堆積層出土遺物	154
第150図	自然河川2出土遺物	155
第151図	自然河川2出土遺物	156
第152図	自然河川2埋没後堆積層出土遺物	157
第153図	溝状造構出土遺物	158
第154図	溝状造構出土遺物	159
第155図	土塚出土遺物	160
第156図	青灰色粘土層出土遺物	161
第157図	足跡平面図	161
第158図	中世造構略図	162
第159図	中世溝出土遺物	162
第160図	近世造構略図	163
第161図	近世自然河川1・2出土遺物	163
第162図	取水施設平面図・断面図	164
第163図	方形周溝墓築造時期別想定略図	168
第164図	出土植物遺体	193
第165図	龟井31トレンチ位置図	195
第166図	龟井31トレンチ西壁・北壁基本土層図	196
第167図	弥生時代造構面平面図	197

第168図 弥生時代遺構面外形測量図.....	197
第169図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓全体図.....	198
第170図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓1号～5号土器棺平面図・断面図.....	199, 200
第171図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓盛土断面図.....	201
第172図 亀井31トレンチ1号方形周溝墓主体部平面図・断面図.....	201
第173図 1号土器棺.....	202
第174図 1号土器棺身.....	203
第175図 2号土器棺.....	204
第176図 3号土器棺.....	205
第177図 4号土器棺.....	206
第178図 5号土器棺.....	207
第179図 1号方形周溝墓周溝・盛土内出土遺物.....	208
第180図 1号方形周溝墓周溝内出土遺物.....	209
第181図 弥生中期遺構面出土遺物.....	209
第182図 弥生時代後期自然河川出土遺物.....	210
第183図 中・近世自然河川出土遺物.....	210

表 目 次

表1 方形周溝墓詳細一覧表.....	169, 170
表2 方形周溝墓埋葬施設詳細一覧表.....	169, 170
表3 23号方形周溝墓供獻土器一覧表.....	171, 172
表4 19号方形周溝墓供獻土器一覧表.....	173, 174
表5 17号方形周溝墓供獻土器一覧表.....	175, 176
表6 城山遺跡古墳出土土器一覧表(1).....	179, 180
表7 城山遺跡古墳出土土器一覧表(2).....	181, 182
表8 城山遺跡古墳出土土器一覧表(3).....	183, 184
表9 城山遺跡古墳出土土器一覧表(4).....	185, 186
表10 城山遺跡古墳出土土器一覧表(5).....	187, 188
表11 城山遺跡植物遺体同定結果一覧表.....	191

付図目次

- 付図 1 旧石器時代・弥生前期以前造構面平面図
- 付図 2 弥生時代中・後期造構面外形測量図
- 付図 3 弥生時代中・後期造構面平面図
- 付図 4 弥生時代中期造構面平面図
- 付図 5 弥生時代後期造構面平面図
- 付図 6 古墳時代造構面平面図
- 付図 7 飛鳥・奈良・平安時代造構面平面図
- 付図 8 中世造構面平面図
- 付図 9 近世造構面平面図(1)
- 付図10 近世造構面平面図(2)

図版目次

- 図版 1 旧石器時代 白色粘土面検出土址
サスカイト検出状況
- 図版 2 桶文時代晚期～弥生時代前期 自然河川 1
自然河川 2
- 図版 3 弥生時代中期 A N トレンチ方形周溝墓群（北より）
A N トレンチ方形周溝墓群（南より）
- 図版 4 弥生時代中期 A トレンチ方形周溝墓群（北より）
- 図版 5 弥生時代中期 27号方形周溝墓
- 図版 6 弥生時代中期 22号方形周溝墓
- 図版 7 弥生時代中期 31号方形周溝墓
21号方形周溝墓
- 図版 8 弥生時代中期 21号方形周溝墓北東周溝供獻土器
23号方形周溝墓
- 図版 9 弥生時代中期 23号方形周溝墓
23号方形周溝墓 1～5号主体部
23号方形周溝墓 1号・4号主体部

図版10 弥生時代中期	23号方形周溝墓 1号主体部
図版11 弥生時代中期	23号方形周溝墓 1号主体部
図版12 弥生時代中期	23号方形周溝墓 2号主体部
図版13 弥生時代中期	23号方形周溝墓 3号主体部
図版14 弥生時代中期	23号方形周溝墓 4号主体部
図版15 弥生時代中期	23号方形周溝墓 4号主体部
図版16 弥生時代中期	23号方形周溝墓 5号主体部
図版17 弥生時代中期	23号方形周溝墓11号・12号土器棺
図版18 弥生時代中期	23号方形周溝墓11号土器棺
図版19 弥生時代中期	23号方形周溝墓11号土器棺 (内部掘削後)
図版20 弥生時代中期	23号方形周溝墓12号土器棺
図版21 弥生時代中期	23号方形周溝墓12号土器棺 (内部掘削後)
図版22 弥生時代中期	23号方形周溝墓13号土器棺
図版23 弥生時代中期	23号方形周溝墓13号土器棺 (内部掘削後)
図版24 弥生時代中期	23号方形周溝墓14号土器棺
図版25 弥生時代中期	23号方形周溝墓15号・16号土器棺
図版26 弥生時代中期	23号方形周溝墓15号土器棺
	23号方形周溝墓16号土器棺
	23号方形周溝墓24号土器棺
	23号方形周溝墓24号土器棺 (内部掘削後)
	23号方形周溝墓北東・南東周溝供獻土器
	23号方形周溝墓北西周溝供獻土器
	23号方形周溝墓北東周溝供獻土器
	23号方形周溝墓北東周溝供獻土器 (部分)
	23号方形周溝墓南東周溝供獻土器
	23号方形周溝墓南東周溝供獻土器
	23号方形周溝墓南東周溝供獻土器 (部分)
	23号方形周溝墓南東周溝供獻土器
	23号方形周溝墓南西周溝供獻土器
	23号方形周溝墓北西周溝供獻土器
	20号方形周溝墓
	34号方形周溝墓
	19号方形周溝墓

図版27	弥生時代中期	19号方形周溝墓
図版28	弥生時代中期	19号方形周溝墓
図版29	弥生時代中期	19号方形周溝墓 1号・2号主体部検出状況
図版30	弥生時代中期	19号方形周溝墓 1号・2号主体部
図版31	弥生時代中期	19号方形周溝墓 1号主体部
図版32	弥生時代中期	19号方形周溝墓 9号土器棺
図版33	弥生時代中期	19号方形周溝墓 9号土器棺（内部掘削後）
図版34	弥生時代中期	19号方形周溝墓 10号土器棺
図版35	弥生時代中期	19号方形周溝墓 17号土器棺
図版36	弥生時代中期	19号方形周溝墓 17号土器棺（内部掘削後）
図版37	弥生時代中期	19号方形周溝墓 25号土器棺
図版38	弥生時代中期	19号方形周溝墓 26号土器棺
図版39	弥生時代中期	19号方形周溝墓北東周溝供獻土器
図版40	弥生時代中期	19号方形周溝墓北東周溝供獻土器（部分）
図版41	弥生時代中期	19号方形周溝墓南西周溝供獻土器
図版42	弥生時代中期	19号方形周溝墓南西周溝供獻土器（部分）
図版43	弥生時代中期	19号方形周溝墓盛土内供獻土器
		19号方形周溝墓盛土内供獻土器
		18号方形周溝墓
		29号方形周溝墓
		29号方形周溝墓
		29号方形周溝墓 19号土器棺
		29号方形周溝墓 23号土器棺
		29号方形周溝墓 23号土器棺（内部掘削後）
		17号方形周溝墓
		17号方形周溝墓
		17号方形周溝墓
		17号方形周溝墓 1号主体部

- 図版44 弥生時代中期 17号方形周溝墓 1号主体部
- 図版45 弥生時代中期 17号方形周溝墓 3号～5号主体部検出状況
- 図版46 弥生時代中期 17号方形周溝墓 3号～5号主体部
- 図版47 弥生時代中期 17号方形周溝墓 4号主体部
- 図版48 弥生時代中期 17号方形周溝墓 4号主体部
- 図版49 弥生時代中期 17号方形周溝墓 7号土器棺
- 図版50 弥生時代中期 17号方形周溝墓 7号土器棺（内部掘削後）
- 図版51 弥生時代中期 17号方形周溝墓 8号土器棺
- 図版52 弥生時代中期 17号方形周溝墓20号～22号土器棺
- 図版53 弥生時代中期 17号方形周溝墓20号～22号土器棺
- 図版54 弥生時代中期 17号方形周溝墓20号～22号土器棺
- 図版55 弥生時代中期 17号方形周溝墓21号土器棺
- 図版56 弥生時代中期 17号方形周溝墓21号土器棺（内部掘削後）
- 図版57 弥生時代中期 17号方形周溝墓22号土器棺
- 図版58 弥生時代中期 17号方形周溝墓22号土器棺（内部掘削後）
- 図版59 弥生時代中期 17号方形周溝墓22号土器棺
- 17号方形周溝墓北東周溝供獻土器
- 17号方形周溝墓北東周溝供獻土器（部分）
- 17号方形周溝墓南東周溝供獻土器
- 17号方形周溝墓南東周溝供獻土器（部分）
- 17号方形周溝墓南西・北西周溝供獻土器
- 17号方形周溝墓南西周溝供獻土器
- 17号方形周溝墓南西周溝供獻土器（部分）
- 17号方形周溝墓北面周溝供獻土器
- 17号方形周溝墓北西周溝供獻土器（部分）
- 17号方形周溝墓北西周溝供獻土器（部分）
- 17号方形周溝墓盛土内供獻土器
- 17号方形周溝墓盛土内供獻土器
- 16号方形周溝墓
- 16号方形周溝墓
- 16号方形周溝墓 1号主体部

- 図版60 弥生時代中期 16号方形周溝墓 1号主体部墓塚内供獻土器
- 図版61 弥生時代中期 16号方形周溝墓南西周溝供獻土器
- 図版62 弥生時代中期 16号方形周溝墓北東周溝供獻土器
- 図版63 弥生時代中期 1号方形周溝墓
- 図版64 弥生時代中期 1号方形周溝墓 6号土器棺
- 図版65 弥生時代中期 2号方形周溝墓
- 図版66 弥生時代中期 3号方形周溝墓
- 図版67 弥生時代中期 3号方形周溝墓北周溝供獻土器
- 図版68 弥生時代中期 4号方形周溝墓
- 図版69 弥生時代中期 4号方形周溝墓 1号土器棺
- 図版70 弥生時代中期 4号方形周溝墓 1号土器棺 (内部掘削後)
- 図版71 弥生時代中期 4号方形周溝墓 2号土器棺
- 図版72 弥生時代中期 4号方形周溝墓 2号土器棺 (内部掘削後)
- 図版73 弥生時代中期 4号方形周溝墓南西周溝供獻土器
- 図版74 弥生時代中期 4号方形周溝墓南西周溝供獻土器
- 図版75 弥生時代中期 38号方形周溝墓
- 図版76 弥生時代中期 39号方形周溝墓
- 図版77 弥生時代中期 6号方形周溝墓
- 図版78 弥生時代中期 6号方形周溝墓 1号主体部
- 図版79 弥生時代中期 6号方形周溝墓北周溝供獻土器
- 図版80 弥生時代中期 5号方形周溝墓
- 図版81 弥生時代中期 7号方形周溝墓
- 図版82 弥生時代中期 7号方形周溝墓 3号土器棺
- 図版83 弥生時代中期 7号方形周溝墓 3号土器棺 (内部掘削後)
- 図版84 弥生時代中期 7号方形周溝墓 4号土器棺
- 図版85 弥生時代中期 7号方形周溝墓 4号土器棺 (内部掘削後)
- 図版86 弥生時代中期 7号方形周溝墓南周溝供獻土器
- 図版87 弥生時代中期 10号方形周溝墓
- 図版88 弥生時代中期 8号方形周溝墓
- 図版89 弥生時代中期 8号方形周溝墓 5号土器棺
- 図版90 弥生時代中期 8号方形周溝墓 5号土器棺 (内部掘削後)
- 図版91 弥生時代中期 11号方形周溝墓
- 図版92 弥生時代中期 12号方形周溝墓
- 図版93 弥生時代中期 12号方形周溝墓北東周溝供獻土器

図版77	弥生時代中期	12号方形周溝墓北東周溝供獻土器（部分）
図版78	弥生時代中期	12号方形周溝墓北東周溝供獻土器（部分）
図版79	弥生時代中期	36号方形周溝墓
図版80	弥生時代中期	37号方形周溝墓
図版81	弥生時代中期	13号方形周溝墓
図版82	弥生時代中期	14号方形周溝墓
図版83	弥生時代中期	14号方形周溝墓西周溝供獻土器
図版84	古墳時代中期	14号方形周溝墓西周溝供獻土器（部分）
図版85	古墳時代中期	14号方形周溝墓西周溝供獻土器（部分）
図版86	古墳時代中期	25号方形周溝墓
図版87	古墳時代中期	豎穴住居址
図版88	古墳時代中期	溝 1
図版89	古墳時代中期	溝 1 遺物検出状況
図版90	古墳時代中期	土塁 1
図版91	古墳時代中期	溝 2
図版92	古墳時代中期	溝 3
		土塁 3
		城山 1 号墳
		城山 1 号墳
		城山 1 号墳周溝内遺物検出状況
		城山 1 号墳周溝内遺物検出状況
		城山 1 号墳周溝内遺物検出状況（部分）
		城山 2 号墳
		城山 2 号墳
		城山 2 号墳周溝内遺物検出状況
		城山 7 号墳
		城山 7 号墳周溝内遺物検出状況
		城山 7 号墳周溝内遺物検出状況（部分）
		城山 7 号墳周溝内遺物検出状況（部分）
		城山 3 号墳
		城山 3 号墳円筒埴輪検出状況
		城山 3 号墳・4 号墳
		城山 4 号墳
		城山 4 号墳主体部掘削後

図版93	古墳時代中期	城山4号墳主体部 城山4号墳主体部内、人骨齒・副葬品検出状況 城山4号墳墳丘内韓式土器検出状況
図版94	古墳時代中期	城山5号墳 城山5号墳主体部
図版95	古墳時代中期	城山6号墳 城山6号墳主体部
図版96	古墳時代中期	城山6号墳主体部副葬品検出状況 城山6号墳周溝内韓式土器検出状況
図版97	古墳時代	溝状遺構検出状況 城山3号・4号・5号墳・溝状遺溝
図版98	古墳時代	自然河川 自然河川
図版99	飛鳥時代・奈良時代・平安時代	自然河川1 自然河川2
図版100	飛鳥時代・奈良時代・平安時代	自然河川2遺物検出状況 自然河川2遺物検出状況 自然河川2流木検出状況
図版101	飛鳥時代・奈良時代・平安時代	溝状遺構和同閒珍検出状況 溝状遺構万年通宝検出状況 土埴1遺物検出状況
図版102	飛鳥時代・奈良時代・平安時代	平安時代後期の水田 平安時代後期足跡
図版103	中世	溝1 溝1内下駄検出状況
図版104	近世	自然河川1 取水施設
図版105	近世	取水施設（蓋除去後） 取水施設（掘方掘削後）
図版106	旧石器時代遺物	旧石器A面 旧石器B面
図版107	縄文時代遺物 (1)	
図版108	縄文時代遺物 (2)	
図版109	弥生時代前期遺物 (1)	

- 図版110 弥生時代前期遺物 (2)
- 図版111 弥生時代中期遺物 (1)
- 図版112 弥生時代中期遺物 (2)
(3)
- 図版113 弥生時代中期遺物 (3)
- 図版114 弥生時代中期遺物 (4)
- 図版115 弥生時代中期遺物 (5)
- 図版116 弥生時代中期遺物 (6)
- 図版117 弥生時代中期遺物 (7)
- 図版118 弥生時代中期遺物 (8)
- 図版119 弥生時代中期遺物 (9)
- 図版120 弥生時代中期遺物 (10)
- 図版121 弥生時代中期遺物 (11)
- 図版122 弥生時代中期遺物 (12)
- 図版123 弥生時代中期遺物 (13)
- 図版124 弥生時代中期遺物 (14)
- 図版125 弥生時代中期遺物 (15)
- 図版126 弥生時代中期遺物 (16)
- 図版127 弥生時代中期遺物 (17)
- 図版128 弥生時代中期遺物 (18)
- 図版129 弥生時代中期遺物 (19)
- 図版130 弥生時代中期遺物 (20)
(21)
- 図版131 弥生時代中期遺物 (21)
- 24号方形周溝墓・27号方形周溝墓・22号方形周溝墓・21号方形周溝墓
- 23号方形周溝墓11号土器棺・23号方形周溝墓12号土器棺・23号方形周溝墓13号土器棺
- 23号方形周溝墓14号土器棺・23号方形周溝墓15号土器棺・23号方形周溝墓16号土器棺・23号方形周溝墓24号土器棺
- 23号方形周溝墓北西周溝
- 23号方形周溝墓北西周溝・23号方形周溝墓北東周溝
- 23号方形周溝墓北東周溝
- 23号方形周溝墓北東周溝
- 23号方形周溝墓北東周溝
- 23号方形周溝墓南東周溝
- 23号方形周溝墓南東周溝
- 23号方形周溝墓南東周溝
- 23号方形周溝墓南東周溝
- 23号方形周溝墓盛土内
- 23号方形周溝墓盛土下溝内
- 19号方形周溝墓9号土器棺・19号方形周溝墓10号土器棺
- 19号方形周溝墓17号土器棺・19号方形周溝墓25号土器棺
- 19号方形周溝墓18号土器棺・19号方形周溝墓26号土器棺
- 19号方形周溝墓北東周溝・19号方形周溝墓南東周溝
- 19号方形周溝墓南西周溝
- 19号方形周溝墓盛土内・19号方形周溝墓盛土下溝内
- 29号方形周溝墓19号土器棺・29号方形周溝墓23号土器棺・29号方形周溝墓南東周溝
- 29号方形周溝墓南東周溝

図版132 弥生時代中期遺物	(22)	29号方形周溝墓南東周溝・17号方形周溝墓7号土器棺、17号方形周溝墓8号土器棺
図版133 弥生時代中期遺物	(23)	17号方形周溝墓20号土器棺・17号方形周溝墓21号土器棺
図版134 弥生時代中期遺物	(24)	17号方形周溝墓22号土器棺・17号方形周溝墓北東周溝
図版135 弥生時代中期遺物	(25)	17号方形周溝墓北東周溝・17号方形周溝墓南東周溝
図版136 弥生時代中期遺物	(26)	17号方形周溝墓南東周溝
図版137 弥生時代中期遺物	(27)	17号方形周溝墓南東周溝・34号方形周溝墓
図版138 弥生時代中期遺物	(28)	17号方形周溝墓南西周溝
図版139 弥生時代中期遺物	(29)	17号方形周溝墓南西周溝
図版140 弥生時代中期遺物	(30)	17号方形周溝墓南西周溝
図版141 弥生時代中期遺物	(31)	17号方形周溝墓北西周溝
図版142 弥生時代中期遺物	(32)	17号方形周溝墓北西周溝
図版143 弥生時代中期遺物	(33)	17号方形周溝墓盛土内
図版144 弥生時代中期遺物	(34)	17号方形周溝墓盛土内・17号方形周溝墓盛土下溝内
図版145 弥生時代中期遺物	(35)	16号方形周溝墓主体部墓塚内・16号方形周溝墓周溝
図版146 弥生時代中期遺物	(36)	16号方形周溝墓周溝
図版147 弥生時代中期遺物	(37)	1号方形周溝墓・3号方形周溝墓
図版148 弥生時代中期遺物	(38)	4号方形周溝墓1号土器棺・4号方形周溝墓2号土器棺
図版149 弥生時代中期遺物	(39)	4号方形周溝墓周溝・1号方形周溝墓6号土器棺
図版150 弥生時代中期遺物	(40)	6号方形周溝墓
図版151 弥生時代中期遺物	(41)	5号方形周溝墓・40号方形周溝墓・7号方形周溝墓3号土器棺
図版152 弥生時代中期遺物	(42)	7号方形周溝墓4号土器棺・7号方形周溝墓
図版153 弥生時代中期遺物	(43)	7号方形周溝墓
図版154 弥生時代中期遺物	(44)	8号方形周溝墓5号土器棺・8号方形周溝墓・42号方形周溝墓
図版155 弥生時代中期遺物	(45)	12号方形周溝墓・36号方形周溝墓・13号方形周溝墓

図版156	弥生時代中期遺物	(46)	13号方形周溝墓・13号方形周溝墓石器
図版157	弥生時代中期遺物	(47)	14号方形周溝墓
図版158	弥生時代中期遺物	(48)	方形周溝墓出土石器
図版159	弥生時代中期遺物	(49)	竪穴住居址付近出土石器
図版160	弥生時代中期遺物	(50)	竪穴住居址・溝1出土石器
図版161	弥生時代中期遺物	(51)	溝1
図版162	弥生時代中期遺物	(52)	土塁1・溝2・溝3・土塁2・土塁3
図版163	弥生時代後期～古墳時代前期遺物		
図版164	古墳時代中期遺物	(1)	城山1号墳
図版165	古墳時代中期遺物	(2)	城山2号墳・城山7号墳
図版166	古墳時代中期遺物	(3)	城山4号墳主体部副葬品玉類
図版167	古墳時代中期遺物	(4)	城山4号墳主体部副葬品堅櫛・城山4号墳・城山6号墳
図版168	古墳時代中期遺物	(5)	城山5号墳主体部土器棺・城山5号墳
図版169	古墳時代遺物		城山6号墳主体部副葬品堅櫛・自然河川埋没後堆積層出土遺物
図版170	飛鳥・奈良・平安時代遺物	(1)	自然河川1 自然河川1埋没後堆積層出土遺物
図版171	飛鳥・奈良・平安時代遺物	(2)	自然河川2
図版172	飛鳥・奈良・平安時代遺物	(3)	自然河川2・自然河川2埋没後堆積層出土遺物
図版173	飛鳥・奈良・平安時代遺物	(4)	土塁
図版174	飛鳥・奈良・平安時代遺物	(5)	溝状造構出土皇朝鏡
図版175	中世・近世遺物		溝・自然河川
図版176	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓
図版177	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓主体部
図版178	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓1号土器棺
図版179	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓1号土器棺(内部掘削後)
図版180	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓2号土器棺
図版181	龜井31 弥生時代中期		1号方形周溝墓2号土器棺(内部掘削後)
			1号方形周溝墓3号土器棺
			1号方形周溝墓3号土器棺(内部掘削後)
			1号方形周溝墓4号土器棺
			1号方形周溝墓4号土器棺(内部掘削後)

- 図版182 亀井31 弥生時代中期 1号方形周溝墓 5号土器棺
- 図版183 亀井31 弥生時代中期 1号方形周溝墓 5号土器棺
- 図版184 亀井31 近世 1号方形周溝墓 5号土器棺（内部掘削後）
- 自然河川
自然河川
- 図版185 亀井31 弥生時代中期遺物 (1) 1号方形周溝墓 1号土器棺・1号方形周溝墓 2号土器棺
- 図版186 亀井31 弥生時代中期遺物 (2) 1号方形周溝墓 3号土器棺・1号方形周溝墓 4号土器棺
- 図版187 亀井31 弥生時代中期遺物 (3) 1号方形周溝墓 5号土器棺・1号方形周溝墓盛土
・弥生時代中期遺構面
- 図版188 亀井31 弥生時代後期、
中近世遺物 弥生時代後期自然河川・中・近世自然河川

第1章 はじめに

城山遺跡は、大阪市平野区長吉出戸から長吉長原にかけて所在する。北は龜井遺跡、南は長原遺跡と接している。調査は、日本道路公団が進めている近畿自動車道天理～吹田線（通称・大阪線）建設に伴うもので、府道中央環状線内の高速道路用地を対象としている。

城山遺跡は、大阪市交通局が建設を進めていた地下鉄谷町線の延長工事に伴う試掘調査によって、長原遺跡とともに発見されたものである。この試掘調査は、財団法人大阪文化財センターによって、昭和48年11月より49年5月にかけて地下鉄準備工の工程にあわせて随時実施された。この時の調査方法が機械掘削後の断面観察を主としたものであったため、遺跡の範囲、遺跡面等の把握が不十分であったことは、後の本調査で明らかになっている。このことは、試掘と言えども十分な期間と費用を掛けなければ、結局のところ、設計や工程の変更等により以上の手間とコストがかかるということであろう。

また、城山遺跡という名称についても、大阪市はそれを使用せず、その大部分を含めて長原遺跡と総称しているのに対し、大阪府の指導下にある近畿道のほうは長原遺跡と城山遺跡とに分離している。そのため、調査主体によって遺跡名称が異なるという混乱を起こしている。このようなことは、将来的には正されなければならないが、遺構面が重複している沖積地の遺跡の場合、簡単にいかない面もある。近畿道の調査では、約13km間ほぼ連続して遺跡が連なっているが、遺跡間を画する自然要因が少ないため、各時期の遺構群の広がりが相互にオーバーラップする部分がある。そのような場合、現地表面上で画一的に線引きしても、有意な境界にならないことは言うまでもない。長原・城山遺跡においても、その境界設定は、龜井遺跡との関係からして難しい問題を有している。

城山遺跡の調査は、当初は昭和51年度より始まった長原遺跡の次に着手する予定であったが、長原遺跡調査終了後、調査スケジュールの大幅変更があり、昭和58年3月より始めることになった。遺跡範囲は、日本道路公団の測量点でSTA137+80から148+11までの約1031mである。調査は、それを3分割し、北より1・2・3調査区とした。第1調査区は、その内のSTA140+39までの約263mである。

なお、城山遺跡と龜井遺跡の間には、約180mの遺跡として周知されない部分があったが、城山遺跡のAトレンチ北端部、および既に調査を終了していた龜井遺跡Dトレンチ南端部でも遺構面が途切れないことが明らかになった。そこで、STA136+40付近にある水路を境に以北を龜井遺跡、以南を城山遺跡とし、追加調査をおこなった。龜井遺跡部分は、Dトレンチ南端との間に橋脚が1本入るのみであったので、それをKM31トレンチとしている。城山遺跡部分は、ANトレンチとしてAトレンチを北に延長している。

調査は、調査面積の増加により期間を延長し、昭和60年9月現地調査を終了した。

第2章 調査の方法

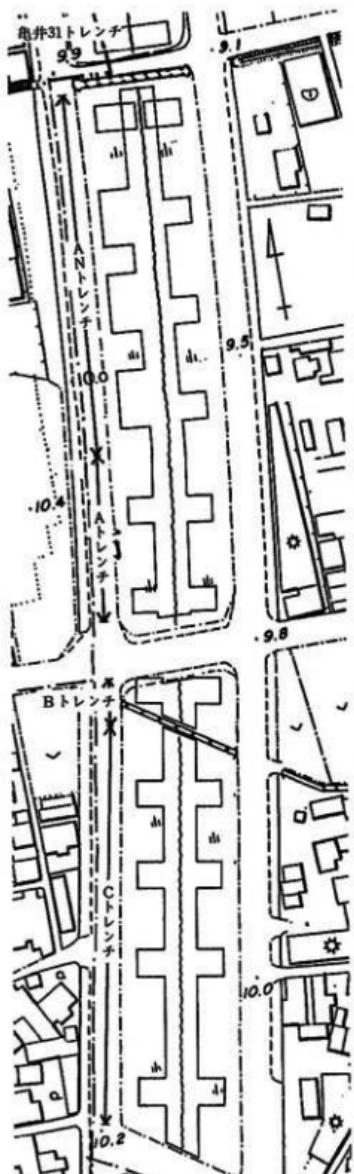
城山遺跡の調査は、大阪線において瓜生堂遺跡以来採用されている「トレンチ調査方式」で実施された。この調査方法は、まず、高速道路用地中央を縦断する形で幅10mのトレンチを設定する。この「トレンチ部の調査」は、原則として最終構造面までを調査して遺構、遺物の分布状態を把握する。その結果を基に、大阪府教育委員会と日本道路公団が協議し、高架道路の橋脚の位置をできるだけ遺構・遺物の破壊の少ない部分に決定をする。その後、「切抜げ部の調査」として、橋脚によって破壊される部分の調査が実施される。橋脚基礎部は、路線の中央部が既にトレンチ部において調査済のため、両端2ヶ所に分離されることになる。

トレンチ部の調査は、全掘するのが原則であるが、性格が明らかで、しかも残存状態のよい遺構については、その時点で下層への掘削を停止し、保存協議に掛けることになっている。ただ、今回の弥生時代中期の方形周溝墓群のように、広範囲に密集して協議対象の遺構が検出された場合、それを全面的に保存することは、高速道路の建設費用等との関係で困難な面もある。そこで今回は、やむをえず方形周溝墓群の中に橋脚を建設することになったが、その替わり、トレンチ部で検出されていて、その大部分が破壊にさらされる方形周溝墓については、切抜げ部のトレンチを拡張して一基を全掘できるようにした。

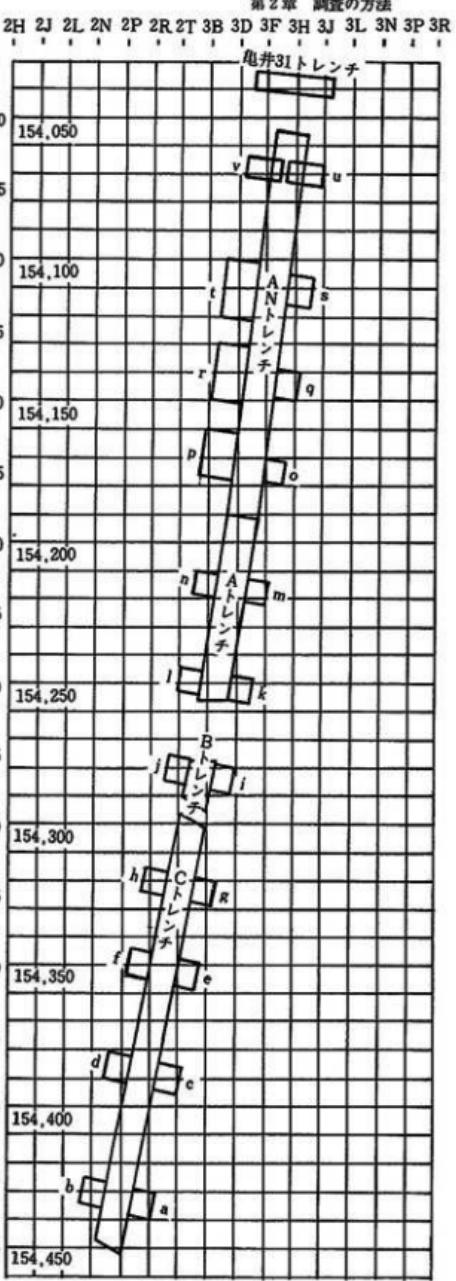
第1調査区は、当初、道路、水路によってA・B・Cの3本のトレンチに分断された。Aトレンチは城山遺跡北端部のS T A 137+80から府道太子郷長吉線までの約66m、Bトレンチは道路から水路までの約5m、Cトレンチは横断道路までの約150mである。その後、Aトレンチが約134m北に拡張され、ANトレンチと命名された。切抜げ部のトレンチ番号は、Cトレンチの南端東側をaトレンチ、西側をbトレンチとし、以下その順に北へアルファベットの小文字を連ねるものである。

また、龜井遺跡の最南端で追加された橋脚部の調査は、龜井遺跡Dトレンチがこの部分にまで及んでいないため、橋脚部全域を対象としている。トレンチ番号は、龜井遺跡の切抜げ部のトレンチ番号を続けることとし、KM31トレンチとした。

地区割は、城山遺跡で共通のものを使用している。原点は、⁸大阪市文化財協会が「長原遺跡発掘調査報告Ⅲ」で提唱した500m区画の9K区の基点においていた。その国家座標値は、第VI系のX-153,500,000、Y-39,000,000である。区画は100mと5mの2種類を設定した。100m区画は、東方向に算用数字の1、2、3を使用する。その区画内をさらに5mに細分し、西側を起点にA～Tとする。これを組み合わせて1A、3Cと表記する。南方向へは5mで細分し、算用数字3桁で通し番号を付けている。区画名は、東・南の区割線を併記することとし、杭は、東南隅がその区画を代表する。この両者を合わせて表記すると1A001区、3C321区となる。



第1図 トレンチ配値図



第2図 調査区割り付け図

第3章 位置と環境

城山遺跡は大阪市の南東部、平野区長吉出戸地区を中心とした南北1kmの範囲に所在する旧石器時代からの各時代の遺構が重層的に存在する複合遺跡である。当遺跡は昭和48年、大阪市営高速鉄道3号線建設に伴う試掘調査によって発見されたが、その後の調査によって、北に位置する^(注1)亀井遺跡や、南の長原遺跡と一連性を持つことが明らかにされている。

城山遺跡の所在する大阪市東南部の地理的、歴史的な環境について数多く報告されているが、ここで簡単にまとめておく。^(注2)

大和川南部にひかえる羽曳野丘陵から、河内台地と称される台地が北に派生している。この台地は「馬地」の所在する開折谷によって西の瓜破台地と東の長原台地にわかれている。当遺跡は長原台地の東北の縁辺部から旧大和川が形成した沖積地にかけて立地している。これまでの調査から、縄文晩期以前の基底面のレベルをみてみると、大和川右岸でT.P.+11m、城山J区T.P.+7m、城山A区T.P.+4mを測り、城山AN区の北端付近で急激に落ち込み、平野川左岸でT.P.+1m前後にみられ、したがってAN区北端部付近で約3m落ち込んでいる。また那須孝悌氏等の調査によって亀井ポンプ場の南約80mに縄文海進時の汀線があったと考えられている。これらのことから、AN区の北端部に、長原台地の北端を規定する小規模の段丘崖が存在しているといえる。

城山遺跡の周辺には歴史的空间を共有した数多くの遺跡が存在しており、ここで周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡としては、近畿地方の標式遺跡である国府遺跡が当遺跡の南東5kmの国府台地に立地している。河内台地では長原遺跡東南部、八尾南遺跡、長吉野山遺跡、瓜破遺跡、上町台地の山之内遺跡、桑津遺跡などで翼状剣片や尖頭器が出土している。特に長原遺跡では、昭和52~53年の調査で、いわゆる長原地山層から接合資料を含むサスカイトフレーク群が出土しており、この地域の旧石器時代解明に重要な手がかりを与えた。

縄文時代前期から中期には海進の影響により河内平野全体が内湾化し、汀線が城山遺跡北部にまで達していた。これを裏づけるように、この時期の遺跡は生駒山麓や国府台地などの河内平野をとりまく台地や扇状地の頂部近くに立地しており、河内台地では遺跡の存在は確認されていない。

縄文時代後期になると海退現象による河内湾の干涸化と大和川による沖積平野の形成が開始されるが、これとともに集落も低地に進出する傾向がみられる。城山遺跡、長原遺跡、八尾南遺跡で河道内などから遺物が出土しているほか、沖積平野中にある久宝寺遺跡では多数の土器が良好な遺存状態で出土している。

縄文時代晩期では、長原遺跡が終末期の標式遺跡として著名であり、集落や石器工房跡、土器棺墓群などが検出されている。また、美園遺跡、若江北遺跡など沖積地に立地する遺跡では弥生時代前期の土器を共伴して検出されている。

弥生時代になると、丘陵や扇状地の縁辺部、沖積平野の自然堤防を中心には遺跡数は激増する。河内台地では当遺跡や長原遺跡、瓜破遺跡があり、北には平野川の自然堤防上に龜井遺跡、加美遺跡、久宝寺遺跡、上町台地には山之内遺跡、遠里小野遺跡、桑津遺跡などがある。当遺跡と一部重複する龜井遺跡では龜大な土器とともに大規模な前期末から中期の方形周溝墓群や後期の銅鏡、貨泉、銅鋳片などが検出されており、その内容からこの地域の中核的な集落に位置づけられる。この他、加美遺跡では墳頂部で南北22m、東西11m、封土高2mを測る巨大な方形周溝墓をはじめとする中期の方形周溝墓群が検出されている。

古墳時代の遺跡は、台地上では前代の集落を継承しているが、平野部では大和川の度重なる氾濫や河道の変化によって消長を繰り返しながらも広範囲に分布している。加美遺跡では弥生時代の方形周溝墓が埋没した後、あらたに古墳時代初頭から前期の住居址や古墳が多く量の土器、銅剣を伴つて検出されている。長原遺跡では4世紀末頃の塚の本古墳をはじめ150基以上の5世紀～6世紀の古墳が検出されているが、その大部分は後世の開発によって上部を削平されている。しかし当遺跡の西に位置する出戸4丁目所在遺跡では、2基の埋葬施設や円筒埴輪列を残す古墳が検出されている他、長原遺跡でも最近の調査で6世紀初頭頃の前方後円墳が発見され、横穴式石室の一部が残っている。

古墳時代の集落は八尾南遺跡で前期の住居址や水田が検出されているほか、出戸4丁目や竹瀬遺跡で5・6世紀頃の集落址が検出され、古墳群造成主体の一端は明らかになったが、今後も台地全体に分布する古墳群の変遷や造成主体の具体的な解明が待たれる。

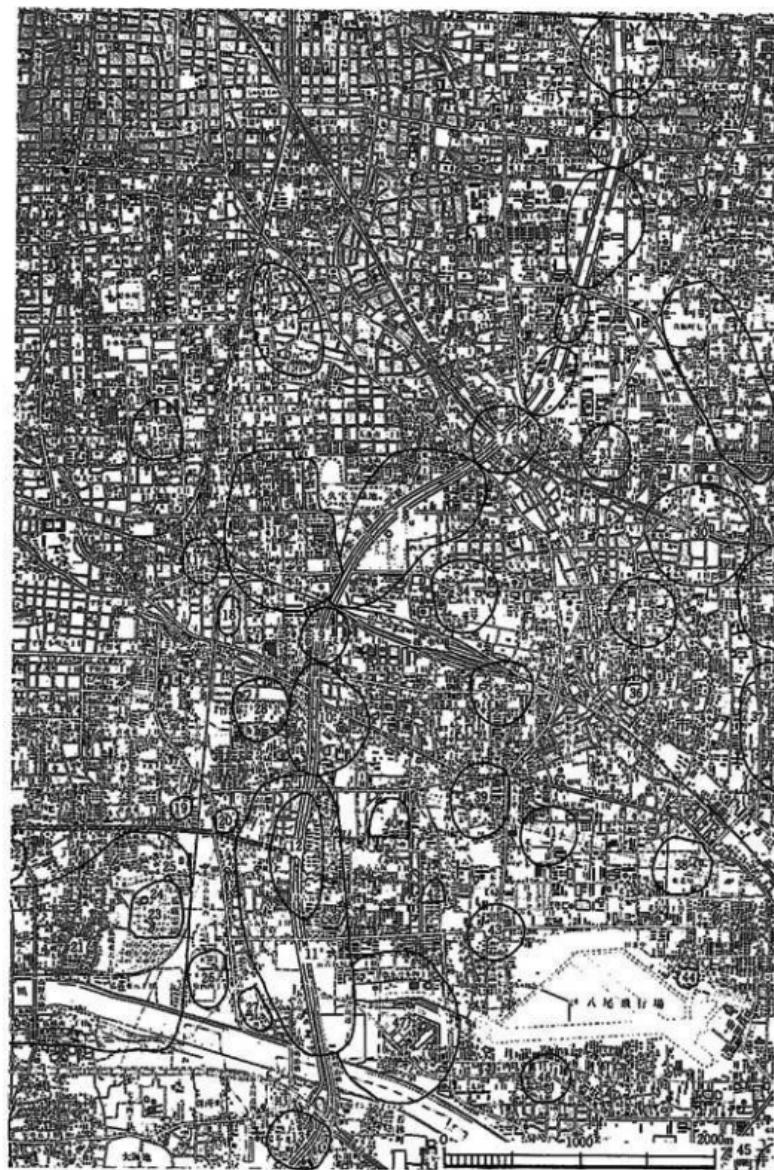
7世紀以降、この地域では耕地開発が急速に進展する。その契機を求める上とすれば東除川の開拓による灌漑施設の整備をあげることができる。古墳の間を遙らす畦畔の景観は壯觀であり、一豪族を超えた国家的な規模での開発をうかがわせる。

城山、長原地区は大阪市内では数少ない条里造構の遺存する地域である。これまでの調査で現在の条里が9世紀頃まで溯ることが明らかにされているが、その下層にある7世紀の水田との関連は不明であり、今後より詳細な調査、検討が期待される。

(注1)

(注2)

1. 瓜生堂遺跡
2. 巨摩廃寺
3. 若江北遺跡
4. 山賀遺跡
5. 友井東遺跡
6. 美園遺跡
7. 佐堂遺跡
8. 久宝寺遺跡
9. 龜井北遺跡
10. 龜井遺跡
11. 長原遺跡
12. 城山遺跡
13. 大堀城跡
14. 衣摺遺跡
15. 加美北遺跡
16. 加美遺跡
17. 長樂寺遺跡
18. 加美鞍作遺跡
19. 寒連東遺跡
20. 出戸四丁目遺跡
21. 瓜破遺跡
22. 瓜破北遺跡
23. 瓜破廃寺
24. ゴマ堂山古墳
25. 花塚山古墳
26. 長吉野山遺跡
27. 長吉川辺遺跡
28. 竹瀬遺跡
29. 萱振遺跡
30. 東郷遺跡
31. 宮町遺跡
32. 小阪合遺跡
33. 成法寺遺跡
34. 久宝寺遺跡
35. 跡部遺跡
36. 龍華寺跡
37. 中田遺跡
38. 老原遺跡
39. 太子堂遺跡
40. 城山古墳(?)
41. 植松南遺跡
42. 六反古墳(?)
43. 木の本遺跡
44. 田井中遺跡
45. 川北遺跡
46. 太田遺跡
47. 八尾南遺跡



第3図 城山遺跡周辺遺跡分布図

第4章 調査の成果

第1節 遺構面の概要と基本層序

調査は、トレンチ部の調査をまず行い、その結果に基き拡張部の調査を行った。遺構面は近世から旧石器時代まで8遺構面を検出した。トレンチ部の層序観察は、トレンチ東壁に1mの土層観察用畔を残して行なった。又トレンチ両端と、30mおきにトレンチを横断する畔を残して土層を観察した。拡張部の層序観察は、東壁と北壁に1mの土層観察用畔を残して行った。

①近世 調査区北端に、南から北へ流れる自然河川を一本、調査区南側に東西に流れる自然河川を二本検出した。いずれも近世に埋没しており、東除川とその支流と考えられる。

現地表面は、調査区南端でT.P.9.5m北端でT.P.9mを測り、北へむかってゆるやかに傾斜している。近世遺構面までの層は、近現代にその殆んどが擾乱されている。

②中世 遺構は、Cトレンチ中央に南から北へ流れる溝を一本検出したにとどまる。遺構面は、T.P.8m位の高さでほぼ水平に形成されている。

中世から近世の層序は、トレンチ東側に平行して流れる東除川の氾濫や浸蝕によって複雑な堆積状況を示している。基本となる層は、茶褐色もしくは黄褐色を呈する砂質土、砂礫土である。

③平安時代後期 遺構面はT.P.7.8mを上下する高さでほぼ水平に形成されている。Cトレンチ北端からBトレンチ、Aトレンチにかけて遺存した足跡や種子分析の結果から、この時期に水田が営まれていたと考えられるが、畦畔など明確な水田遺跡は検出されなかった。平安時代後期から中世までの層序は、青灰色・灰褐色の砂質粘土・粘質土を基本とする。又この遺構面の直上に黄褐色の砂が一部堆積し、足跡の検出を容易にしている。

④奈良時代 遺構は、Cトレンチに溝状遺構と土塙を検出した。時期を決定付ける遺物の殆んどは、この遺構から出土した。遺構面の高さは、調査区南側でT.P.7.6m、北側でT.P.7.4mである。奈良時代遺構面までの層序は、青灰色もしくは灰色の粘土が基本となる。調査区南端では、この粘土にやや緑色が帯びる。

⑤飛鳥時代 調査区北端と南端に幅約30mを測る自然河川を検出した。出土した遺物などからして、北端の自然河川が早い時期に流れ出した様で古墳時代に相当する。自然河川の埋土は、いずれも褐色砂利で占められる。遺構面は、T.P.7.3m位の高さに一定するが、ANトレンチ中央から北端自然河川までの間は、下層の遺構に規定されてかなり激しい凹凸が観られる。この時代の遺構面までの層序は、暗灰色粘土もしくはシルト質粘土で、凹凸の激しい地区ではシルトが堆積している。

⑥古墳時代 AトレンチからCトレンチ北端にかけて、7基の古墳を検出した。いずれも5C後半～6C初頭に築造された方墳である。古墳以外では、ANトレンチに幅約10mの自然河川

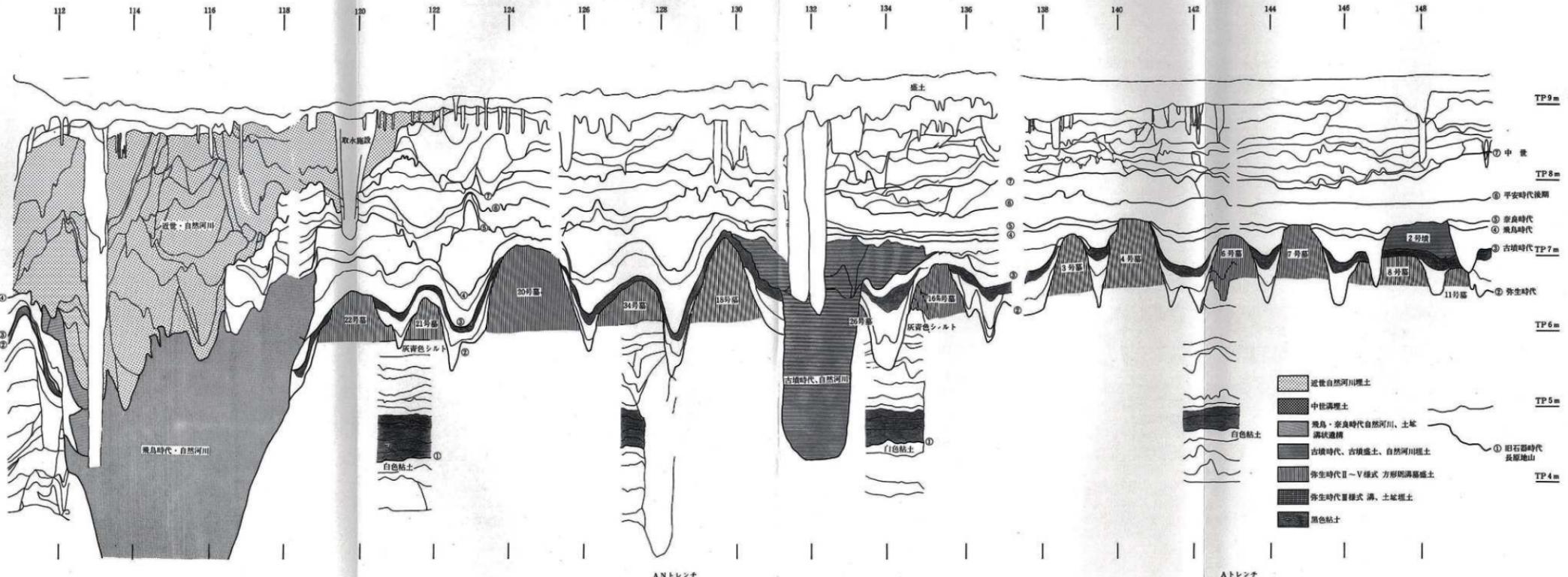
が、南東から北西へ流れていた。又、Cトレンチ古墳群の南側に隣接して、数条の溝状遺溝も検出したが性格については不明である。遺構面は、3～6号墳を検出したCトレンチ北端でT.P 7mを測り、この付近を中心にして南と北へゆるやかに傾斜している。Cトレンチ南端でT.P 6.8mであるが、ANトレンチ北端ではT.P 6mまで下がる。古墳時代遺構面までの層序は、暗灰青色粘土が基本となる。又古墳時代のベース層となる黒色粘土は、弥生時代後期（V様式新段階）から古墳時代前期（庄内式期）の間に堆積したと考えられる。

⑦弥生時代 遺構は、方形周溝墓、住居址、溝などを検出した。方形周溝墓はANトレンチからCトレンチ中央にかけて42基を確認した。時期はII様式からV様式に相当する。住居址は、拡張部のgトレンチに検出した。時期はIII様式で、14号方形周溝墓下の溝と同時期と考えられる。

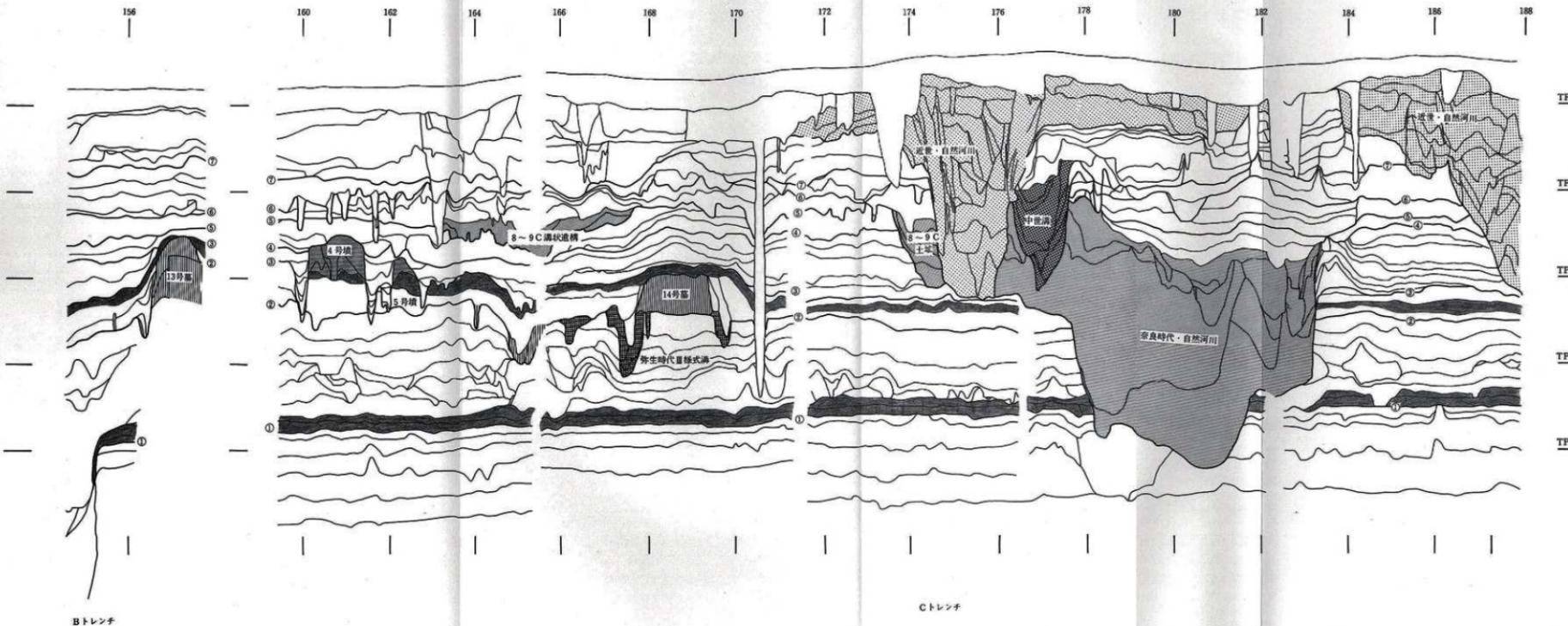
遺構面は、CトレンチでT.P 6.5mの高さに一定するが、Bトレンチから北へむかってかなり傾斜しており、ANトレンチ北端ではT.P 5.5mになる。弥生時代遺構面までの層序は、前述した黒色粘土と灰黑色、暗灰青色粘土が堆積している。特にAトレンチでは、これらの層に砂利が混じる。方形周溝墓のベース層は、灰青色シルトでやや粘質を帯びる。

⑧旧石器時代 拡張部のtトレンチに土塙を三ヶ所検出した。遺物は、石核や剣片などが出土したが、その内数点については原位置を保っていた。検出した面は、白色粘土上面である。この面は、Cトレンチ南端でT.P 5.5m、BトレンチでT.P 5m、ANトレンチの120ラインではT.P 4.3mと南から北へむかってかなり傾斜している。そしてANトレンチ北端では、T.P 3.6mまで掘削したが、白色粘土は確認できなかった。従って中位段丘外縁に相当するものと考えられる。白色粘土の上層は、上から弥生時代のベースになる層の灰青色シルト、灰青綠色粘質シルト、灰色砂、暗灰茶色シルト質粘土、黒色粘土などが堆積している。灰青色シルトと灰青綠色粘質シルトは、Cトレンチで粘土に変化する。層厚は0.5m～0.6mである。灰色砂は、暗灰茶色シルト質粘土上面を切り込み面とする自然河川（128ラインの自然河川と149～156ラインの自然河川）の氾濫によって堆積した層と考えられる。128ラインの自然河川からは縄文時代晩期の土器が出土している。尚、旧石器時代から弥生時代までの各層から遺物は全く出土していない。但し、調査区北端の最下層（T.P 3.6m）から、炭化物や貝殻に伴って縄文時代後期の土器が出土した。黒色粘土の層厚は、Cトレンチで0.2m、ANトレンチ 120 ラインで 0.6m あり、2層～4層に分層が可能である。

白色粘土の下層は、白青色粘土、灰白色粘土、青白色粘土と層をなしている。白色粘土の層厚は0.1m、白青色粘土の層厚は0.2mである。灰白色粘土から下層は砂礫を含む。



第4図 基本土層図 (AN・Aトレンチ)



第5図 基本土層図 (B・Cトレンチ)

第2節 旧石器時代

洪積段丘をなす白色粘土は、城山遺跡南端（その3調査区）でT.P.7mに確認され、北端の当該調査区（その1調査区）に向って徐々に下降する。当調査区拡張部tトレンチではT.P.4.3mに検出したが、tトレンチ北側には全くみられなかった。この付近から急下降し、洪積段丘縁辺をなすものと考えられる。遺構は、この縁辺に相当する拡張部tトレンチに検出した。

検出した遺構は、三ヶ所の不定形土塙である。土塙1は平面楕円形を呈し、長軸上幅2.2m、下幅1m、深さ0.5mを測る。埋土は、①黒灰色粘土と、②灰黑色粘土のブロックを含む灰白色砂混り粘土である。①は厚みをもって土塙壁に張りつく様に堆積していた。土塙2は、土塙1の南西に位置し、平面隅丸長方形を呈し上幅3.7m×2.7m、下幅3m×2.2m、深さ0.3mを測る。埋土は土塙1に変化なく、①が土塙底に堆積している。土塙3は、土塙2の南に隣接し、平面半円形状を呈し上幅2.6m×2m、下幅2.1m×1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は①②に加えて土塙底に③白色粘土と白青色粘土のブロック層が堆積している。

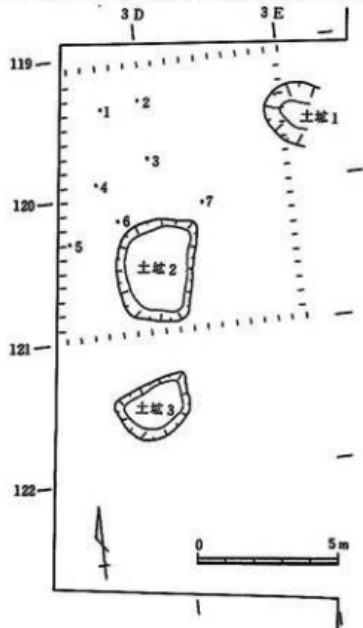
出土した土器は、石核と剝片で計11点ある。その内(1)～(7)は、土塙2の北側に原位置を保つて出土した石器で、第6図の出土位置番号に一致する。(8)～(11)は、白色粘土検出中に出土したもの

で、出土位置については不明である。

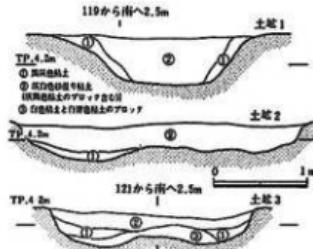
(2)、(3)、(8)、(10)、(11)が石核で、(2)、(3)、(10)は接合資料である。(11)は所謂“舟底形石器”の可能性がある。

(1)、(4)、(5)、(6)、(7)、(9)が剝片である。(6)、(7)は微少剝離痕を有する。(4)は、一度の加撃で表裏両面が剝離し、(7)は、表裏とも一撃で形成されたと思われる。

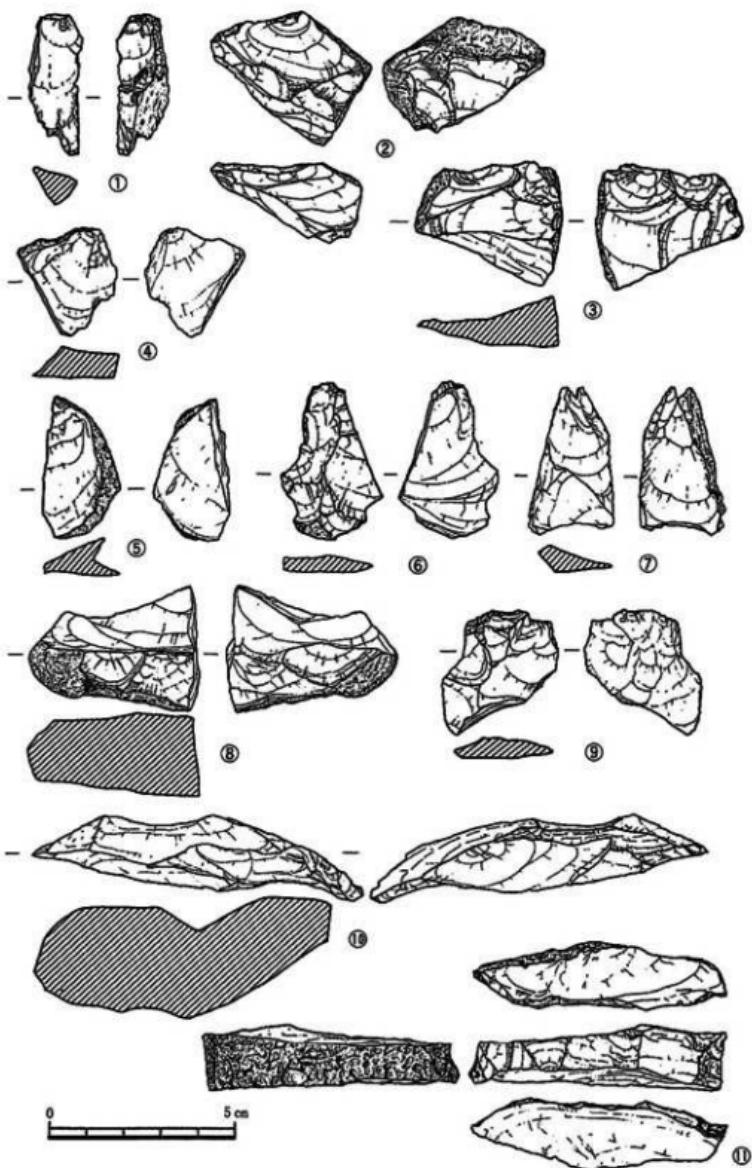
(9)は、何度も加撃したためにステップ状になっている。



第6図 白色粘土上面検出土塙・石器出土位置図



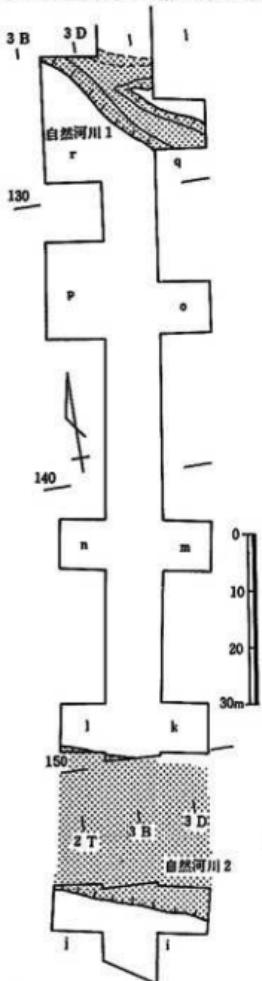
第7図 土塙断面実測図



第8図 AN tトレンチ白色粘土上面出土石器実測図

第3節 繩文時代晚期～弥生時代前期

本調査区では、縄文時代及び弥生時代前期と特定される造溝面は検出されなかった。弥生時代中期・方形周溝墓ベース層の灰青色シルト層から旧石器時代の白色粘土上面まで約1m強の層は、7～10層に分層が可能であるが、いずれの層からも遺物は出土していない。下層黒色粘土（旧石器＝白色粘土直上層）の直上層＝暗灰色粘土を切り込み面とする自然河川が、拡張部q・rトレ



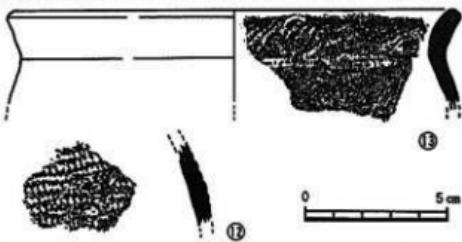
第9図 弥生時代前期以前自然河川略図

ンチ（自然河川1）と、拡張部i・j・k・lトレーニング（自然河川2）に流れる。自然河川1から、摩滅が著しく型式不明の縄文土器片(20)が出土した。縄文時代後期に比定され様が、これをもって自然河川の時期を決定する事は出来ない。一方自然河川2から使用痕の残る砾石(36)が出土した。弥生時代前期に相当する砾石の出土は、自然河川が同時期にも流れている事を示唆するに十分な遺物である。いずれにしろ時期を決定する遺物がこの2点以外に出土していないので、一応ここでは弥生時代前期以前の自然河川としておきたい。

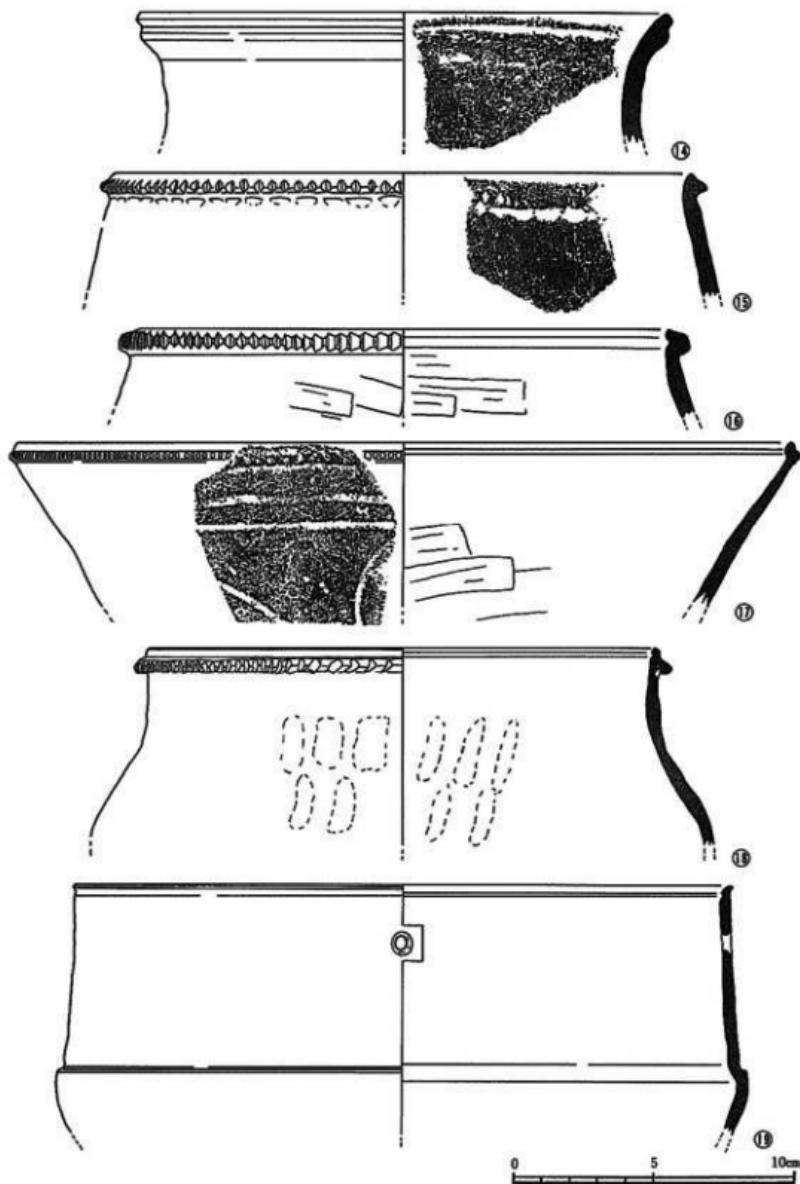
自然河川1は、幅約7m、深さ約2mを測る二本の河川がトレーニング部125ライン付近で合流し、北西に流れる。

自然河川2は、幅約25mを測り、同期に流れる本流と考えていい規模をもつ。深さは不明である。南東・北西走る。この自然河川から氾濫した層の堆積は、T.P 6mの高さで広くCトレーニングの南端にまで及ぶ。埋土はいずれも褐色砂である。

〈縄文土器〉 出土した縄文土器の内、細片以外で実測可能なものについては全て図化した。時期は、殆んど晩期であるが、A.Nトレーニング北端、T.P 3.6mに出土した(12・13)とrトレーニング自然河川から出土した(20)は後期である。晩期土器の出土地点は、Aトレーニング南端(14～19、22～29)と5号方



第10図 ANトレーニング北端落ち込み出土縄文土器片



第11図 Aトレンチ出土縄文土器

形周溝墓盛土内(30~35)に集中する。(21)は17号方形周溝墓盛土内から出土したものである。

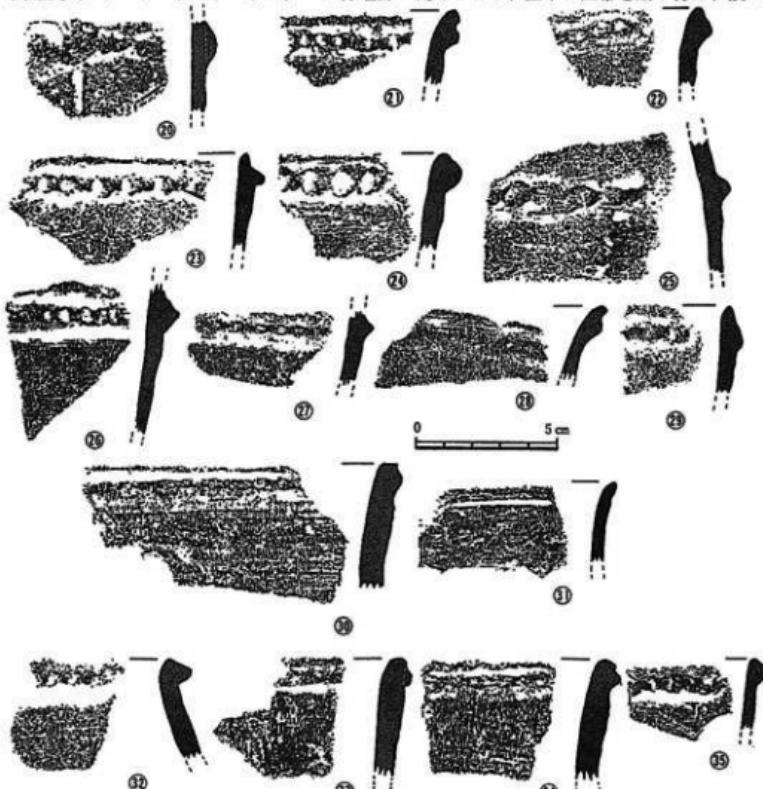
後期、体部に縄文を施すもの(12)と外反する口縁部外面に縄文を施すもの(13)である。(12)は暗茶褐色を呈し、(13)は淡茶色を呈す。鉢形土器で、後期前葉の北白川上層式に分類される。(20)は、型式不明の土器で貼り付け凸帯と沈線文を施し、黒褐色を呈す。

晩期、滋賀里IV式、船橋式、長原式の土器に分類される。

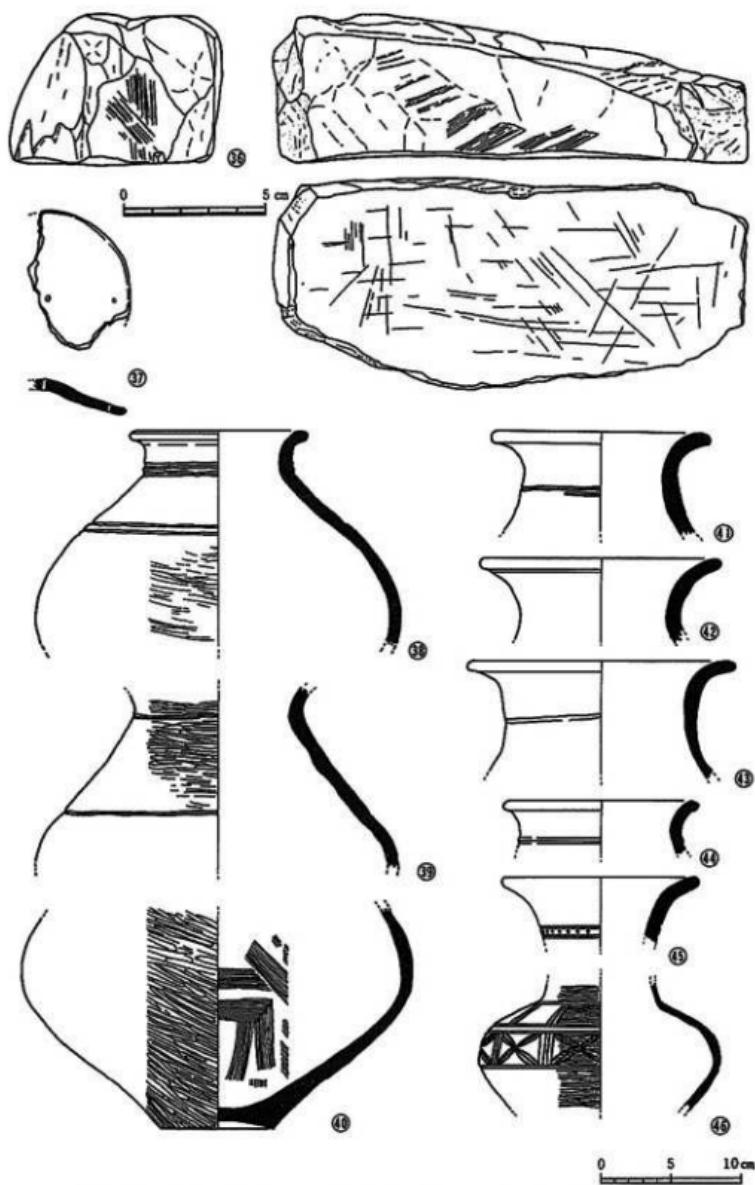
滋賀里IV式(30、33、34) 外反する口縁端部で、上端部に面をもち刻目を施す。外面端部やや下に凸帯を貼り付け、ここにも浅い刻目を施す。外面の調整は二枚貝条痕で、褐色を呈す。

船橋式(16、18、22~26) 口縁端部が丸くおわり、端部やや下に凸帯を貼り付け深い刻目を呈す。黒褐色を呈し、口縁端部内面に沈線を施すもの(16、18)もある。色調は、(22)が淡褐色を施し、(23~26)は淡茶色を呈す。深鉢形土器である。

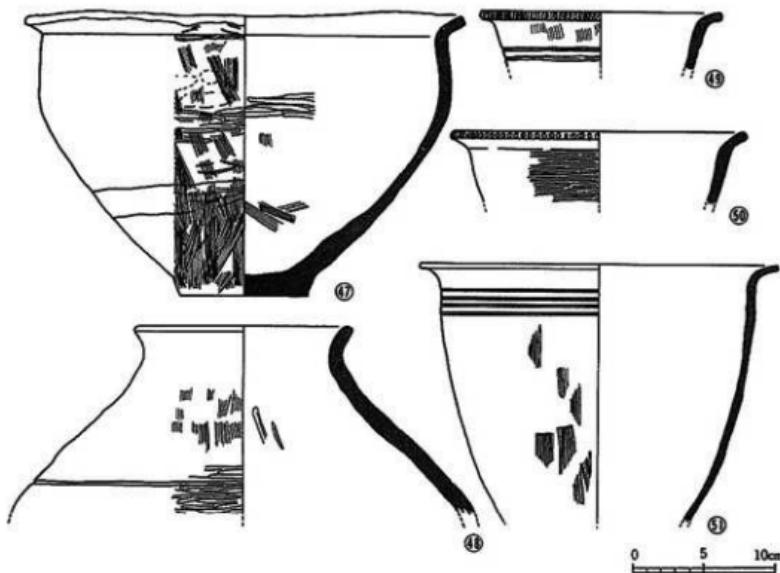
長原式(15、21、27、29、32、35) 口縁端部が丸くおわり、直下に凸帯を貼り付け、浅い刻



第12図 A・ANトレンチ出土縄文土器



第13図 B トレンチ自然河川出土石器・A トレンチ出土弥生時代前期土器



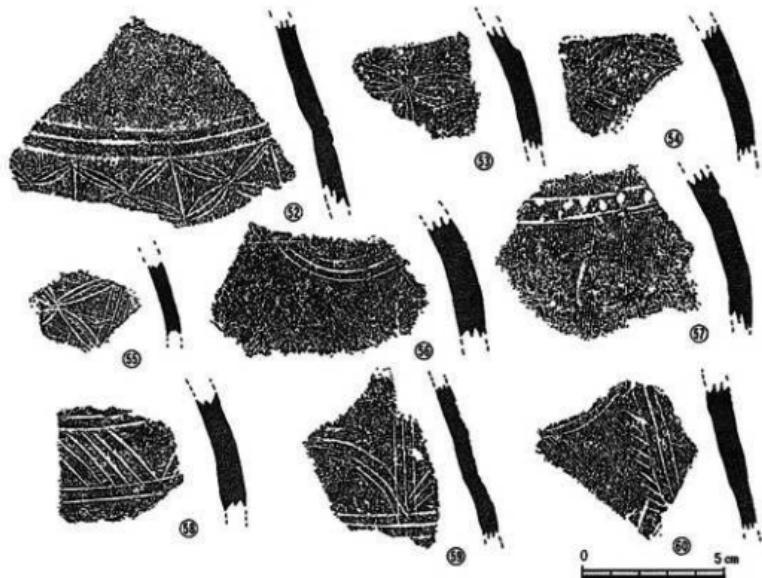
第14図 Aトレンチ出土弥生時代前期土器
目を施す。深鉢形土器で、全て淡茶色を呈す。

型式不明の土器 (14、17、19、28、31) (14)は深鉢形土器で、外反する口縁部が肥厚し、端部外面に沈線を施す。色調は黒褐色を呈す。(17)は、外反する口縁部が、端部で屈曲し短く直立する。屈曲する部分の外面に凸帯を貼り付け刻目を施す。又口縁部外面に沈線文を描く。(19)は、直立する口縁部に紐孔を穿ち、口縁端部内面に沈線を施す。深鉢形土器で、黒褐色を呈す。(28)は、浅鉢形土器で、外反する口縁端部やや下に凸帯を貼り付け黒褐色を呈す。滋賀里IV式か船橋式に比定される。(31)は、深鉢形土器で口縁端部が丸くおわり、外面端部に沈線を施す。

〈弥生時代前期土器〉 主に5号方形周溝墓盛土内から出土したもので、コンテナに約半杯分ある。その内比較的残存状態の良好なもので実測可能なものを摘出した。

壺形土器は、丸味を帯びた体部からやや直立する頸部を有し、短く外反する口縁端部が丸くおわるもの (38、41~44) と、中位に張りをもつ扁平な体部から頸部をへて短く外反する口縁部を有するもの (39、48) と、短く漏斗状にひろがる口頸部から口縁端部が丸くおわるもの (45) がある。色調は全て乳褐色もしくは淡褐色を呈す。(38)は、頸部下端と体部に削り出し凸帯を施す。(39)は、頸部と体部、(41、43)は頸部に沈線文を施す。(44)は、頸部に削り出し凸帯を施し、口縁部内面に赤色顔料を塗布している。(45)は、頸部に2条の沈線文をその間に竹管文を施す。

甕形土器は、短く外反する口縁部を有するもので、口縁部径が体部最大径を上回る。口縁端部に面をなし刻目文を施すもの (49、50) と、体部上位に2条もしくは4条の沈線文を施すもの (49、



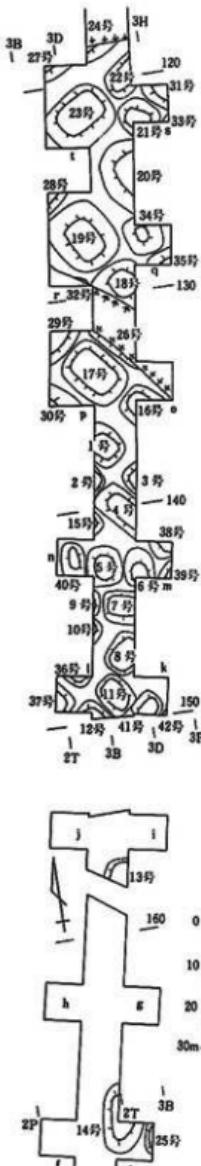
第15図 A トレンチ出土弥生時代前期土器

51) がある。色調は(49、50)が淡茶色を呈し、(51)が淡茶褐色を呈す。

鉢形土器(47)は、底部からひろがる体部が棱をもたず直立し、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は粗雑な仕上りで、調整は外面刷毛、内面ヘラミガキが残る。色調は淡茶色を呈す。

壺蓋形土器(37)は、笠形のもので、縁辺部に紐孔1孔と、中心に1孔を穿つ。淡褐色を呈す。出土した前期土器の中に、木葉文や重弧文を施したものがある。木葉文は全てヘラ描きで、縦1条～4条の沈線で区割した中に、X字形を軸とした木葉を描くもの(46、52、55)や、区割せず無軸の木葉を連続して描くもの(53、54)がある。重弧文もヘラ描きで、縦・横2～3条の沈線文と並用している。又2条2列の横方向沈線文の間に斜めに6条の沈線を施したもの(58)もある。

以上出土した弥生時代前期の土器群は、最も新しい新段階に比定されるが、Ⅱ様式古段階に分類されるものもある。いざれにしろ、時期的堆移の中に包括される過渡期の土器と言える。



第16図 方形周溝墓略図

第4節 弥生時代・中期・後期

造構面は、調査区北半分がやや粘質を帯びた灰青色シルトをベース層とし、調査区南半分が緑青色粘土をベース層とする。両層に本質的な相違は認められず、基本的に同一層と考えてい。造構面の標高は、CトレントでT.P 6.5mを保つが、Bトレントから北へ向ってかなり傾斜し、A Nトレント北端ではT.P 5.9mまで下がる。検出した造構の時期から、当造構面はⅡ様式期～V様式期に至る間、自然環境の影響を受けず同一面を保持していたものと考えられる。

この造構面から古墳時代造構面までの間には、3～4層の堆積が認められる。下2層が弥生時代V様式の土器を含み、第3層上面もしくは4層中から布留式土器が出土する。従って第3層は、弥生時代V様式新段階から古墳時代前期庄内期の間に堆積したものと考えられる。この第3層は黒色粘土で、当調査区付近一帯に認められる基本的な層である。

造構は、方形周溝墓を始めとして、住居址、大溝、溝、ピットなどを検出した。

第1項 方形周溝墓群

今回の調査で確認した方形周溝墓は42基で、造存状態は極めて良好である。検出した範囲は、A Nトレント119ラインからCトレント170ラインまで南北延長280mに及ぶ。但し、Cトレント170ラインに位置する14号・25号方形周溝墓は他の方形周溝墓と100m近く離れている。A・A Nトレント方形周溝墓群とは別の方形周溝墓群が調査区南東側に存在する可能性も考えられる。

方形周溝墓の時期は、出土した供獻土器からⅡ様式の11号・12号方形周溝墓を最古とし、21号方形周溝墓のV様式である。その他の周溝墓は、概ねⅢ様式～Ⅳ様式に築造されている様だが、各周溝墓の築造順序を明らかにするような切り合い関係は認められなかった。

尚、各周溝墓は、調査中に確認した順で号数を付した。全体の調査が、Aトレント→Bトレント→Cトレント→A Nトレント→各トレント拡張部と進んだ為、概ねそのトレント順で周

溝墓の号数が統一している。ここでは、付した号数に関係なく北から順に報告する。

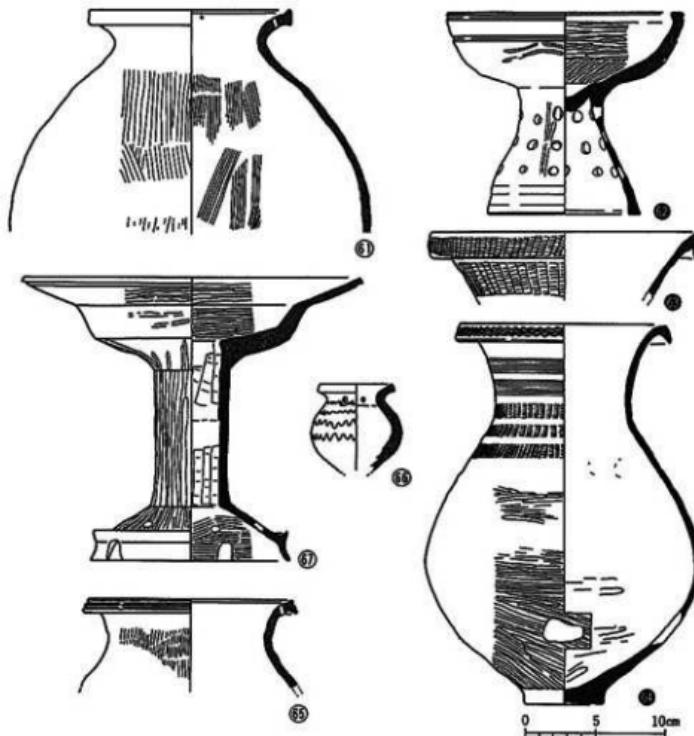
〈24号方形周溝墓〉 3F-118に位置する方形周溝墓で、墳丘の殆んどが飛鳥時代の自然河川によって崩壊している。遺存する南東斜面で、墳丘下幅約10m、墳丘高約0.9mを測る。周溝は特に設ける事なく、自然地形を利用している。

供獻土器は、主に斜面から出土した。甕・高坏・台付鉢などの破片が出土したが、その内(61)は淡褐色を呈し、口縁外面に凹線文と思われるようなわずかな凹みがみられる。

〈27号方形周溝墓〉 3D-119に位置する方形周溝墓で、墳丘の南東斜面を確認したにすぎず規模は不明である。

周溝は、24号方形周溝墓と同様に、自然地形を利用している。

供獻土器は、墳丘斜面や裾部から甕、甌、鉢などの破片が出土した。(62)は暗茶褐色を呈す高坏で、坏部外面に2帯の沈線文が施されている。脚部に横三列の円型穿孔を巡らし、組み合わせ法によって坏部と接合している。



第17図 24号・27号・22号・21号方形周溝墓出土遺物

〈22号方形周溝墓〉 3G-120に位置する方形周溝墓で、墳丘の約半分を検出した。墳丘上幅9m×6m、墳丘下幅約13m×9m、墳丘高約1mの規模をもつ。北西周溝は自然地形を利用し、南西周溝は23号方形周溝墓北東周溝と共有している。墳丘主軸は、N-50°-Eの方位を示す。

当周溝墓は、拡張部位置に係わらない為、盛土の掘削調査を行っていない。(第2章参照)

供獻土器は、壺・甕・高杯などを出土したが、比較的壺の出土量が多い。茶褐色を呈し、角閃石を含む壺(63、64)や口縁部外面に凹線文を施した壺(65)などがある。(66)は、淡茶色を呈すミニチュア土器で、胴部に4本の疑似波状文をヘラで施している。

〈31号方形周溝墓〉 拡張部Aトレントに南西周溝と南西斜面の一部を確認した。3I-121に位置する。墳丘規模は殆んど不明に近い。確認した範囲で墳丘高は約0.7m、周溝幅は約1mを測る。供獻土器は、破片を少量出土したが実測するに足るものはなかった。

〈33号方形周溝墓〉 拡張部Sトレントに周溝の北西隅を確認した。3I-123に位置する。

〈21号方形周溝墓〉 3I-3H-122に位置する方形周溝墓である。規模は、約12m×9m高さ約1mを測る。墳丘上幅が6m×3.5m、下幅が10m×7mである。周溝は、約1.5mの幅をもち、北東隅と南西隅に陸橋を残している。墳丘長軸はN-60°-Wの方位を示す。主体部は確認されなかった。出土した供獻土器(67)から、この方形周溝墓が最も新しく、V様式古段階に相当する。

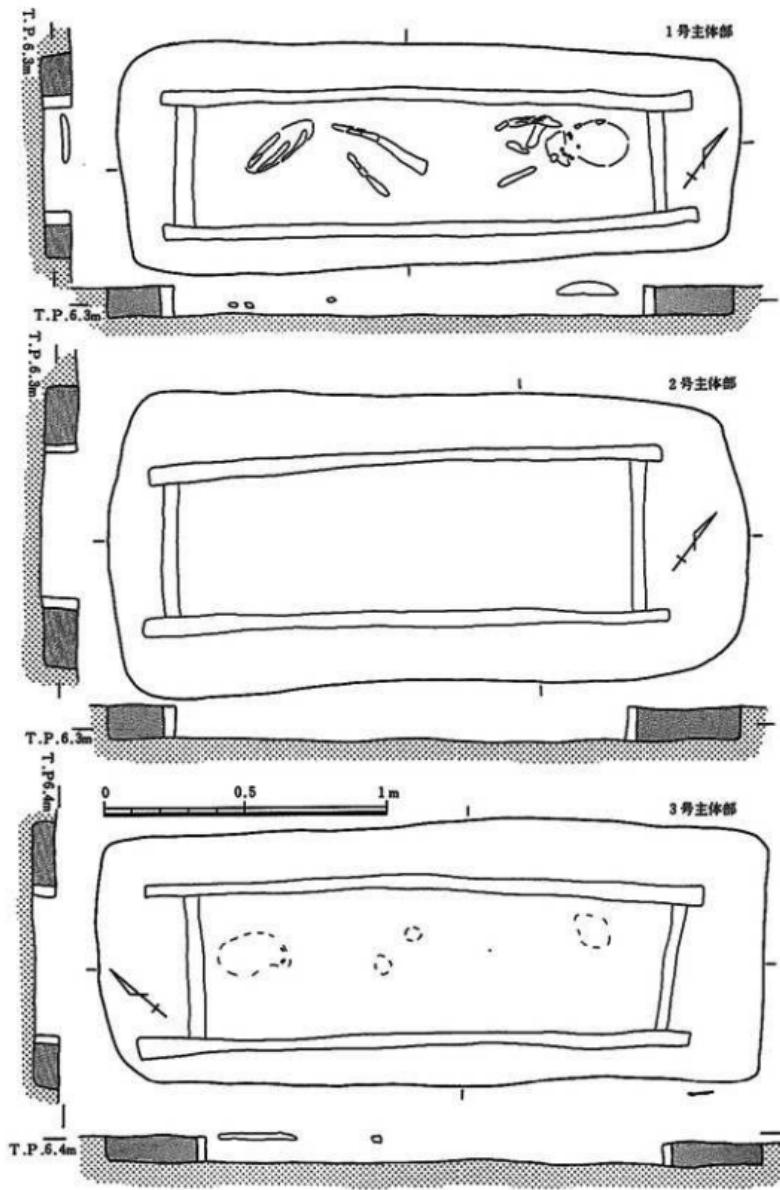
供獻土器の出土量は、極めて少ない。その中で(67)は、北東周溝内にほぼ完型に近い残存状態で出土した。暗赤褐色を呈する特異な菱形高環で、環部は内外面共丁寧なヘラミガキである。長い柱状部から外反する裾部に、粘土紐を附加して幅広い端面を形成している。裾部に円形の穿孔を5ヶ所、裾部端面にアーチ状の穿孔を5ヶ所穿つ。

〈23号方形周溝墓〉 3C-3F-120-123の範囲に位置する方形周溝墓で、全容を明らかにする事が出来た。規模は、長軸約17m、短軸約14m、溝底からの墳丘高約1mを測る。墳丘上幅は11m×7.5mで、下幅は14.5m×11mである。周溝は南東、南西側に約2.5mの幅で巡らせており、北東周溝は南東から北西に向って傾斜する自然地形を利用し、わずかに掘削しているに過ぎない。又北西周溝は24号・27号方形周溝墓と同様に自然地形を利用しておらず、特に周溝を掘削していない。尚、東隅には、陸橋部が見られる。墳丘長軸はN-55°-Eの方位を示す。盛土は、灰黒色シルト質粘土と灰青緑色シルト質粘土が基本となる。断面実測図(第18図)に見られる浅い溝は、当方形周溝墓築造前に古い時期の周溝墓が存在した事を暗示するものである。

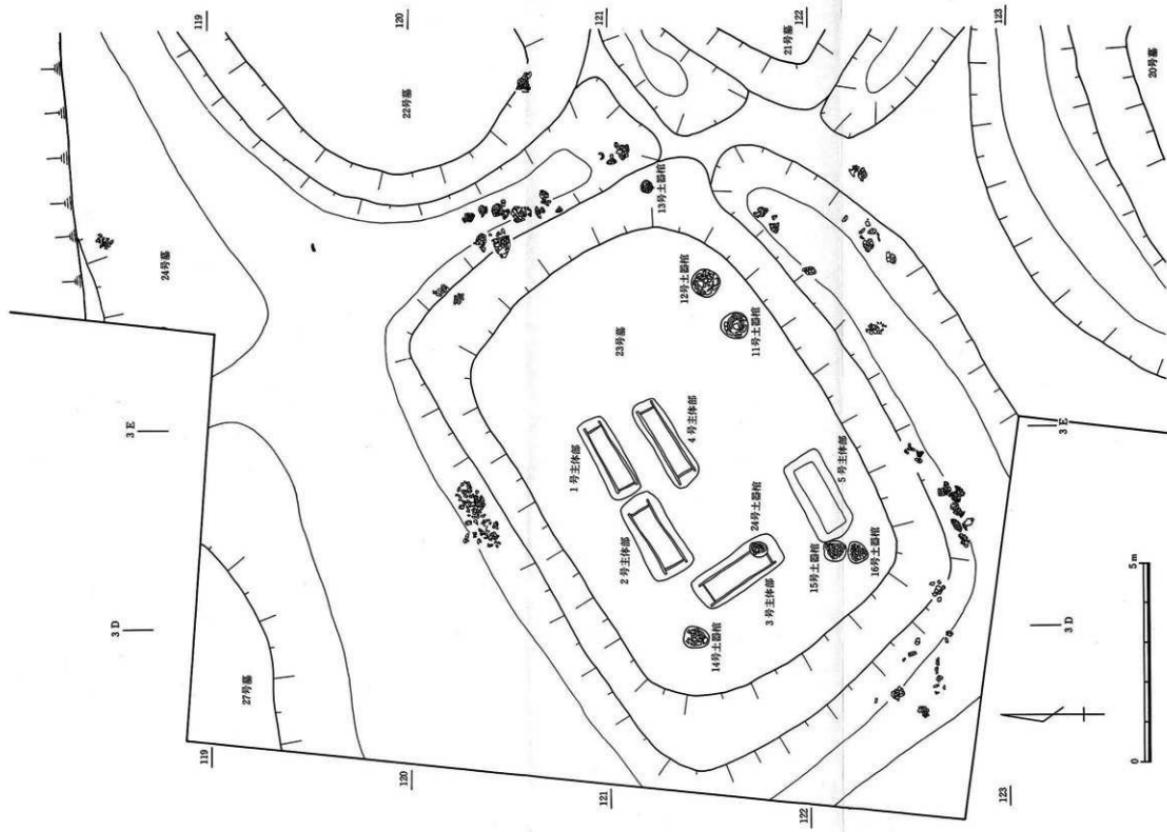
埋葬施設は、5基の組み合わせ式木棺と、6基の土器棺を検出した。但し、これらの埋葬施設に、埋葬順序を明らかにする様な切り合い関係や、墓拡切り込み面の差異による時期差を確認す



第18図 23号方形周溝墓盛土断面図

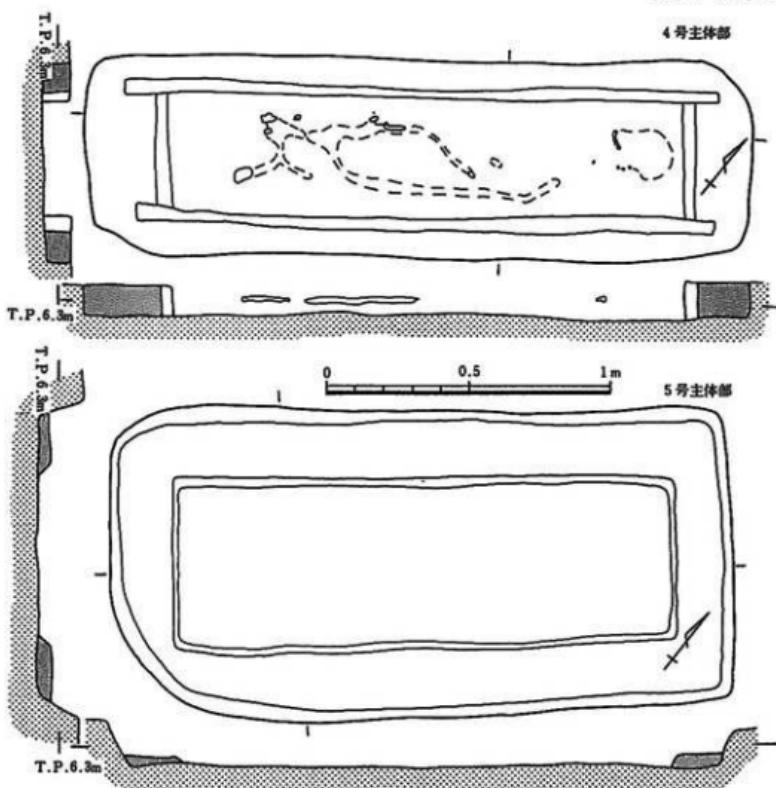


第19図 23号方形周溝墓 1号・2号・3号主体部平面図・断面図



第20図 23号方形周溝墓周辺全体図

4号主体部



第21図 23号方形周溝墓4号・5号主体部平面図・断面図

る事は出来なかった。

各周溝から多量の供獻土器が出土したが、特に北東・南東周溝の土器群は極めて残存状況が良好であった。北西周溝には16号土器棺の蓋が、広い範囲に散乱していた。盛土が崩れ落ちる時に転落・散乱したものと考えられる。同様に、0.1~0.2mの溝内堆積層中から出土した供獻土器も墳丘上から転落したものと考えられる。

1号主体部 2.2m×0.8mの墓壇に、組み合わせ式木棺を埋置している。木棺は、腐朽が著しく、木質部は全く遺存しなかった。平面の土色の違いで、側板と小口板の痕跡を確認した。側板1.85m、東小口板0.35m、西小口板0.4mを測り黒灰色粘土に変化している。

棺内に人骨の痕跡を検出したが、これも腐朽が著しく被葬者の詳細は不明である。頭部・歯・上腕骨・大腿骨・股骨などが確認出来た。これらの位置関係から、頭部を北東に向け、膝を折り曲げて埋葬されている事がわかる。主軸はN-55°-Eの方位を示す。

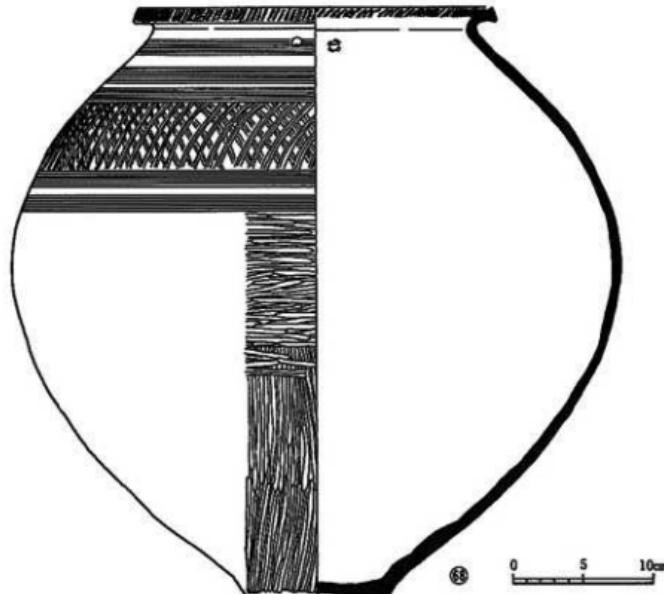
2号主体部 $2.25m \times 1m$ の墓壇に、組み合わせ式木棺を埋置している。木棺の木質部は全く遺存しない。黒灰色粘土に変化した側板 $1.8m$ 、東小口板 $0.55m$ 、西小口板 $0.45m$ を確認した。棺内に人骨は確認できなかった。棺の主軸はN-55°-Eの方位を示し、1号主体部と継列する。

3号主体部 $2.35m \times 0.95m$ の墓壇に、組み合わせ式木棺を埋置している。木棺は、痕跡を検出したにとどまり、側板 $1.95m$ 、北小口板 $0.5m$ 、南小口板 $0.45m$ を測る。棺内には頭部を北西に向けたと思われる人骨の痕跡を確認した。人骨の詳細は不明である。主軸は、N-35°-Wの方位を示し、墳丘主軸や他の主体部主軸と唯一直行する。

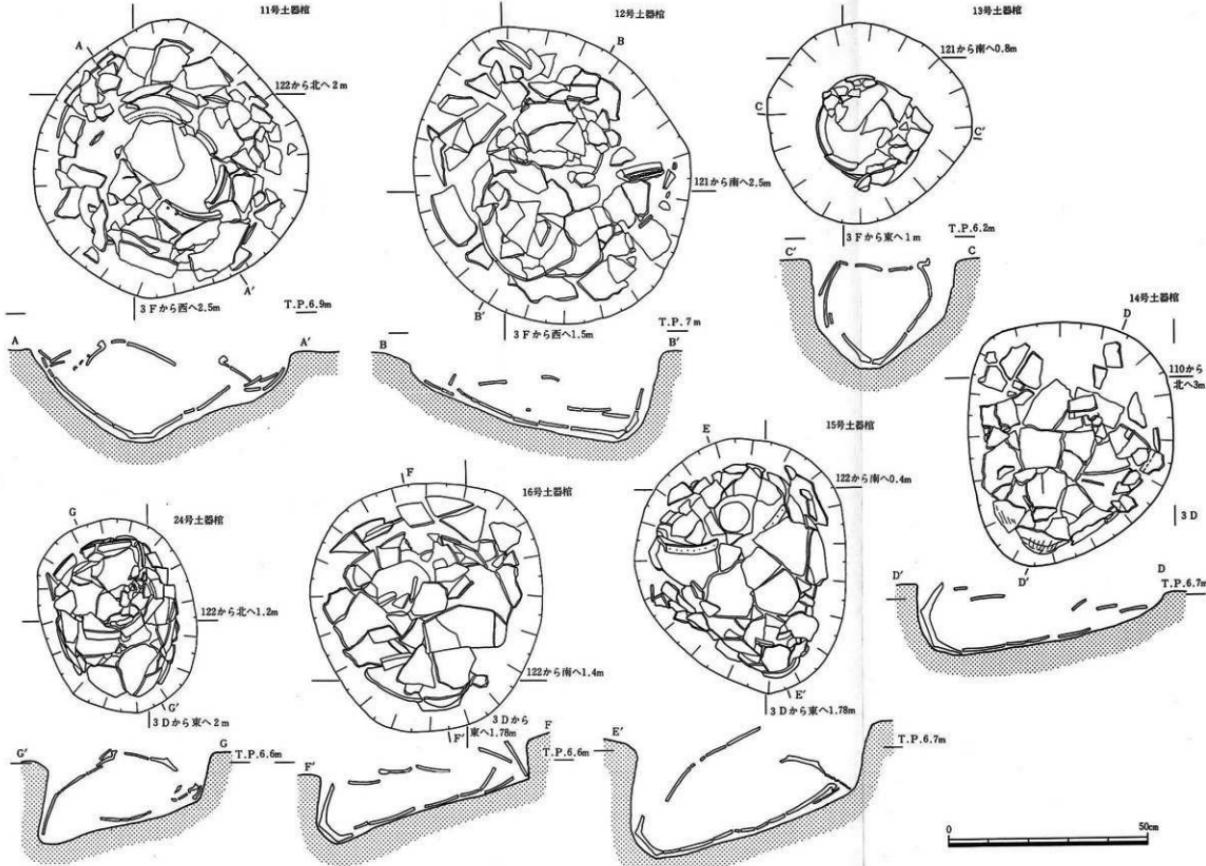
4号主体部 23号方形周溝墓の中心主体である。 $2.35m \times 0.7m$ の墓壇に組み合わせ式木棺を埋置している。木棺は、側板 $2.05m$ 、東小口板 $0.4m$ 、西小口板 $0.4m$ を測る黒灰色粘土に変化した痕跡を検出した。棺内に腐朽の著しい人骨を確認した。頭部と歯の位置から、頭部を北東に向けて埋葬されていると思われる。主軸は、N-55°-Eの方位を示し、1号主体部と平行する。

5号主体部 $2.2m \times 1.1m$ の掘り方と、その内側に $1.8m \times 0.6m$ の掘り方を検出した。木棺や人骨の痕跡は確認されなかった。主軸はN-55°-Eの方位を示す。

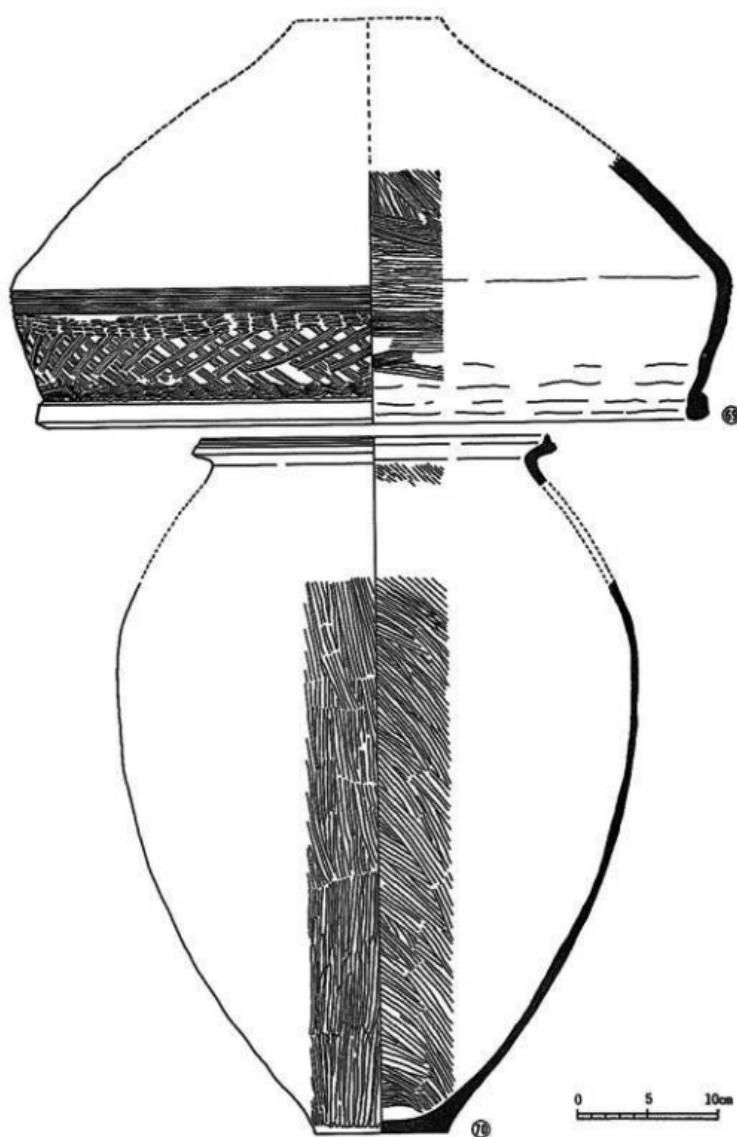
11号土器館 23号方形周溝墓の墳丘上、東隅に埋置されていた。棺の形態は、壺形土器(68)を胴部で半截し、胴部から底部を棺の身とし、胴部から口縁部を棺の蓋としている様だ。棺はほぼ垂



第22図 23号方形周溝墓11号土器館



第23図 23号方形周溝墓11号～16号・24号土器棺平面図・断面図



第24図 23号方形周溝墓12号土器館

直に埋置している。棺内に入骨は検出されなかった。

壺形土器(68)は、淡褐色を呈す。ほぼ球形の体部から短く外反する口縁部を有する。口縁端部は上下にわずかに肥厚し、内面と端面に列点文を施す。肩部から胴部にかけて、3帯の直線文、斜格子文、2帯の直線文を施し、胴部を横方向、底部を縦方向へヘラミガキ調整している。内面の調整は不明である。

12号土器館 11号土器館の北東に並列して埋置している。棺は、壺形土器(70)を身とし、鉢形土器(69)を蓋に使用している。棺は、壺形土器の底部が南西に位置するところから、N-30°-E

の方位を示すと考えられる。棺内に入骨は検出されなかった。

壺形土器(70)は、淡褐色を呈し、口縁部外面に凹線文を施す。体部外面上位は刷毛調整、下位はヘラミガキ、内面は刷毛調整である。

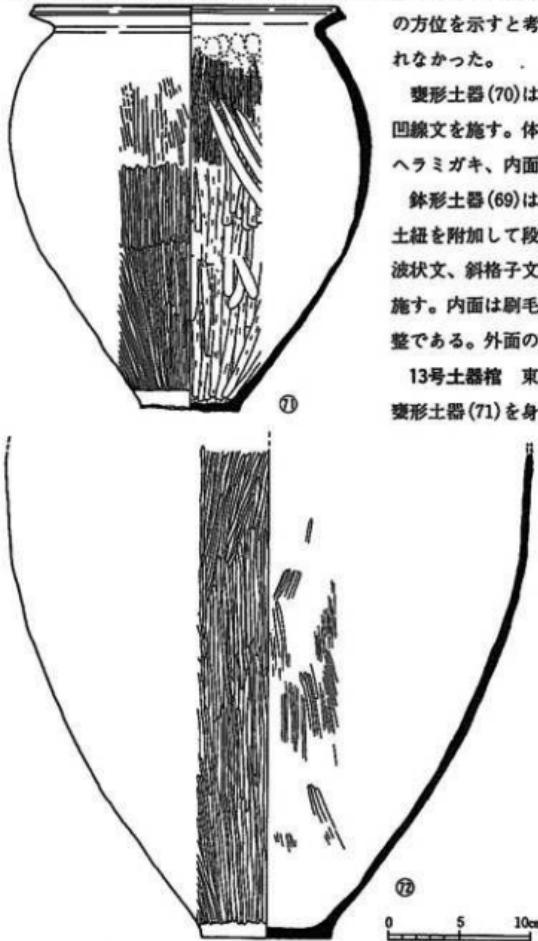
鉢形土器(69)は、淡褐色を呈し、口縁端部は粘土紐を附加して段状口縁部をなす。口縁部外面に波状文、斜格子文、疑似簾状文、4条の凹線文を施す。内面は刷毛調整で、屈曲部はヘラミガキ調整である。外面の調整は不明である。

13号土器館 東隅斜面下位に位置する土器館で、壺形土器(71)を身に、半截した壺形土器を蓋に使

用している。棺は垂直に埋置されており、棺内に入骨は検出されなかった。

壺形土器(71)は淡褐色を呈し、体部外面下位はヘラミガキ調整、上位は刷毛調整、内面下位はヘラミガキ調整、上位は刷毛調整である。

14号土器館 墳丘上、西隅に位置する土器館で、棺の身を検出した。壺形土器(72)を使用しているが、棺の蓋と共に、この壺の口縁部は、残存しない。棺の主軸は N-20°-E の方位を示す。

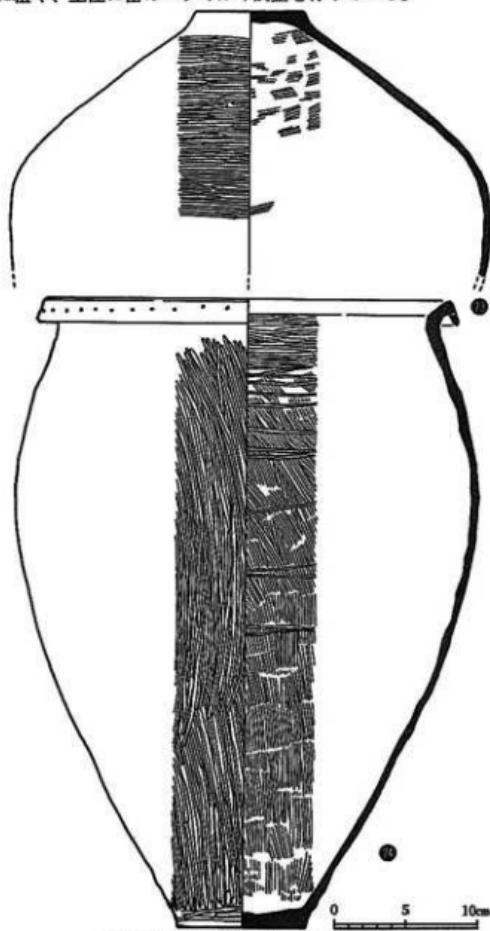


第25図 23号方形周溝墓13号・14号土器館

変形土器(72)は、淡茶色を呈し、口縁部は欠損している。外面はヘラミガキ調整、内面は刷毛調整である。

15号土器棺 墳丘上、南隅に位置する土器棺で、変形土器(74)を棺の身とし、半截した変形土器(73)の底部を蓋としている。方位は、N-15°-Wを示す。棺内に人骨は検出されなかった。

変形土器(74)は、茶褐色を呈し、胎土に雲母や角閃石を含む。所謂“生駒西麓産”的土器である。口縁部外面に刺突文を施している。体部外面はヘラミガキ調整で、内面は刷毛調整の後、中位に粗く、上位に密のヘラミガキ調整を行っている。



第26図 23号方形周溝墓15号土器棺

変形土器(73)は、底部から屈曲して直立する体部をもつもので、体部上半から口縁部を打ち欠いている。

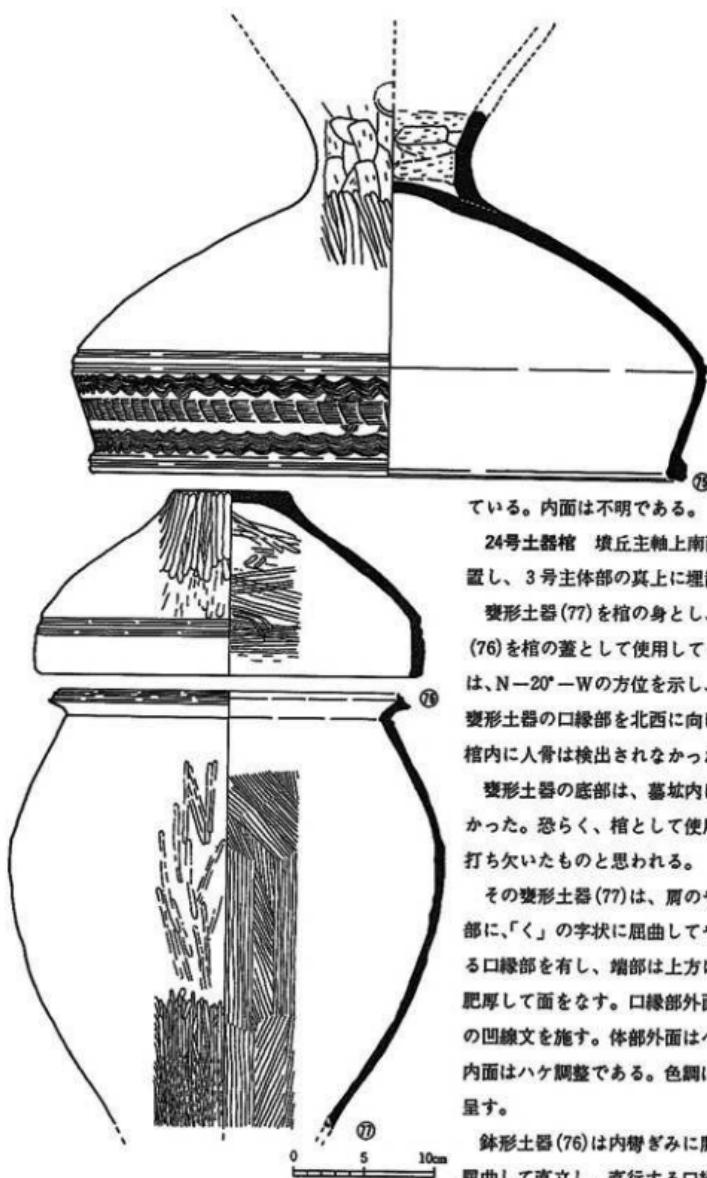
この土器も茶褐色を呈し、胎土に雲母や角閃石を含む生駒西麓産の土器である。直立する体部に簾状文の痕跡と、赤色顔料の塗布がみられる。内面は刷毛調整、外面はヘラミガキ調整である。

16号土器棺 墳丘上、南隅に位置し、15号土器棺の南に並列する。

土器棺は、大型鉢形土器を半截して、その底部を身に使用し、大型台付鉢形土器を蓋に使用している。主軸は、N-15°-Wを示し、棺内に人骨は検出されなかった。

大型鉢形土器は、褐色を呈し、外面ヘラミガキ調整、内面刷毛調整である。

大型台付鉢形土器(75)は、褐色を呈し台部に円形穿孔を有する。口縁部に2帯の波状文とその間に粗雑な簾状文を施す。又屈曲部に1条、口縁端部に2条の凹線文もみられる。調整は、台部内外面をヘラ削り、鉢部外面をヘラミガキし



第27図 23号方形周溝墓16号・24号土器棺

ている。内面は不明である。

24号土器棺 墳丘主軸上南西寄りに位置し、3号主体部の真上に埋置している。

変形土器(77)を棺の身とし、鉢形土器(76)を棺の蓋として使用している。主軸は、N-20°-Wの方位を示し、身となる変形土器の口縁部を北西に向いている。棺内に人骨は検出されなかった。

変形土器の底部は、墓室内に遺存しなかった。恐らく、棺として使用する前に打ち欠いたものと思われる。

その変形土器(77)は、肩のやや張る体部に、「く」の字状に屈曲してやや外反する口縁部を有し、端部は上方にするほど肥厚して面をなす。口縁部外面には2条の凹線文を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は淡褐色を呈す。

鉢形土器(76)は内巻ぎみに開く体部が屈曲して直立し、直行する口縁部の端部が内側へやや肥厚して丸くおわる。

屈曲部に2条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面は刷毛調整である。底部内面はヘラミガキ調整がみられる。色調は淡褐色を呈す。

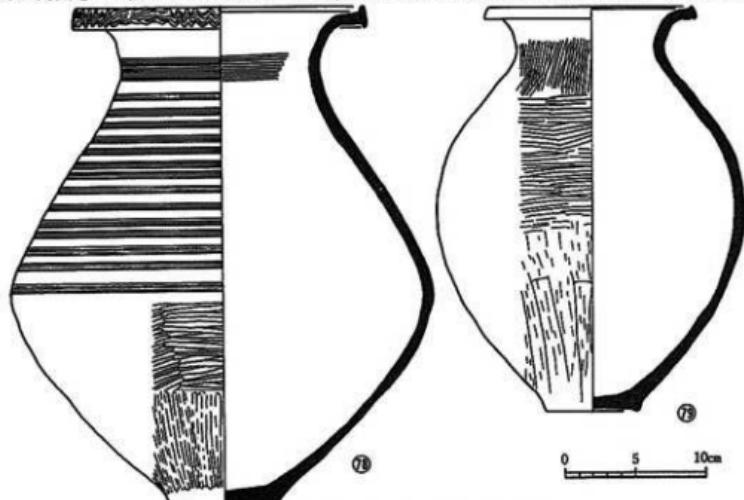
23号方形周溝墓北西周溝出土遺物 3Eラインから西へ2m、120ラインから1.5mの交点を中心として、北西斜面に平行して2m、直行して1mの範囲に集中して出土した。土器は、周溝墓ベース面直上に堆積した層中に重なり合って出土しているところから、墳丘上から転落し、破碎し、散乱したものと考えられる。器種別の出土量では壺が最も多い。

壺形土器は、算盤玉状の体部をもつもの(78、80)や、楕円状の体部をもつもの(79、82)、体部下位に張りをもつもの(81)などがある。

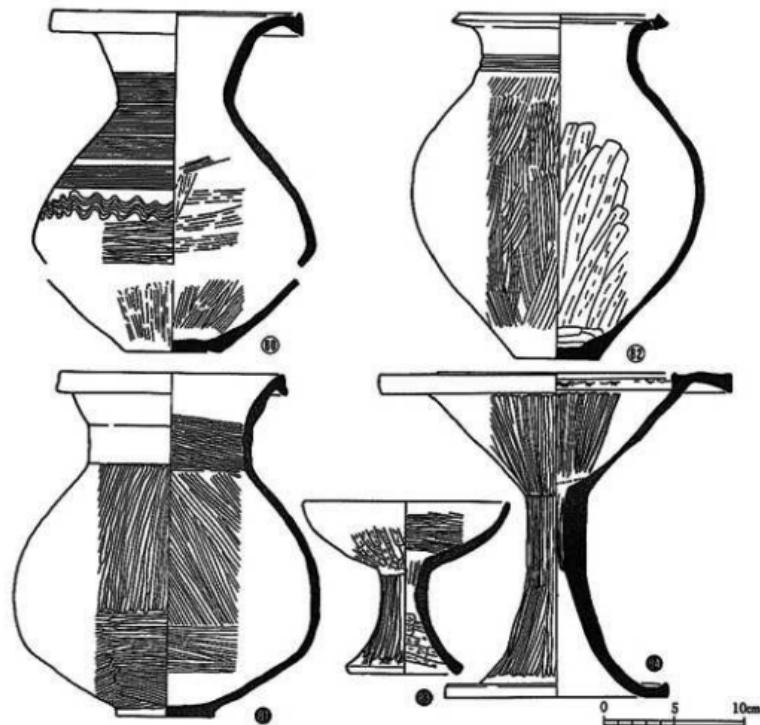
(78)は、体部上半に18帯の直線文、口縁部外面に波状文を施す。体部外面下半はヘラミガキ調整である。色調は淡褐色を呈す。(79)は、頸部外面を継刷毛調整、体部上半を横刷毛調整、体部下半をヘラ削りしている。色調は淡褐色を呈す。(80)は、体部に1帯の波状文、体部から頸部にかけて4帯の直線文を施す。外面はヘラミガキ、内面は刷毛調整で色調は淡褐色を呈す。(81)は無文で、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(82)は、頸部に2条の凹線文を施す。外面刷毛調整、内面ヘラ削りである。色調は淡茶色を呈す。

高環形土器は、浅い椀形の环部をもつ高环A(83)と高环B(84)がある。

(83)は、环部外面がナデ調整、内面がヘラミガキである。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りである。环・脚の接合は円板充填法によると思われる。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(84)は、环部内面上端に波状文を施す。环部内・外面をヘラミガキ、脚部外面をヘラミガキ、内面をヘラ削りしている。环・脚の接合は円板充填法によると思われるが、充填した粘土



第28図 23号方形周溝墓北西周溝出土遺物



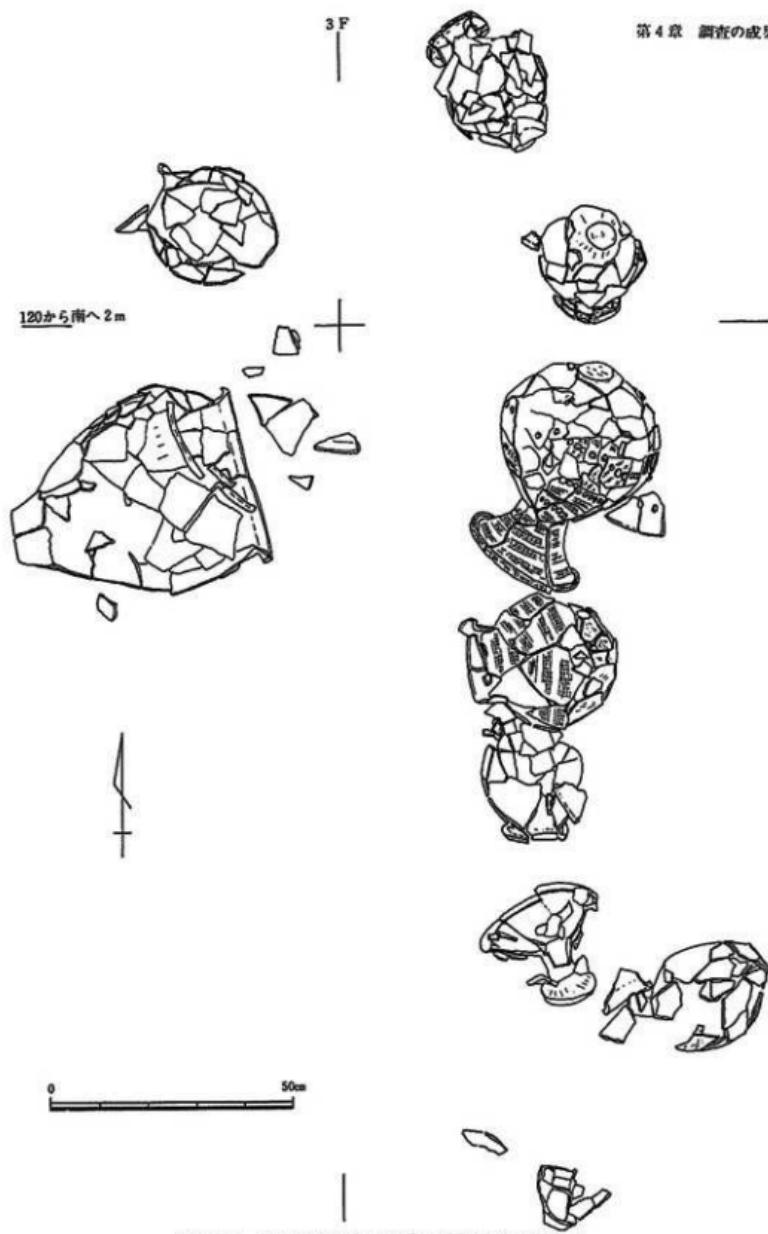
第29図 23号方形周溝墓北西周溝出土遺物

は遺存しない。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

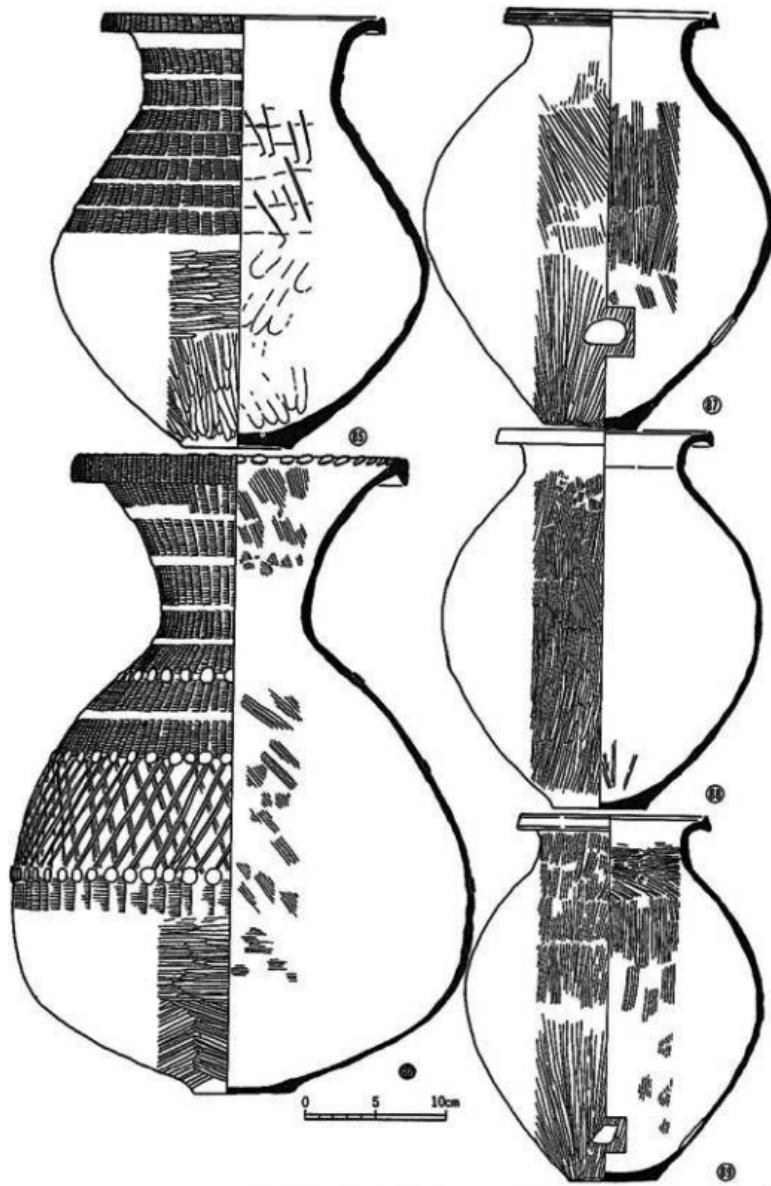
23号方形周溝墓北東周溝出土遺物 周溝北西側、中央、南東側の3ヶ所にわかれる。中央に多く出土し残存状況も良好であった(第30図)。南東側に出土した細頸壺(98)の横にある脚部(93)は、中央に出土した壺(86)の横にある脚部と接合する。土器はいずれも周溝内堆積層中から出土した。器種別の出土量では、やはり壺が多い様である。

壺形土器は、楕円形もしくは卵形の体部から短かく直立する頸部をもち、水平ちかく外反し、端部が上下両方に肥厚して面をもつもの(87、88、89、90、91、97)、体部中位に張りをもち、逆「ハ」の字形の頸部からほぼ水平に外反し、上方に肥厚して面をもつもの(85)、体部下位に張りをもち、屈曲して漏斗状にひらく頸部から端部が垂下し面をもつもの(86、96)などがある。

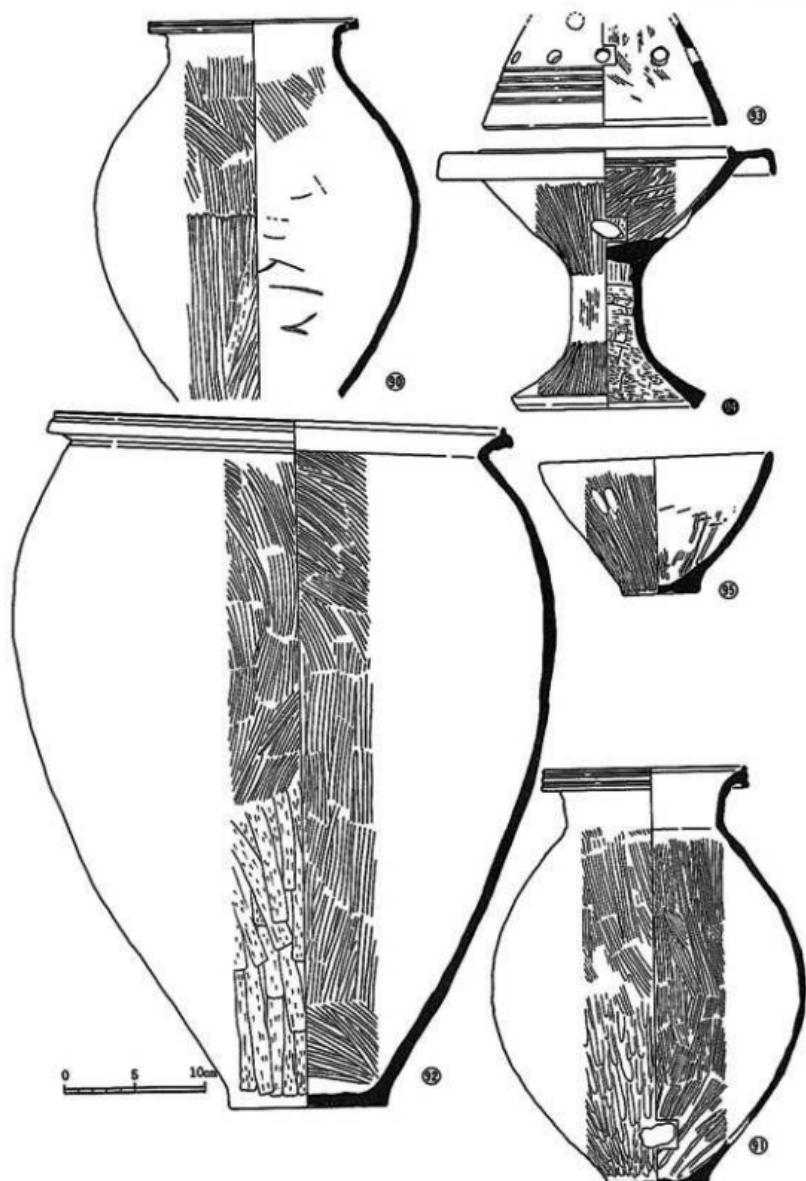
(87、88、89、90、91、97)の調整は粗密の違いや、頸部まで及ぶものと及ばないものの違いはあるが、概ね体部外面上半が刷毛、下半がヘラミガキ、内面が刷毛である。(87、90、91、97)は、口縁部外面に凹線文を施し、(97)は体部から頸部の屈曲部にも凹線を施す。又(87、89、91)は体部下位に穿孔を穿つ。



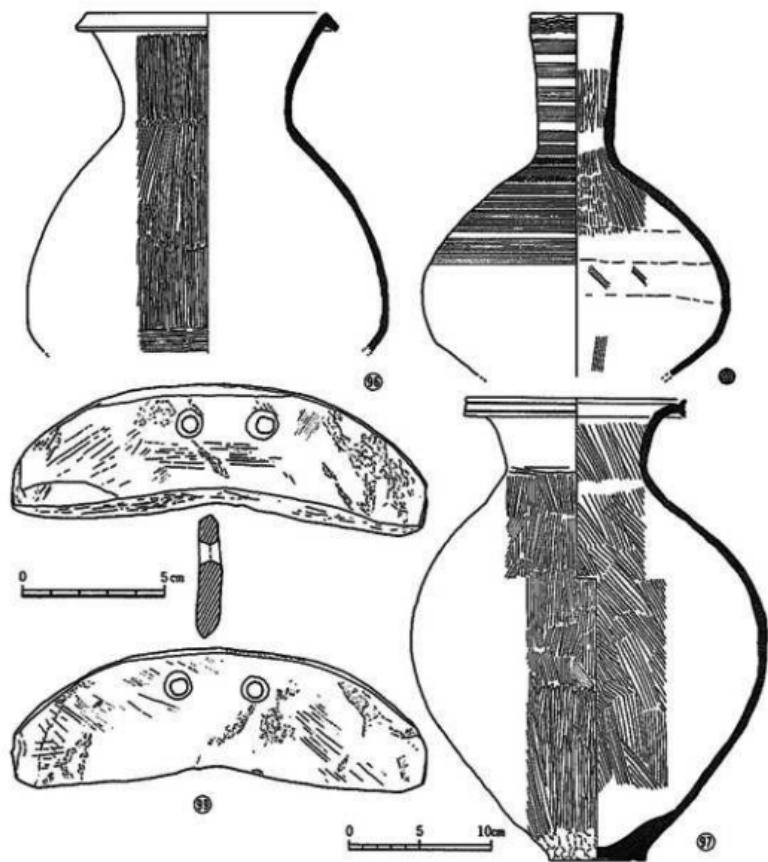
第30図 23号方形周溝墓北東周溝遺物出土状況図



第31図 23号方形周溝墓北東周溝出土遺物



第32図 23号方形周溝墓北東周溝出土遺物



第33図 23号方形周溝墓北東周溝出土遺物

色調は、(87、89、90、91)が淡褐色を呈し、(88、97)が淡茶褐色を呈す。以上6個体は、全体のプロポーションや色調に大きな相違を認める事は出来ないが、その中で体部の張りがやや上位に位置する(97)は、他の個体に比べ先行する土器と考えられる。(85)もやや古い時期に相当する。口縁部外面に1帯、頸部から体部上半に7帯の簾状文を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りである。色調は、淡茶褐色を呈す。(86)は、口縁部外面に1帯、口頸部から体部に8帯の簾状文、口縁部内面に1列、体部に3列の円形付文、体部中位に斜格子文を施した装飾性の高い土器である。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は茶褐色を呈す。胎土は、雲母や角閃石を含み、生駒西麓産の土器と考えられる。(96)は、無文で外面を丁寧にヘラミガキしている。内面調整は摩滅の為明らかでない。色調は淡褐色を呈す。

細頸壺形土器(98)は、下位に張りをもつ体部から筒状の細い頸部がつづき、極くわずかに内側する口縁部をもつ。体部から口縁部に14帯の直線文を施す。最上段は疑似波状文の様相を呈す。内外面共、刷毛調整であるが、体部下半の調整は不明瞭である。

大型壺形土器(92)は、上位に張りをもつ体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。端部には上方に肥厚する。外面上半は刷毛調整で、下半はヘラ削り調整である。内面は刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

(93)は褐色を呈す脚部で、2列の穿孔と4条の凹線文を施す。内面は刷毛調整である。

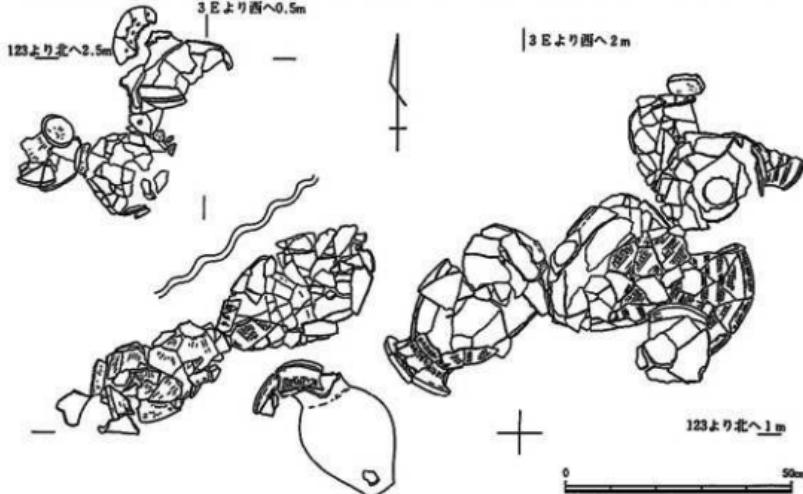
高環形土器(94)は、高環Bに属し、環部下位に穿孔を穿つ。環部は内外面共ヘラミガキで、脚部外面はヘラミガキ、内面はケズリ様にナデている。色調は、淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(95)は、楕円形の器体に直口の口縁部をもち、端部は丸く終る鉢Aに属す。調整は内外面共ヘラミガキで、色調は淡褐色を呈す。

石包丁(99)は、半月形内巻刃で片刃のものである。中央背寄りに2ヶ所の縫孔を穿ち、色調は緑色を呈す。

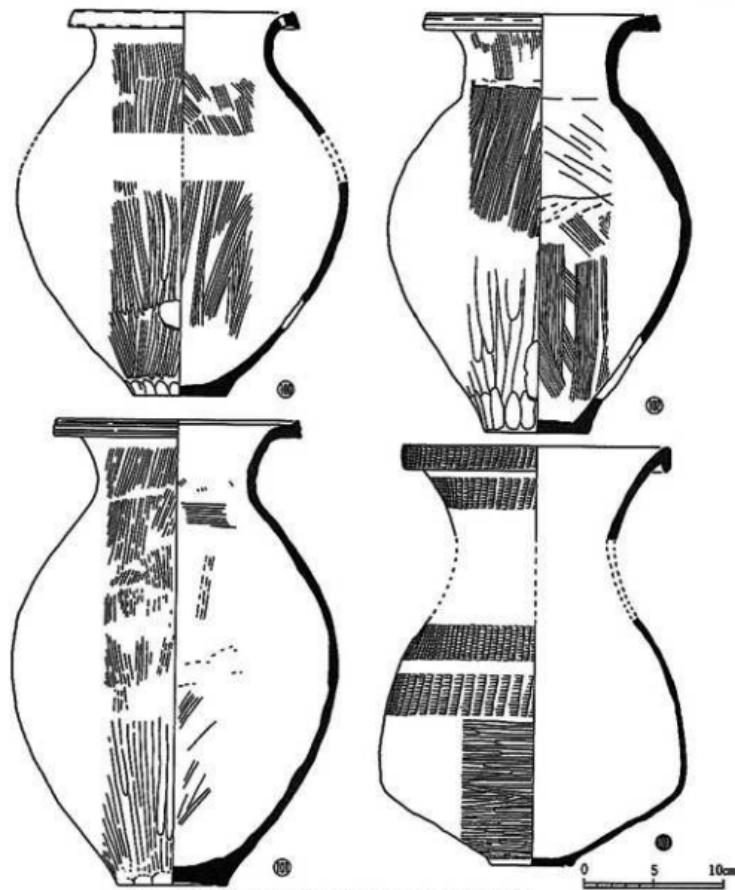
23号方形周溝墓南東周溝出土遺物 土器は周溝北東側と、南西側の2ヶ所に分かれて出土した。北東側のグループは散乱しているが、南西側は、比較的まとまって出土した(第34図)。いずれも堆積土層中に出土したもので、溝底や斜面直上から出土したものはない。器種別の出土量は、ここでも壺形土器が多く、全体の半数以上を占める。

壺形土器は、卵形の体部から、直立もしくはゆるやかに外反する頸部をもち、さらに水平ちか

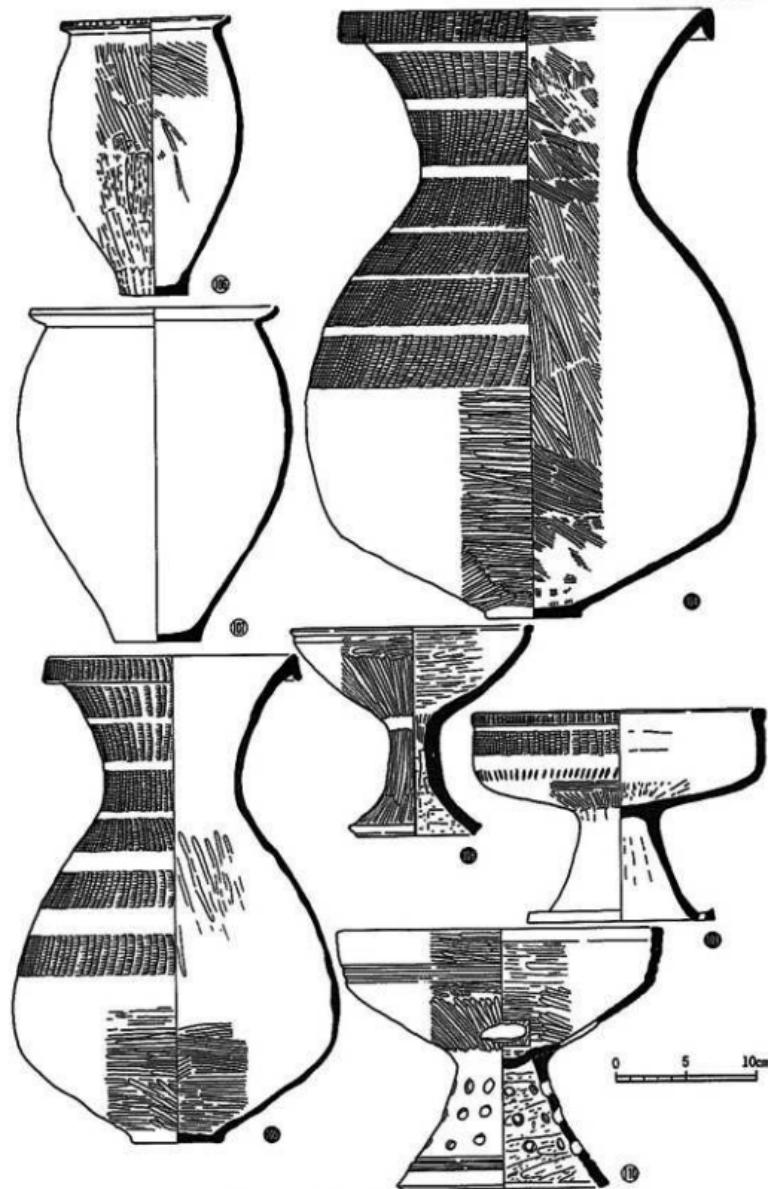


第34図 23号方形周溝墓南東周溝遺物出土状況図

く外反した口縁部の端部が上方に肥厚するもの(100, 101, 102, 112, 113)体部下位に張りをもち、屈曲して漏斗状にひらく口頭部から端部が垂下し面をなすもの(103, 104, 105)卵形の体部からはつきりした頭部をもたず外反した口縁部に上方へ肥厚する端部を有するもの(111)の3タイプに分かれる。(100, 101, 102, 112, 113)は概ね、外面上半を刷毛調整、下半をヘラミガキ、内面刷毛調整している。口縁部外面に凹線を施したもの(101, 102)や、体部下位に穿孔を穿つもの(100, 102, 112, 113)がある。色調は、(100, 112, 113)が淡褐色を呈し、(101, 102)が淡茶色を呈す。(103, 104, 105)は口縁部に1帯、口頭部から体部にかけて6帯(103は不明)の籠状文を施す。外面はヘラミガキ、内面は刷毛調整であるが、(105)の内面にはヘラ削りもみられる。3個体共、色調は茶褐色を呈し、



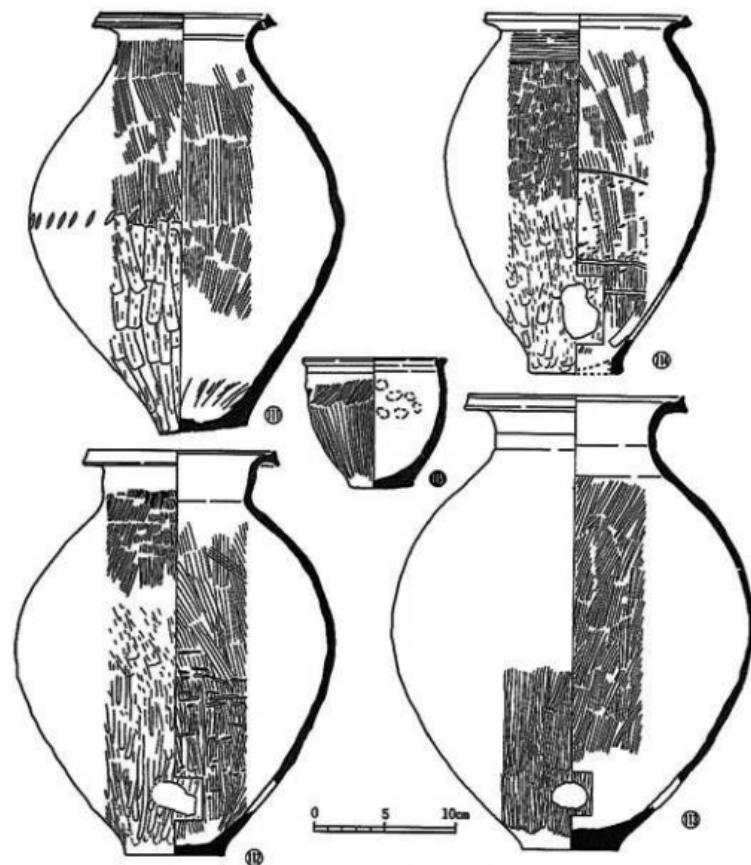
第35図 23号方形周溝墓南東周溝出土遺物



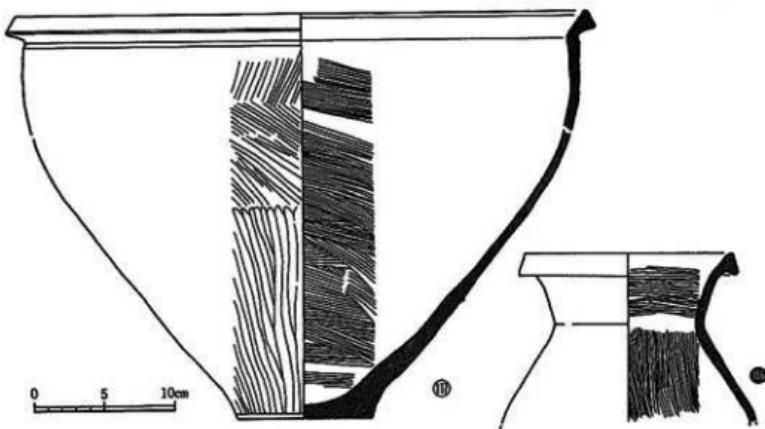
第36図 23号方形周溝墓南東周溝出土物

生駒西麓産の胎土をもつ。(111)は体部中位に刻目文を施し、頸部内面に凹線文様の凹みもみられる。体部外面上半と内面は刷毛調整、外面下半はヘラ削り調整で、底部内面に蜘蛛巣状の刷毛調整もみられる。色調は褐色を呈する。

変形土器(106,107,114)は椭円形の体部から屈曲して水平に外反する口縁部をもち、端部は上方に肥厚する。(106)は口縁部外面に刻目文を施し、体部外面上半と内面が刷毛調整、外面下半がナデ調整である。(107)は磨滅の為、調整が不明瞭、色調は(106)同様淡褐色を呈す。(114)は、内面が刷毛調整で中位に米粒状の刺突がみられる。外面上半は刷毛、下半はヘラ削りである。体部下位に穿孔を穿ち、色調は淡褐色を呈す。



第37図 23号方形周溝墓南東周溝出土遺物



第38図 23号方形周溝墓南西周溝出土遺物

高環形土器(108)は、内側した体部に直立した口縁部をもち、端部は水平に面をなす。口縁部外面に回線文を施し、環部内外面を丁寧にヘラ磨きしている。脚部は外面ヘラ削りで、環部との接合は円板充填法である。色調は淡茶色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

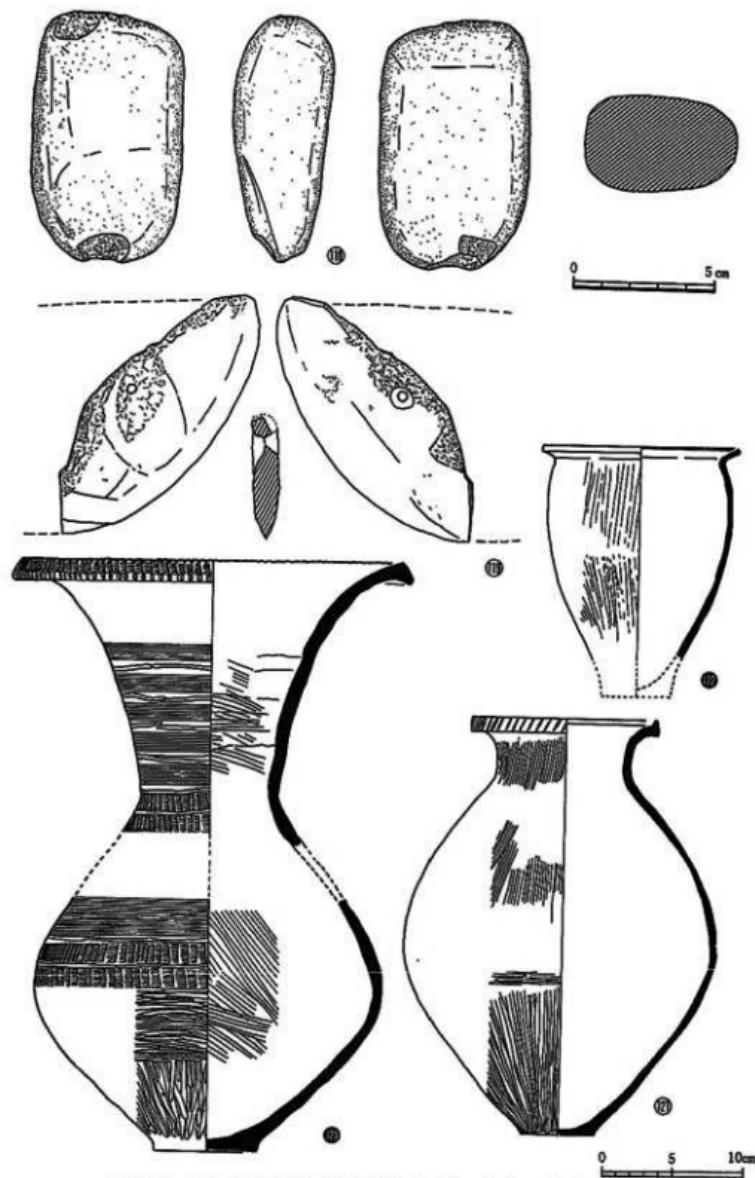
台付鉢形土器は、浅い器体が屈曲して直立し、段状口縁部をもつもの(109)と、直立したまま終わる口縁部が水平の面をなすもの(110)がある。(109)は、口縁部外面と体部上位に簾状文、屈曲部に列点文を施す。調整は内外面共ヘラミガキである。脚部は、上端部からなだらかに広がる裾部をもち、端部は垂直に面をなす。茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(110)は屈曲部に回線文2帯を施し、体部下位に穿孔を穿つ。内外面共、ヘラミガキ調整である。脚部は、3列の円形穿孔と、2条の回線文を施し、内面ヘラ削りである。色調は淡褐色を呈す。

鉢形土器(115)は、内側する器体に直口の口縁部をもち、端部が肥厚する。外面はヘラミガキで内面に指頭圧痕が残る。茶黒色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

石器は、完成品の石鎌(第39図 118)と石包丁の破片(119)が出土した。(118)は、扁平な梢円形で長軸両端を敲打し紐掛けをしている。(119)は、背部が直線的で端部で円味をもつ。外刃刃半月形態に属する石包丁で、紐孔は1ヶ所確認できる。

23号方形周溝墓南西周溝出土遺物 他の周溝に比べ、出土量は圧倒的に少ない。出土した土器の大半は、盛土崩壊時に墳丘上から崩れ落ちた16号土器棺の蓋で、東西3mの幅に散乱していた。

供獻土器として出土を確認できたのは、壺形土器(116)と鉢形土器(117)の2点に過ぎない。(116)は、体部下半を欠損し磨滅が著しい。屈曲する頸部から漏斗状の口縁部をもち口縁端部は垂下する。口縁部内面をヘラミガキ、体部を刷毛調整している。外面の調整は不明瞭である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(117)は、屈曲部をもたず直立する体部から屈曲して外反する口縁部に面をなす端部を有する。内面と体部外面上半は刷毛調整で、外面下半は太



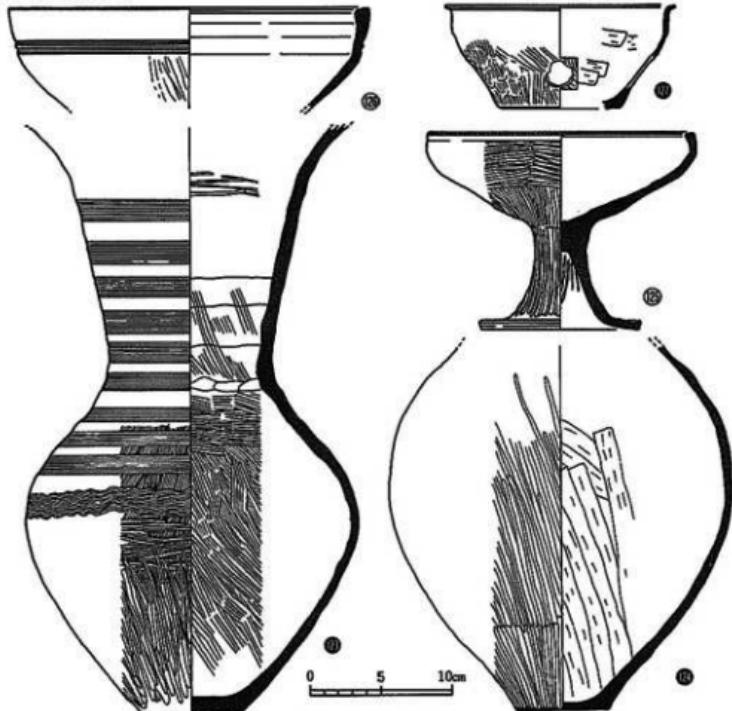
第39図 23号方形周溝基南東周溝出土遺物・南東平坦部出土遺物

目のヘラミガキである。色調は褐色を呈す。

23号方形周溝墓南東平坦部出土遺物 3F—120 から約 1.5m 南東方向に移行した地点に位置する。出土した遺物は、壺形土器(120,121)と変形土器(122)の3点である。周溝墓ベース直面上から出土した。

(120)は、体部中位に張りをもち、屈曲して漏斗状に開く口頸部から下方に肥厚する端部をもつ。口縁部外面に簾状文、下端に刻目文を施す。口頸部に5帯の直線文と2帯の簾状文、体部に2帯の直線文と2帯の簾状文がみられる。破損部にも施文されていたと考えられる。外面ヘラミガキ内面刷毛調整で、色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(121)は、体部中位に張りをもつ。頸部は直立し外反して上方に肥厚する口縁部を有す。口縁部外面に刻目文を施し、頸部から体部上半を刷毛調整し、下半はヘラミガキである。色調は淡褐色を呈す。

変形土器(122)は、ゆるやかに内彎した体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部は上方にやや肥厚する。体部上半を刷毛調整、下半をヘラミガキしている。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。



第40図 23号方形周溝墓盛土内出土遺物

23号方形周溝墓盛土内出土遺物 主体部確認の為、盛土を除去する際出土した土器である。出土量は少なく、その内の接合資料である。

壺形土器は、体部上位に張りをもち、屈曲して漏斗状に開く口頭部が続くもの(123)と球状の体部をもつもの(124)がある。(123)は、口頭部から体部に9帯の直線文と1帯の波状文を施す。施文前の刷毛調整が残る。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(124)は、外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り調整で、茶褐色を呈す。これも生駒西麓産の胎土をもつ。

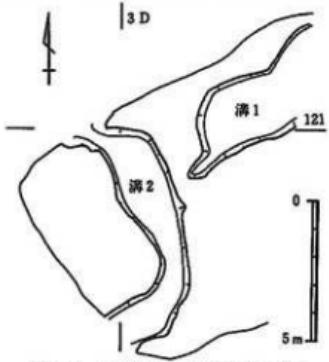
高環形土器(125)は、内導してやや内側に肥厚する口縁部をもつ。口縁部外面に刻目文を施し、外面ヘラミガキしている。色調は淡茶色を呈す。

鉢形土器は、直立してそのまま終わる口縁部をもつもの(126)と、屈曲して水平に外反する口縁部をもつもの(127)が出土した。(126)は屈曲部に2条の凹線文を施し、褐色を呈す。(127)は体部下位に穿孔を穿ち、外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り調整である。茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

23号方形周溝墓盛土下溝 盛土を除去した後、方形周溝墓のベース層である灰青色シルト上面に、2本の溝を検出した。溝1は幅約2m、深さ0.15mを測り、埋土は灰黒色シルト質粘土である。溝は、周溝墓北西周溝に平行し、トレーナー部に続いて北東周溝に平行している。溝内から壺形土器(131)や高環形土器(132)が出土した。溝2は、幅約1.5m、深さ0.15mを測り、埋土は灰黒色シルト質粘土である。溝は、周溝墓、西隅を囲む様「コ」の字状に走る。溝内から壺形土器、(128、129)や壺形土器(130)が出土した。

2本の溝は、その平面形態や23号方形周溝墓断面図(第18図)に観察される盛土下位土層から2基の方形周溝墓の周溝で、23号方形周溝墓は2基の方形周溝墓を取り込み、さらに盛土し築造したものと仮定し調査を進めた。

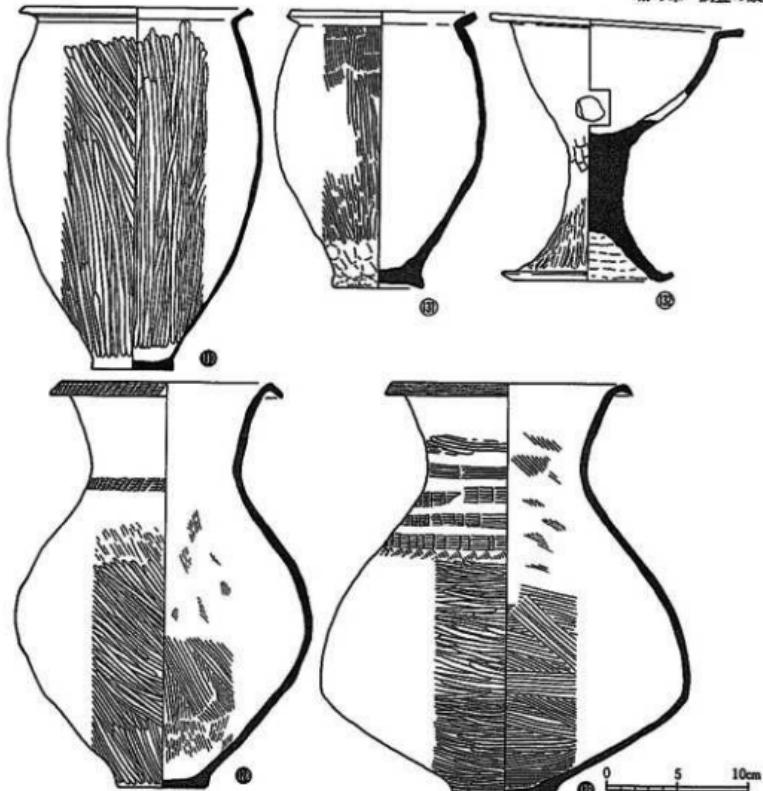
23号方形周溝墓盛土下溝出土遺物 壺形土器は、球形の体部から屈曲部をもたず漏斗状の口頭部に移行し、端部が垂下するもの(128)と、体部下位に張りをもつもの(129)である。(128)は、口



第41図 23号方形周溝墓盛土下溝

縁部外面と、頭部に簾状文を施し、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(129)は、口縁部外面に波状文、頭部から体部にかけて4帯の簾状文、簾状文の下に崩形文を施す。施文はいずれも粗雑で稚拙なものである。体部外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で、淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

壺形土器は、楕円形の体部から、屈曲して短く外反し下方にやや肥厚するもの(130)と、屈曲して短く外反し面をなすもの(131)である。(130)は、内外面共ヘラミガキで、色調は茶褐色を呈し、これも生駒西麓産の胎



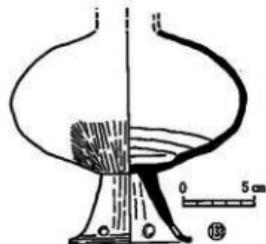
第42図 23号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物

土をもつ。(131)は、刷毛調整後ヘラミガキしている。底部には指ナデの痕跡が残る。内面の調整は不明瞭である。色調は淡褐色を呈す。

高坏形土器(132)は、椀状の体部から屈曲して水平に外反する口縁部を有す。脚部は中実の柱状部からなだらかに広がる裾部をもち、端部が短く上方にせり上がる。坏部下位に穿孔を穿つ。脚部外面はヘラミガキで、内面に粘土繊巻き上げ痕と指頭圧痕が残る。淡茶色を呈す。

(20号方形周溝墓) 3F-124に墳丘北西隅が位置する方形周溝墓で、全体の約半分を確認した。規模は長軸約18m、短軸約15mで、溝底からの墳丘高は約1.3mを測る。上幅8.5m×6.5m下幅12m×9mの墳丘に、幅約2.5mの周溝を巡らし、北西隅に陸橋を残す。墳丘主軸は、N-30°-Wの方針を示す。供獻土器は、土器の小片をわずかに出土したに過ぎない。当周溝墓は、拡張部に係わらない為、造構現状保存を目的とし盛土の掘削を行わなかった。(第2章参照)

(28号方形周溝墓) 3C-125に墳丘裾部と周溝の一部を確認した。周溝幅は約1.5m、深さ約



第43図 34号方形周溝盛土上出土物

0.2m を測る。主軸はN-35°-W の方位を示す。供獻土器は、小片を少量出土したに過ぎないが、19号方形周溝盛土出土の特殊鉢形土器(162)の一部が、当周溝から出土し接合した。

〈34号方形周溝墓〉 3G-125に墳丘北東隅が位置する方形周溝墓で、一辺約11mで方形に近い平面プランを有す。溝底からの墳丘高約1.1m、墳丘上幅約4m×3.5m、墳丘下幅約8.5m×8mを測る。周溝は、周囲の方形周溝墓周溝と共有し、幅約1.5mを測る。北西隅は、特に周溝を掘削せず陸橋としている。主軸はN-18°-W の方位を示す。

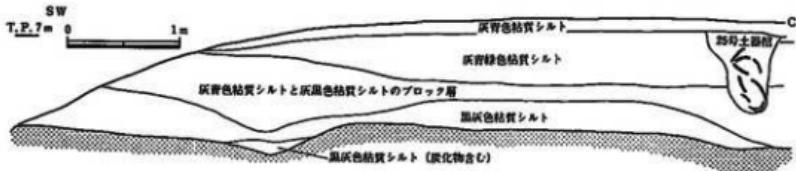
土器棺は検出されず、主体部は確認出来なかった。供獻土器は極く少量出土したに過ぎないが台付壺形土器(133)を復元出来た。(133)は、扁平な球状の体部を有し、上端部からなだらかに広がる裾部をもち、端部は丸くおさまる。体部外面へラミガキ、内面へラ削りで脚部外面はヘラミガキである。裾部に穿孔を穿つ。特殊な壺形土器で、色調は淡茶色を呈す。

〈35号方形周溝墓〉 3H-129に位置する方形周溝墓で、北西斜面と北西周溝を確認した。規模は殆んど不明に近く、供獻土器も少量出土したに過ぎない。北西周溝は34号方形周溝墓と共有し、主軸はN-15°-W の方位を示す。

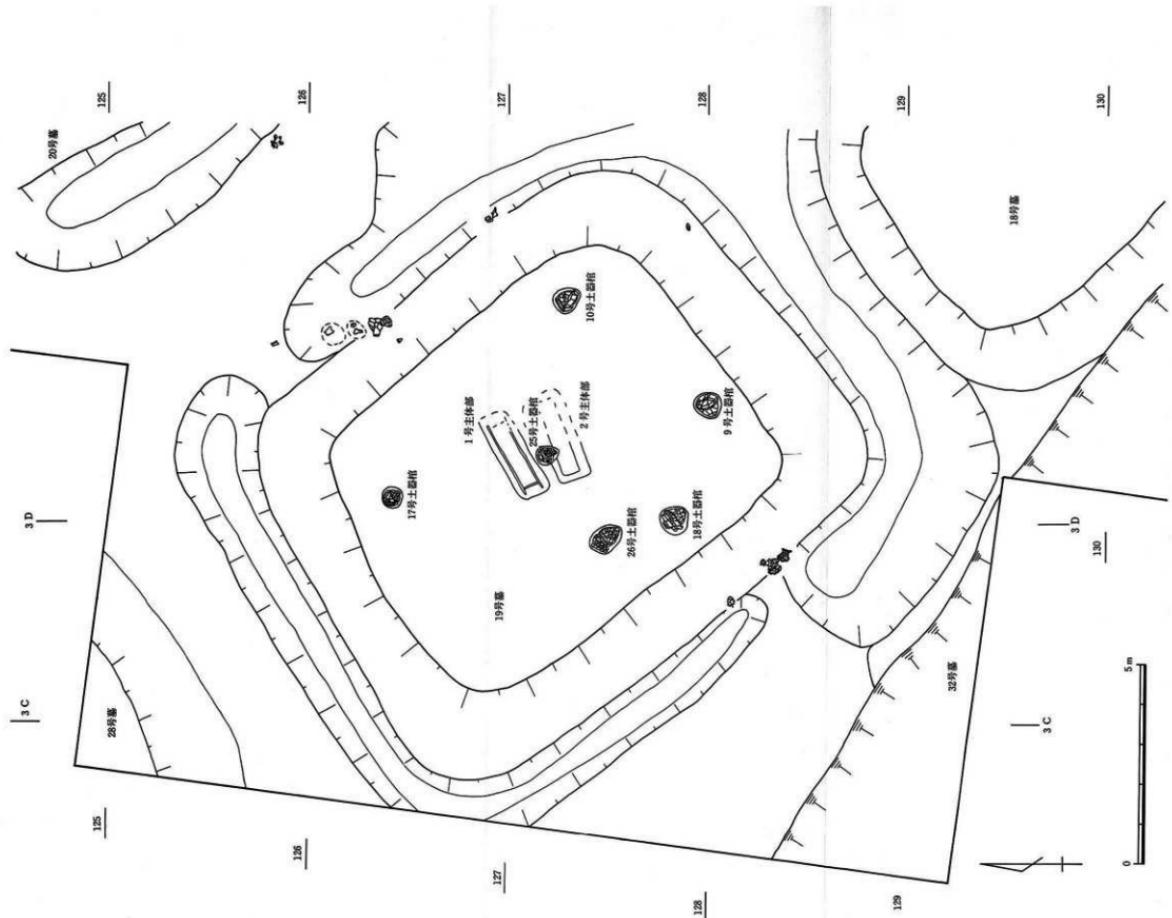
〈19号方形周溝墓〉 3C-3F-125-129の範囲に位置する方形周溝墓で、全容を明らかにする事が出来た。規模は、長軸約16m、短軸約14m、溝底からの墳丘高約1.6mを測る。墳丘上幅は10m×8mで、下幅は13m×11mである。北隅からやや東寄りと、南隅からやや西寄りに陸橋部を残し、「く」の字状に周溝を巡らす。周溝の幅は1.5mを測る。南東周溝は18号方形周溝墓と南西周溝は32号方形周溝墓と、北東周溝は34号方形周溝墓と共有する。墳丘長軸は、N-35°-W の方位を示す。盛土は、灰青色粘質シルトを最上層にし灰青緑色粘質シルト、灰青色粘質シルトと灰黒色粘質シルトのブロック、黒灰色粘質シルトなどの各層が基本となる(第44図)。又、炭化物を含んだ黒灰色粘質シルトを埋土とするベース面切り込みの溝は、23号方形周溝墓盛土下溝と同様に、当方形周溝墓によって取り込まれた旧方形周溝墓の存在を暗示するものである。

埋葬施設は、2基の組み合わせ式木棺と、6基の土器棺を検出した。但し、2基の木棺が同時に埋葬であるか否か、又、土器棺の埋葬順序などを確認する事は出来なかった。

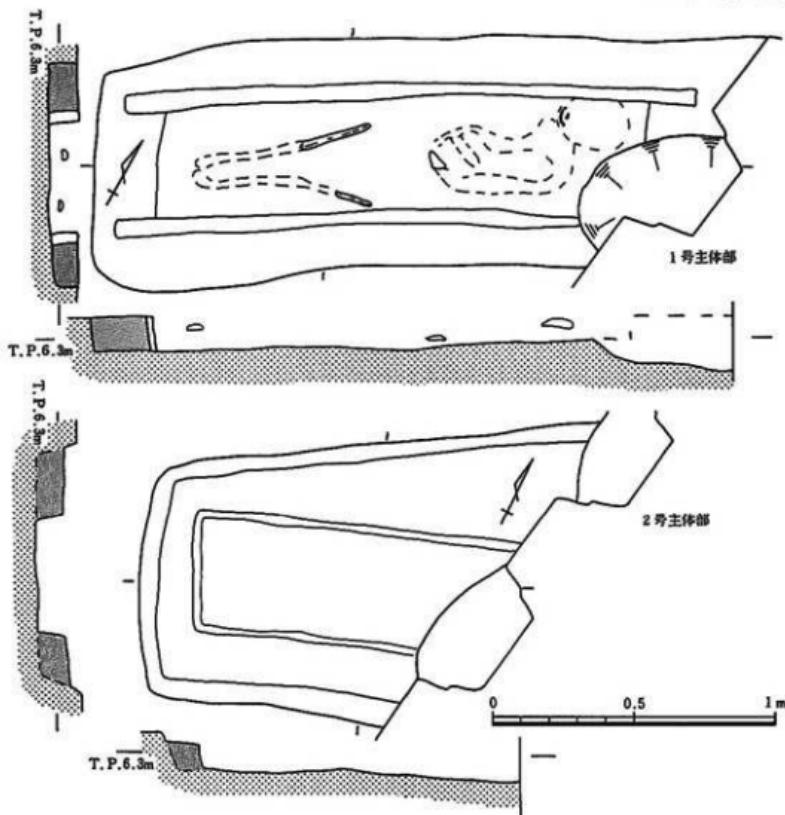
供獻土器は、周溝墓の全容を検出したにしては少なく、特に北西周溝・南東周溝には殆んど供獻



第44図 19号方形周溝墓盛土断面図



第45図 19号方形周溝墓周辺全体図



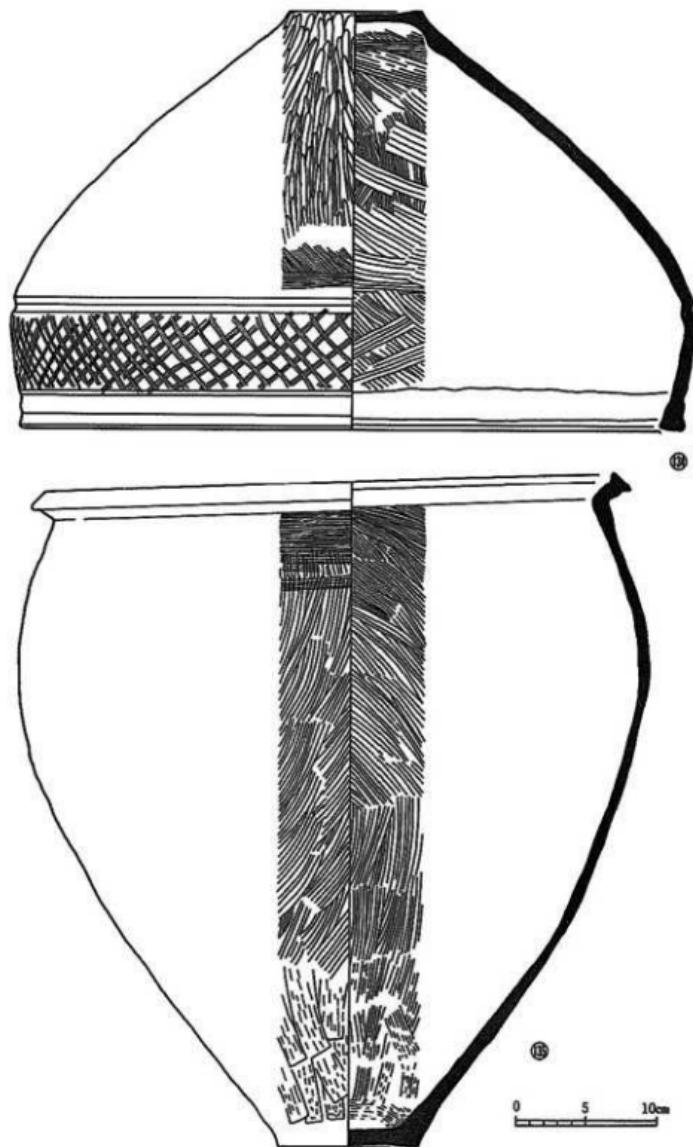
第46図 19号方形周溝墓1号・2号主体部平面図・断面図

されていなかった様だ。

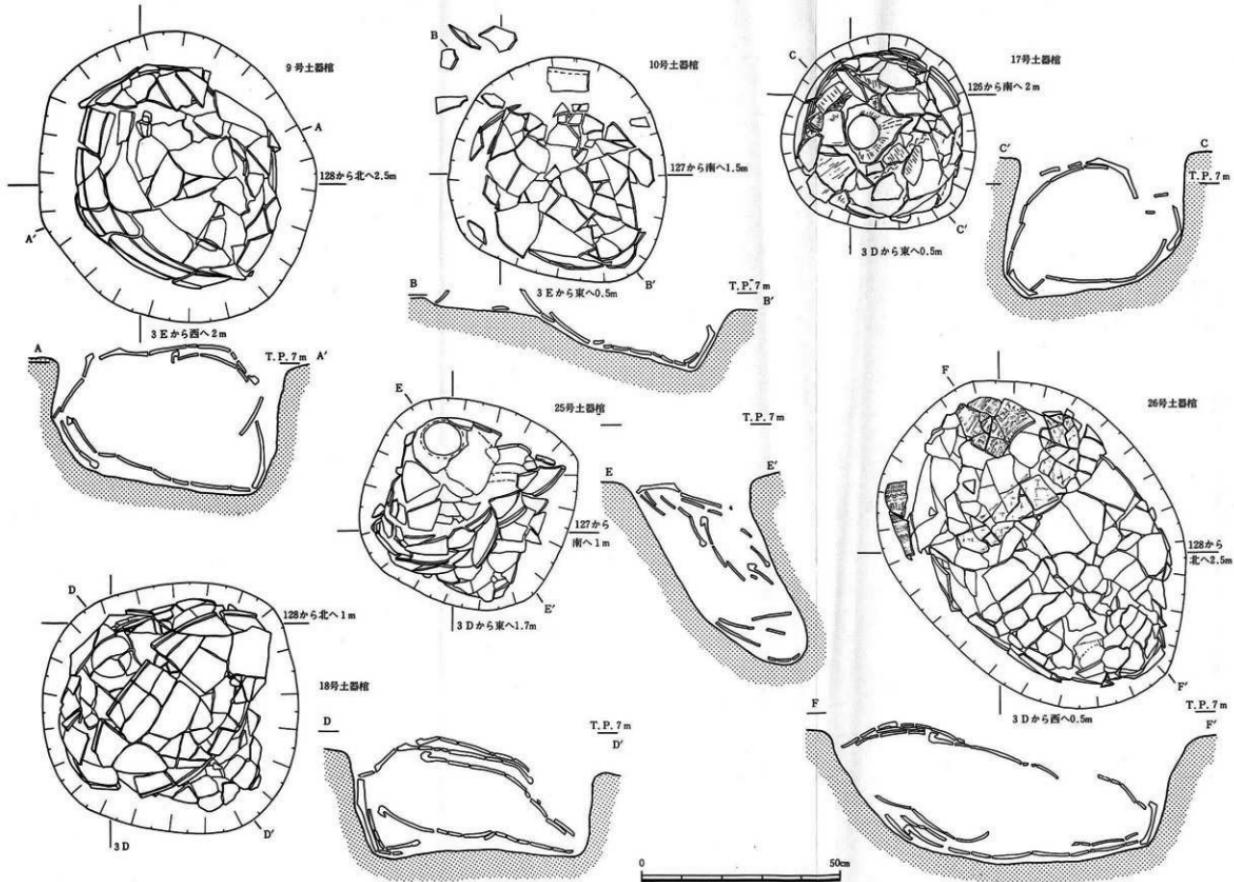
1号主体部 $2.3m \times 0.8m$ の墓壇に、組み合わせ式木棺を埋置している。木棺は、腐朽が著しく、木質部は全く遺存しなかった。平面の土色の違いで、側板と小口板の痕跡を確認した。土色は黒灰色粘土に変化しており、比較的検出は容易であった。側板 $2m$ 、西小口板 $0.35m$ を測り、東側は矢板打設時に攪乱されている。

棺内に人骨の痕跡を検出したが、これも腐朽が著しく被葬者の詳細は不明である。但し、歯の痕跡の位置から、頭部を北東に向けて埋置されていたようである。棺の主軸は、N- 60° -Eの方位を示す。

2号主体部 二重の掘り方を検出した。外側の掘り方が墓壇で、内側の掘り方が木棺になるものと考えられる。幅は外側約 $0.9m$ 、内側約 $0.4m$ を測り、長さは $2m$ 前後と推定される。1号



第47図 19号方形周溝墓 9号土器棺

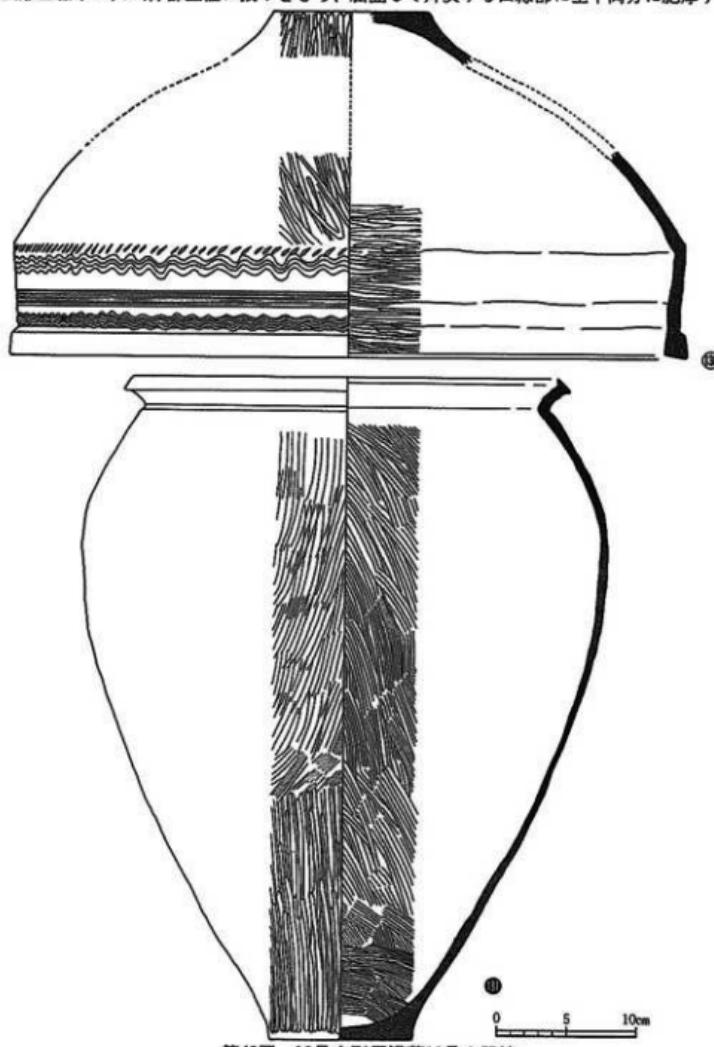


第48図 19号方形周溝墓 9号・10号・17号・18号・25号・26号土器棺平面図・断面図

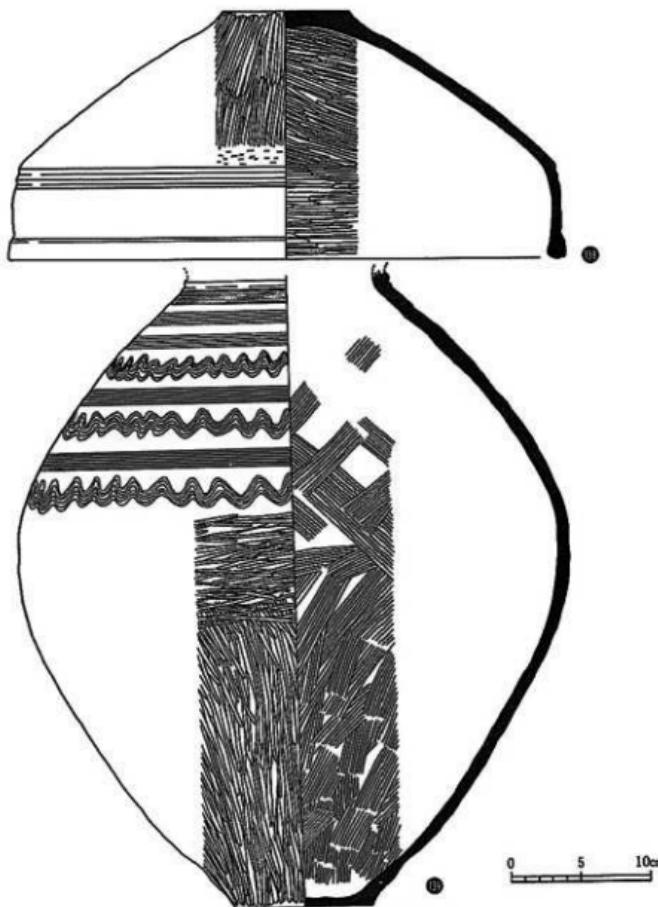
主体部とほぼ平行し、同時埋葬の可能性もある。主軸はN-60°-Eの方位を示す。

9号土器棺 墳丘上南隅東寄りに埋葬されていた土器棺で、變形土器(135)を身に、鉢形土器(134)を蓋に使用している。棺の主軸はN-65°-Eの方位を示す。棺内から人骨は検出されなかった。

變形土器(135)は、体部上位に張りをもち、屈曲して外反する口縁部に上下両方に肥厚する端部



第49図 19号方形周溝墓10号土器棺

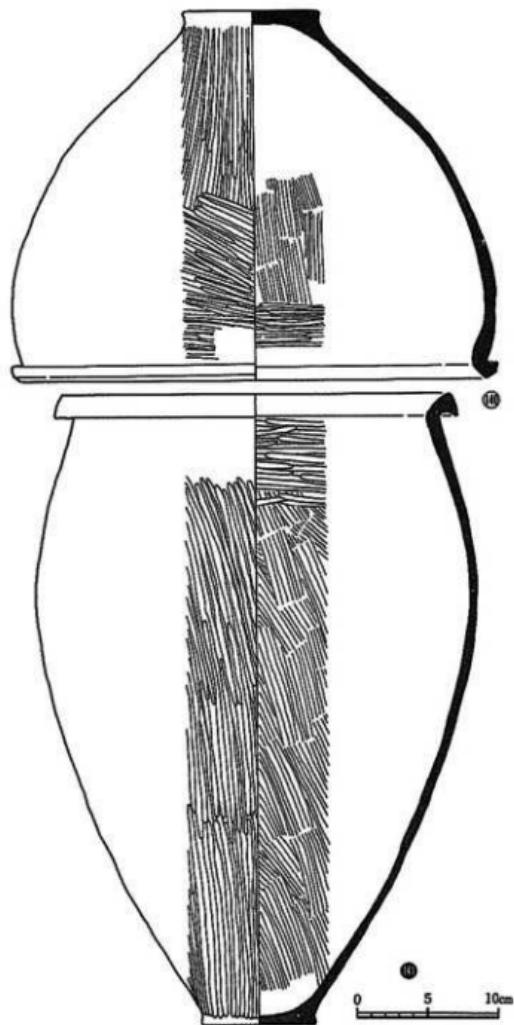


第50図 19号方形周溝基17号土器棺

を有する。体部外面は刷毛調整で底部付近はヘラ削りである。内面は削毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

鉢形土器(134)は、ゆるやかに屈曲し内側氣味に直立する体部からそのまま終わる口縁部を有し端部は外に肥厚する。屈曲部に凹線文、直立部に斜格子文を施し、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整している。色調は淡褐色を呈す。

10号土器棺 墓丘上東隅に埋置されていた土器棺で、変形土器(137)を身に、鉢形土器(136)を蓋に使用している。棺の主軸は、N-35°-Wを示す。棺の破損は著しく、蓋は墓塙付近及び墳丘斜



第51図 19号方形周溝基25号土器棺

鉢形土器(138)は、ゆるやかに屈曲してやや内寄する体部から、そのまま終わる口縁部が段状口縁部をなす。屈曲部に2条の凹線文を施し、内外面共ヘラミガキ調整である。色調は茶褐色を呈し、これも生駒西麓産の胎土をもつ。

25号土器棺 墳丘上ほぼ中央に位置し、2号主体部の真上に埋置されていた。深い墓域内に、

面に散乱していた。棺内に入骨は検出されなかった。

変形土器(137)は、体部上位に張りをもち、屈曲して外反する口縁部を有し、端部は上下両方に肥厚する。外面上半は刷毛調整、下半はヘラミガキ、内面は刷毛調整である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(136)は、屈曲部に棱をもち、やや内傾して直立する体部からそのまま終る口縁部が、段状口縁部をなす。

曲部に刻目文、直立部に波状文と直線文を施す。内外面共ヘラミガキ調整で、色調は淡褐色を呈す。

17号土器棺 墳丘上北隅やや西寄りに埋置されていた土器棺で、壺形土器(139)を身に、鉢形土器(138)を蓋に使用している。棺の主軸はN-45°-Wの方位を示す。遺存状態は良好であるが、棺内から人骨は検出されなかった。

壺形土器(139)は、体部中位に張りをもち「ハ」の字形に開いた体部上半に5帯の直線文と3帯の波状文を施す。体部外側中位は刷毛調整、下半はヘラミガキ、内面は刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

變形土器(141)を身とし、鉢形土器(140)を蓋として棺が構成されているが、土圧の為墓壇内で破損が著しかった。検出時の棺の主軸はN-20°-Wを示すが、本来垂直に埋置されていた可能性もある。棺内に人骨は検出されなかった。

變形土器(141)は、梢円形を呈する体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部は下方に肥厚する。外面ヘラミガキ、内面上位がヘラミガキ、中位から下半が刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

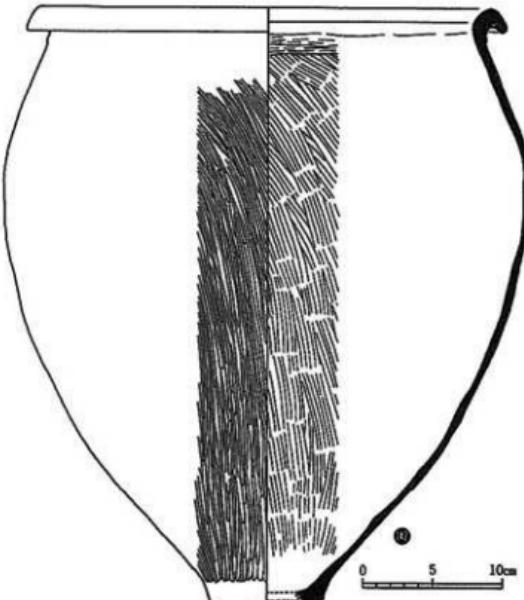
鉢形土器(140)は、屈曲部をもたず、内側気味の体部がそのまま口縁部につづく。端部は短く、外反した口縁部からやや下方に肥厚し丸くおさめる。無文で、体部上位は内外面共横方向のヘラミガキ、外面は、ヘラミガキ、内面は刷毛調整である。色調は淡茶色を呈す。

18号土器棺 墳丘上南隅西寄りに埋置されていた土器棺である。棺は、變形土器(142)を身に、鉢形土器(144)を蓋に使用している。この棺の特徴は、蓋と身の合わせ部を覆うように、半截した鉢形土器(143)を外蓋として設置している点にある。遺存状態は良好であったが、棺内に人骨は検出されなかった。棺の主軸は、N-40°-Wの方方位を示す。

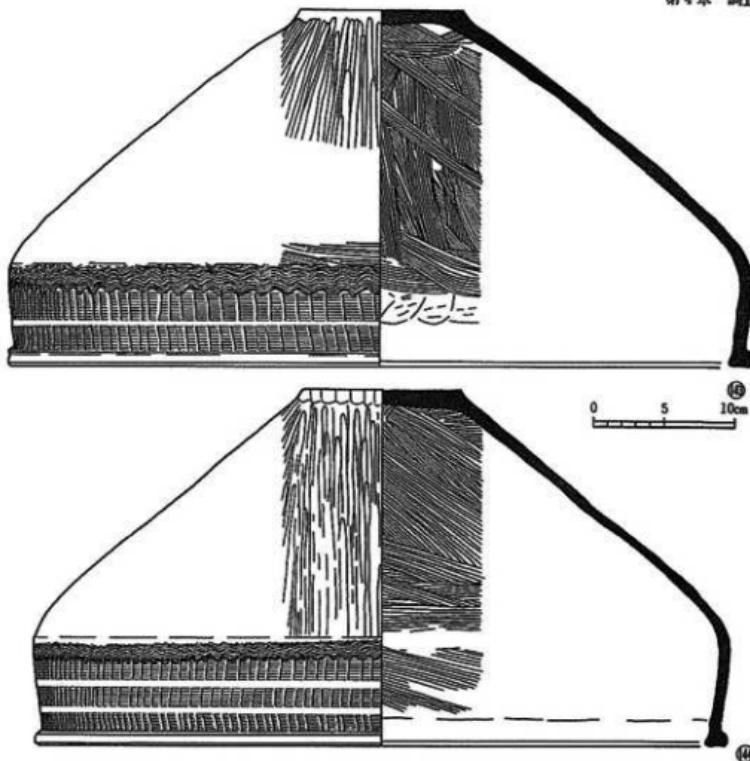
變形土器(142)は、体部中位から上位にかけて丸味を帯び、短く外反する口縁部から、垂下する口縁端部を有す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(143)は、屈曲して内傾気味に直立する体部からそのまま終わる口縁部を有し、段状口縁をなす。直立部に1帯の波状文と2帯の簾状文を施す。外面屈曲部直下に横方向の刷毛調整が残り、内面屈曲部直上に指頭圧痕がみられる。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡茶色を呈す。

鉢形土器(144)は、(143)とほぼ同様のプロポーションをもつ。施文は、簾状文が1帯多いだけで、パターンに変わりはない。調整も、外面ヘラミガキ、内面刷毛である。色調は褐色を呈す。



第52図 19号方形周溝墓18号土器棺身



第53図 19号方形周溝墓18号土器棺蓋

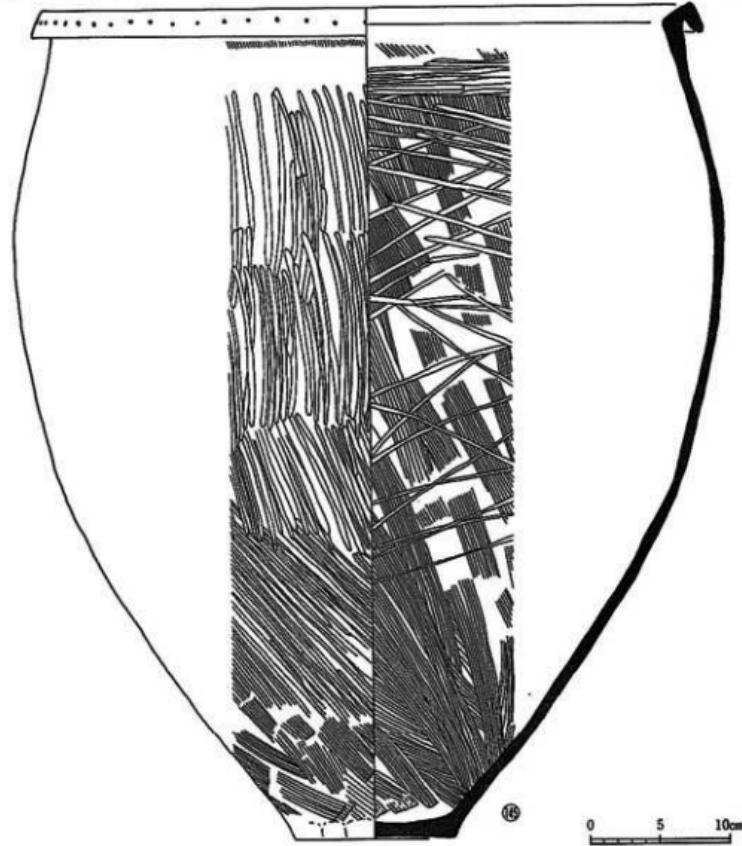
26号土器棺 墳丘上南西辺中央に埋置されていた土器棺で、18号土器棺の北に位置する。今回の調査で検出した土器棺の中で最も規模が大きいと共に、特徴的な組み合わせで構成される土器棺の一例である。棺を埋置した墓壇は、 $0.9\text{m} \times 0.65\text{m}$ 、深さ 0.35m を測り平面プランは橢円形を呈す。棺は變形土器(145)を身に、体部中位と頭部で打ち欠き三分割した細口壺形土器(146)を蓋に使用している。棺の実質的な構成は、變形土器と細口壺形土器体部下半の合わせ口による。この合わせ部に、細口壺形土器体部上半を覆い外蓋としている。さらに外蓋と内蓋の合わせ部を細口壺形土器口縁部で覆い26号土器棺を形成している。棺はほぼ水平に埋置されており、主軸はN-35°-Wの方位を示す。棺内に人骨は検出されなかった。

變形土器(145)は、体部最大径約 0.5m 、器高 0.6m を測る大型の變形土器である。丸味をおびた体部から短く外反する口縁部を有し、端部は粘土紐を附加し下方に垂下する。口縁部外面に刺突文を施す。体部外面下位は刷毛調整、中位から上位にかけて弧状のヘラミガキを三段に分けて行っている。又体部内面は刷毛調整の後、左右両方廻りの螺旋状ヘラミガキ調整である。色調は

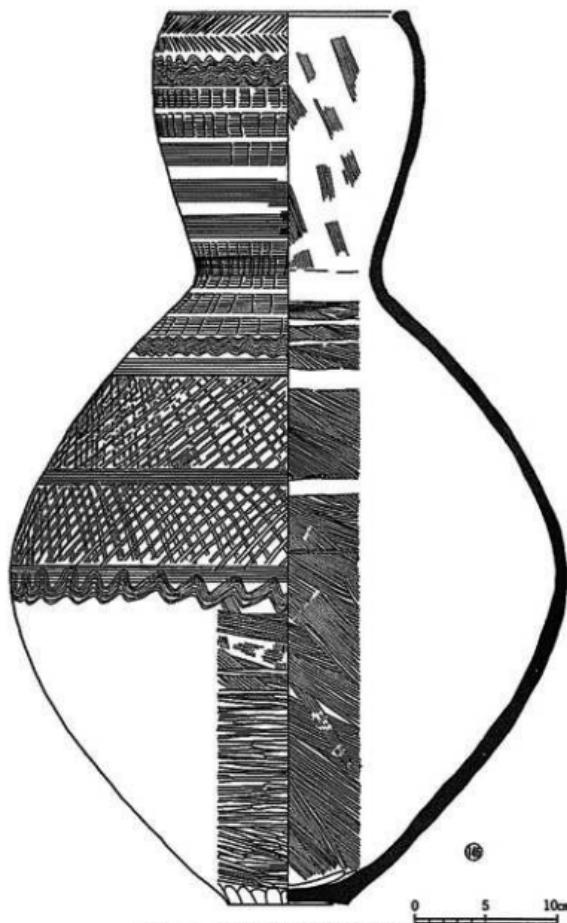
淡茶色を呈す。

細口壺形土器(146)は、中位に張りをもつ体部から細くしまった頸部をもち、外反気味に上方へのびる口縁部は、内側して外方にやや肥厚する端部を有す。施文は、口縁端部から体部中位まで連綿と施される。口縁端部から、2帯の列点文→波状文→2帯の簾状文→簾状文様直線文→2帯の直線文・頸部に2帯の簾状文、体部に移り、2帯の簾状文→波状文→直線文→斜格子文→直線文→斜格子文→直線文→波状文などである。調整は、外面体部下半が刷毛調整後ヘラミガキ、内面が刷毛調整である。内面頸部と体部上半にナデ調整もみられる。色調は淡褐色である。

19号方形周溝墓北東・南東周溝出土遺物 南東周溝から出土した土器は、壺形土器(155)一点で他の全ては北東周溝から出土した。3E-126付近で周溝墓北隅の陸橋部東側に集中して出土し



第54図 19号方形周溝墓26号土器棺身



第55図 19号方形周溝基26号土器棺蓋

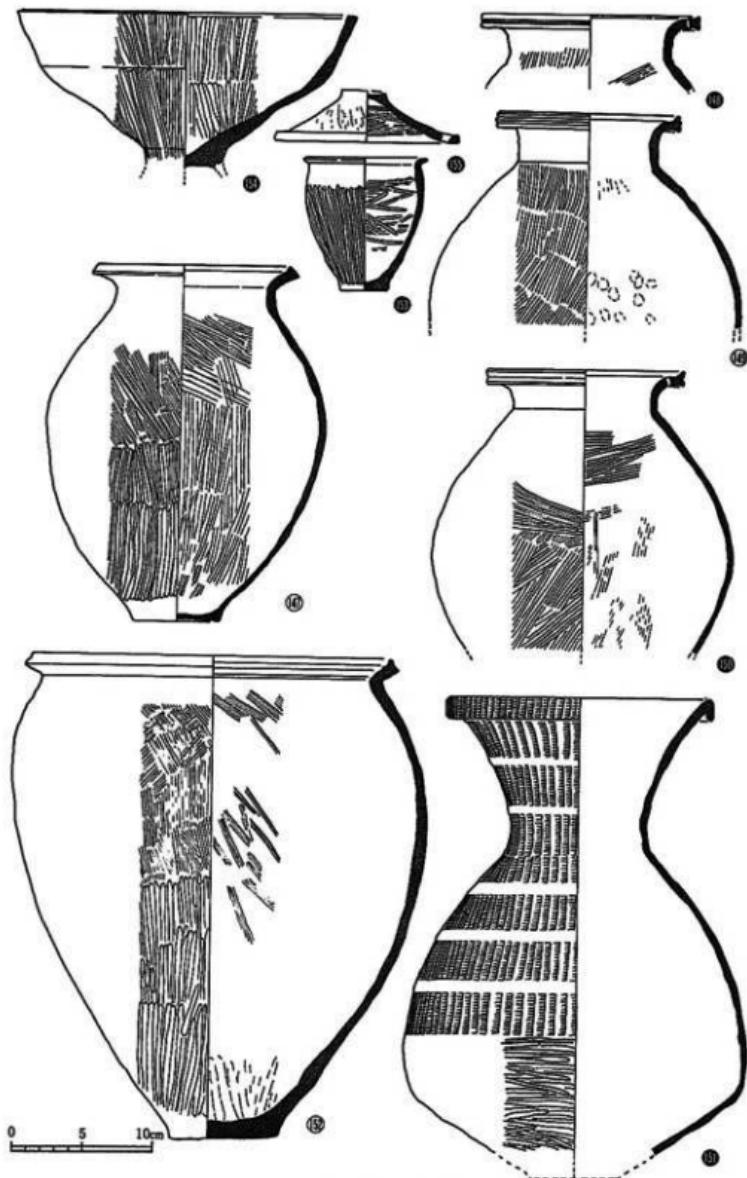
に7帯の簾状文を施す。外面の調整はヘラミガキである。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

変形土器は、上位で丸味を帯びる体部から、屈曲して外反する口縁部の端部が上方に肥厚する大型変形土器(152)と、口縁部径と体部最大径がほぼ同じで、屈曲し外反する口縁部の端部を丸くおさめる小形変形土器(153)がある。(152)は、外面上半を刷毛調整、下半をヘラミガキ、内面を刷毛調整、内面底部をナデ調整している。色調は淡茶色を呈す。(153)は、外面を丁寧にヘラミガキし、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

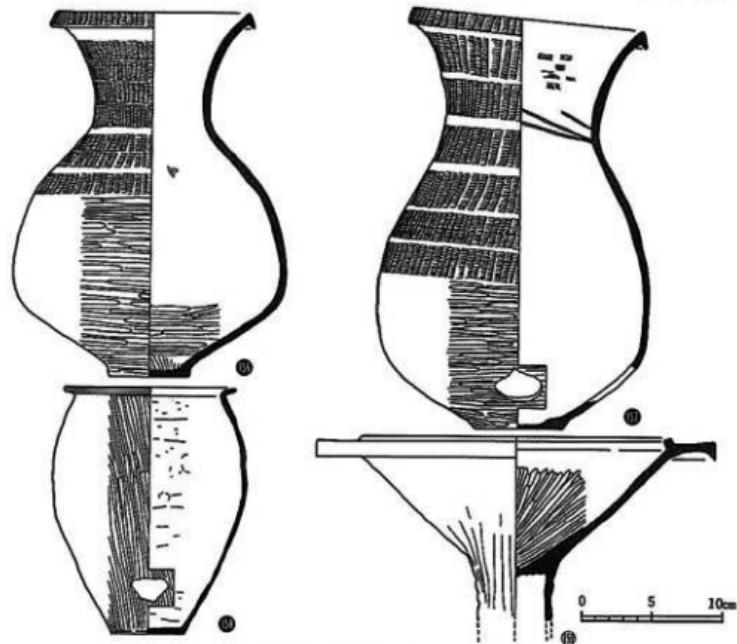
た。壺形土器の出土量が最も多いと共に、生駒西麓産の胎土をもつ土器が多い事も特筆に値する。

壺形土器は、球状の体部から屈曲して直立する頸部をもち、外反もしくは水平に外反した口縁部に上下へ肥厚する端部を有するもの(147, 148, 149, 150)下位に張りをもつ体部から漏斗状に広がる頸部をもち、垂下して面をなす端部を有するもの(151)の2タイプがある。(148, 149, 150)は口縁部外面に凹線文を施し、内外面共刷毛調整である。(148, 150)は、水平に外反した口縁部に、紐孔を穿つ。(147)は、外面上半刷毛調整、下半ヘラミガキで、内面は刷毛調整である。色調は、(147)が淡茶色、(149)が淡褐色、(148)と(150)が茶褐色を呈す。又(148)と(150)は生駒西麓産の

胎土をもつ。(151)は口縁部外面に1帯、頸部から体部



第56図 19号方形周溝墓北東・南東周溝出土遺物



第57図 19号方形周溝基南西周溝出土遺物

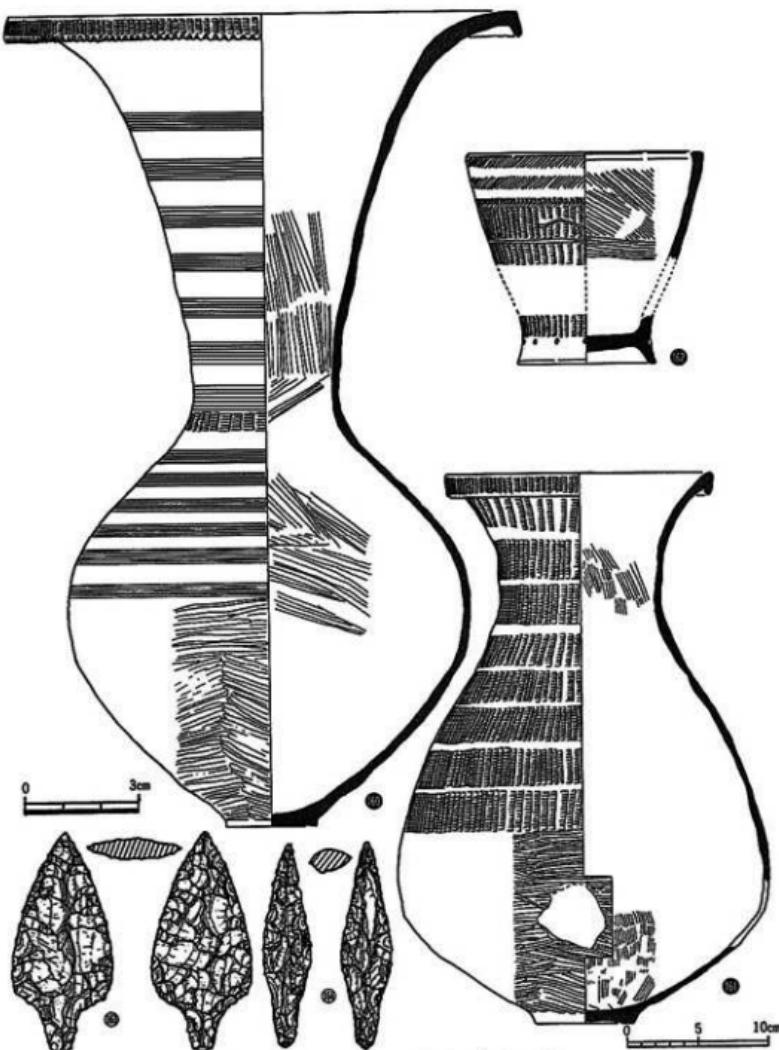
脚部を欠損した高環形土器(154)は、縁をもち外反する体部がそのまま口縁部となり、端部が水平に面をなす。内外面へラミガキ調整で、色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

南東周溝から唯一出土した壺形土器(155)は、口縁部が水平にひらき、端部は面をもつ。2孔1対の紐孔をもち、外面へラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

19号方形周溝基南西周溝出土遺物 3D-128から南西へ1.5mの地点付近に位置し、南西周溝に残された陸橋部周辺から出土した土器である。第57図に図示した4点が出土したに過ぎない。

壺形土器(156、157)は、下位に張りをもつ体部から、漏斗状にひらく口頸部をもち端部が垂下面をもつ。(156)は口頸部が細くしまるが、(157)は体部からなだらかに口頸部に移行する。相方共口縁部外面に1帯、口頸部から体部にかけて6帯の簾状文を施し、外面へラミガキ、内面刷毛調整である。又色調、胎土共ほぼ変わりなく、茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。157は体部下位に穿孔を穿つ。

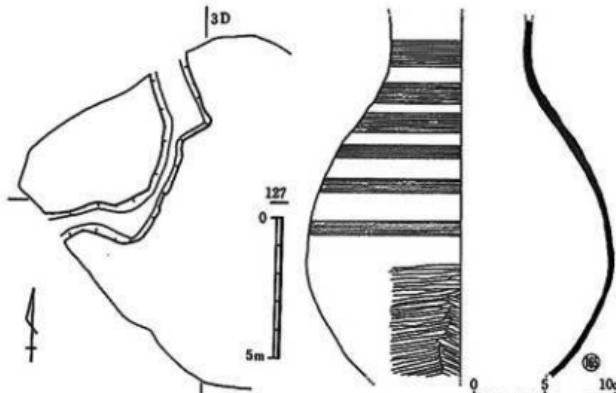
壺形土器(158)は、中位から上位に丸味をおびた体部から水平に外反した口縁部の端部を丸くおさめる。外面へラミガキ、内面へラ削りで底部面にもヘラミガキしている。体部下位に穿孔を穿つ。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。



第58図 19号方形周溝墓盛土内出土遺物

高環形土器(159)は、水平にひろげた口縁部の内端に突帯をもち、外端は下方に肥厚する高環Bに属す。坏部は内外面共ヘラミガキで、色調は淡褐色を呈す。

19号方形周溝墓盛土内出土遺物 主体部確認の為盛土を除去する際に出土した遺物で、(160~162)の土器と(163、164)の石器がある。壺形土器は、球状に近い体部から頸部が細くしまり漏斗



第59図 19号方形周溝墓盛土下溝 第60図 19号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物

状に大きくひらく口頭部をもち、端部が垂下するもの(160)と下位に張りをもつ体部からそのまま直立する頭部へつづき、漏斗状にひらく口頭部から口縁端部が、垂下するもの(161)がある。(160)は口縁部外面に1帯の簾状文と刻目文、口頭部に7帯の直線文、頭部に1帯の簾状文、体部上半に6帯の直線文を施す。外面ハラミガキ、内面刷毛調整である。(161)は口縁部外面に1帯、口頭部から体部上位に8帯の簾状文を施し、体部下位に穿孔を穿つ。外面ハラミガキ、内面刷毛調整である。両者共、色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

第60図 19号方形周溝墓盛土下溝 内出土遺物

特殊鉢形土器(162)は、斜めにひらく体部からそのままやや内側する口縁部につづき、端部が内側に肥厚する。平底の底部に粘土紐を附加して台部としている。施文は、口縁部に2帯の列点文、体部に3帯の簾状文、底部に1帯の簾状文と一列の刺突文がみられる。又体部簾状文施文後にヘラ記号とヘラによる縦状の文を施す。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

石鎚(163)は、幅広の凸基有茎式で、先端は鋭く尖る。A面、B面共に調整剝離を施し、A面には鋸が通る。逆剥は円味をもち、断面は扁平な菱形を呈す。石鎚(164)は、細身の凸基有茎式でB面に大剝離面を残すが概ね全面に細かい調整剝離がみられる。両面に鋸が通り断面菱形を呈す。

19号方形周溝墓盛土下溝 盛土を除去した後、方形周溝墓のベース層である灰青色シルト層上面に検出した溝である。周溝墓底面西隅を「コ」の字状に囲む溝で、上幅1.5m～0.7m、下幅1m～0.3m、深さ0.15mを測る。溝内から壺形土器(165)が出土した。

23号方形周溝墓盛土下溝の項でもふれたが、この溝は19号方形周溝墓築造前に存在した方形周溝墓の周溝と仮定した。即ち、19号方形周溝墓断面図(第44図)の各層は、炭化物を含む黒灰色粘質シルトが旧周溝内堆積層、黒灰色粘質シルトが旧周溝墓の盛土をならした層、灰青緑色粘質シルトが新たに盛土した層と理解できる。しかし、周溝墓を削平し別の周溝墓を築造するには、周溝墓を築造する共同体及び周溝墓に関する意識・思想に何らかの変化が想定され得る。仮定の上で推論は避け、ここでは問題提起としておきたい。

この溝から壺形土器(165)が出土した。中位にゆるやかな張りをもつ体部から直立する頭部に、なだらかに移行する。口縁部及び底部は欠損している。頭部から体部にかけて6帯の直線文を施

す。上3帯と下3帯の施文原体は相違する。体部外面はヘラミガキ調整であるが、内面調整は不明瞭である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

〈18号方形周溝墓〉 3F-129~130を墳丘上幅対角線とする方形周溝墓で、19号方形周溝墓の南東に位置する。墳丘の平面プランは、ほぼ正方形を呈し、上幅1辺7m、下幅1辺10m、溝底からの墳丘高1.7mを測る。北周溝は、19号、34号方形周溝墓と共有している。南東周溝はトレント外の為不明、南西周溝は古墳時代自然河川によって崩壊している。西隅に陸橋部を残している様である。主軸はN-35°-Wの方位を示す。遺構現状保存の為盛土は掘削していない。従って埋葬施設については不明である。又供獻土器は殆んど出土していない。

〈32号方形周溝墓〉 3D-129に墳丘裾部の一部を確認した。墳丘の殆んど全てが、古墳時代自然河川によって破壊されている。

〈26号方形周溝墓〉 3E-132に位置する方形周溝墓で、南西斜面の裾部を確認した。32号方形周溝墓同様、古墳時代自然河川によって墳丘は崩壊している。確認出来た南西辺から、長軸約16mを測り、主軸はN-45°-Wの方位を示す。南西周溝は16号方形周溝墓と共有する。26号方形周溝墓の供獻土器と特定出来る土器は出土していない。

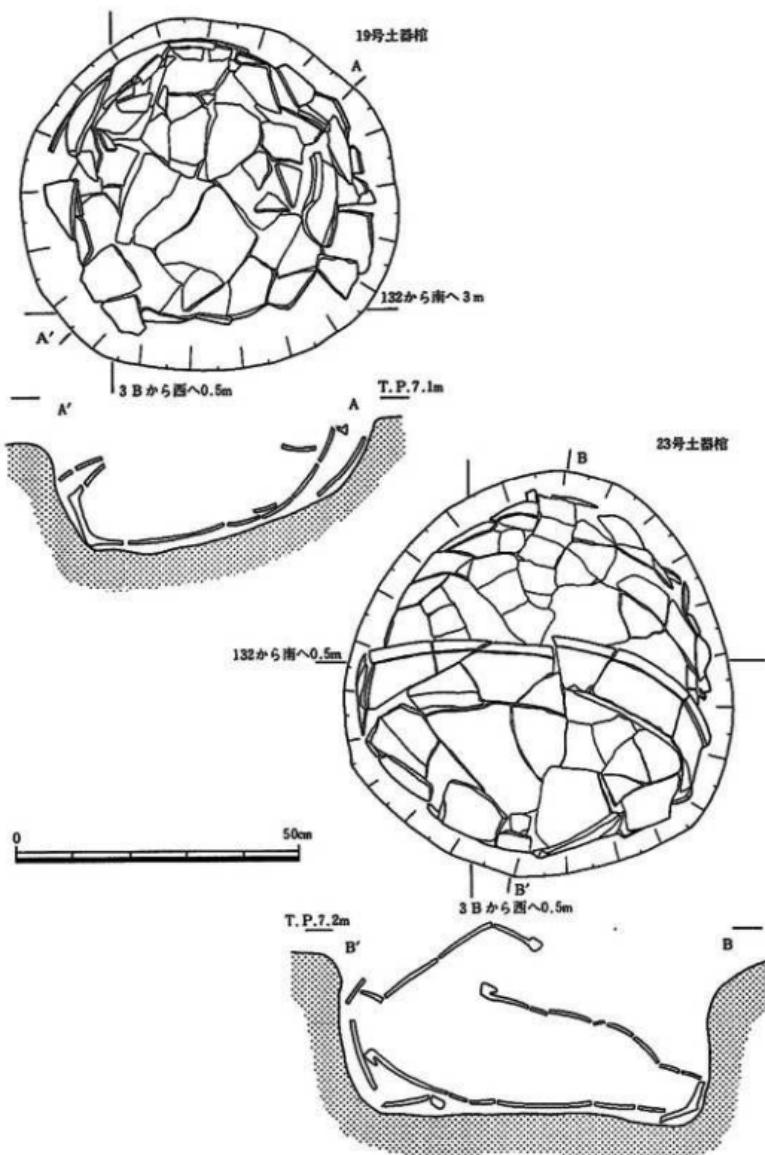
〈29号方形周溝墓〉 3B-132に位置する方形周溝墓で、墳丘南東部と南東斜面を確認した。短軸で墳丘上幅が約8m、下幅が約10m、溝底からの墳丘高約1.7mを測る。南東周溝は、17号方形周溝墓と共有し、東・南隅に陸橋部を残す。主体部は、墳丘の殆んどがトレント外に位置する為確認出来なかったが、土器棺2基が検出された。墳丘主軸はN-45°-Wの方位を示す。供獻土器は、南東周溝に出土した土器の内、出土状態から17号方形周溝墓北西周溝出土供獻土器と区別した。周溝墓ベース層上面直上から出土した土器はない。

19号土器棺 墳丘上南隅に埋置されている土器棺で、3B-132から南へ3mの地点に位置する。棺は、菱形土器(166)を身に使用し、鉢形土器を蓋に使用している様だが、蓋の破損が著しく接合出来なかった。棺の主軸は、N-50°-Eの方位を示し、菱の底部を南西、口縁部を北東にし埋置している。棺内に人骨は検出されなかった。

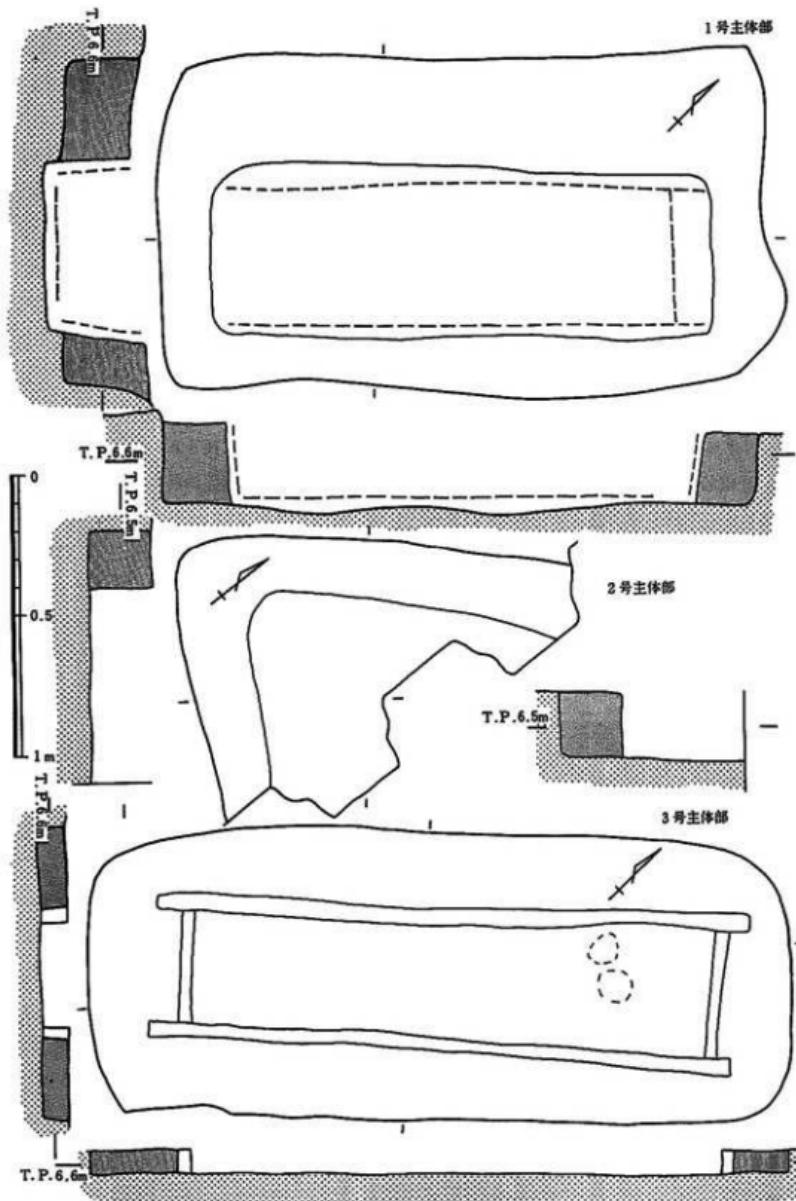
菱形土器(166)は、上位で球状に張りをもつ体部から屈曲して外反する口縁部をもち、端部は上方に肥厚する。外面上位から中位が刷毛調整、下位がヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

23号土器棺 墳丘上南東辺中央に埋置されている土器棺で、3B-132付近に位置する。棺は、菱形土器(168)を身に、鉢形土器(167)を蓋に使用している。残存状態は極めて良好であった。棺の主軸は、S-10°-Wを示し、菱の口縁部を南に、鉢の口縁部を北に向け埋置している。棺内に人骨は検出されなかった。

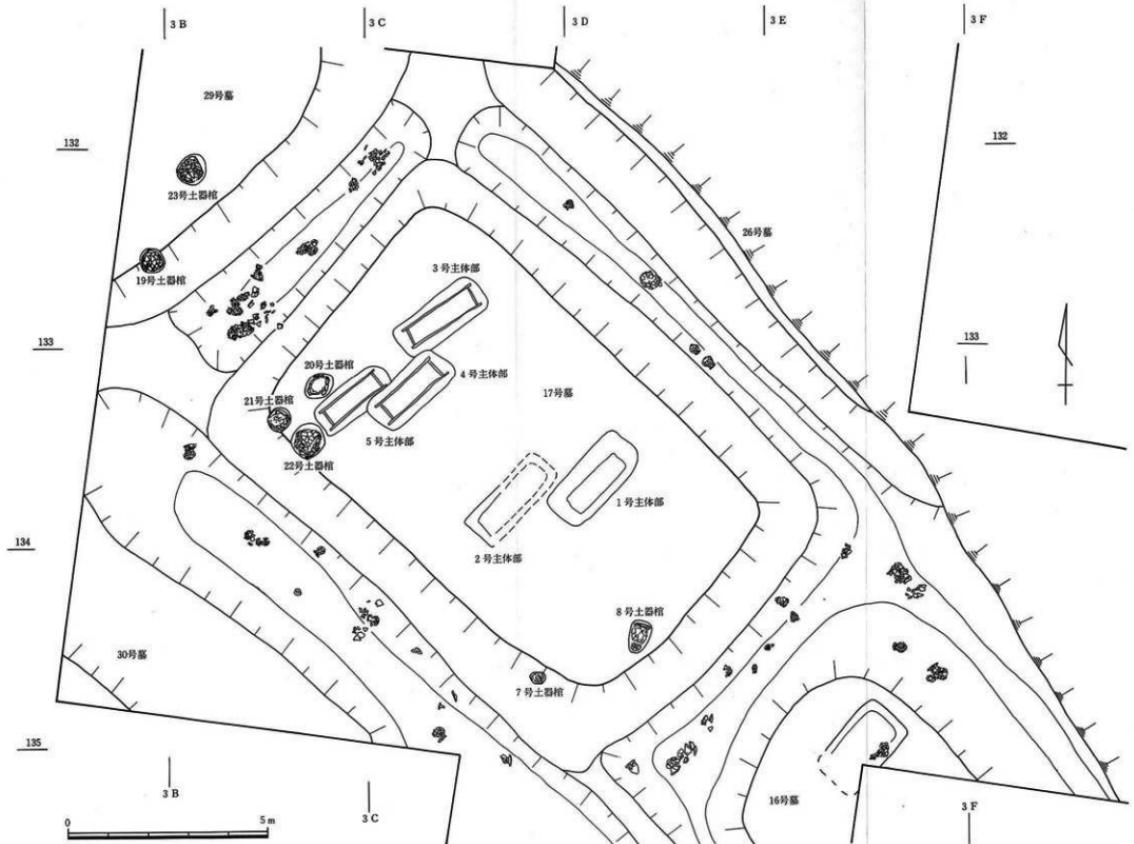
菱形土器(168)は中位から上位にかけて球状の張りをもつやや調長の体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部は垂下し面をなす。口縁部外面に一列の刺突文を施す。体部外面は、3段にわけた孤状のヘラミガキ調整である。内面は、刷毛調整の後、中位に右上りの螺旋状ヘラミガキ



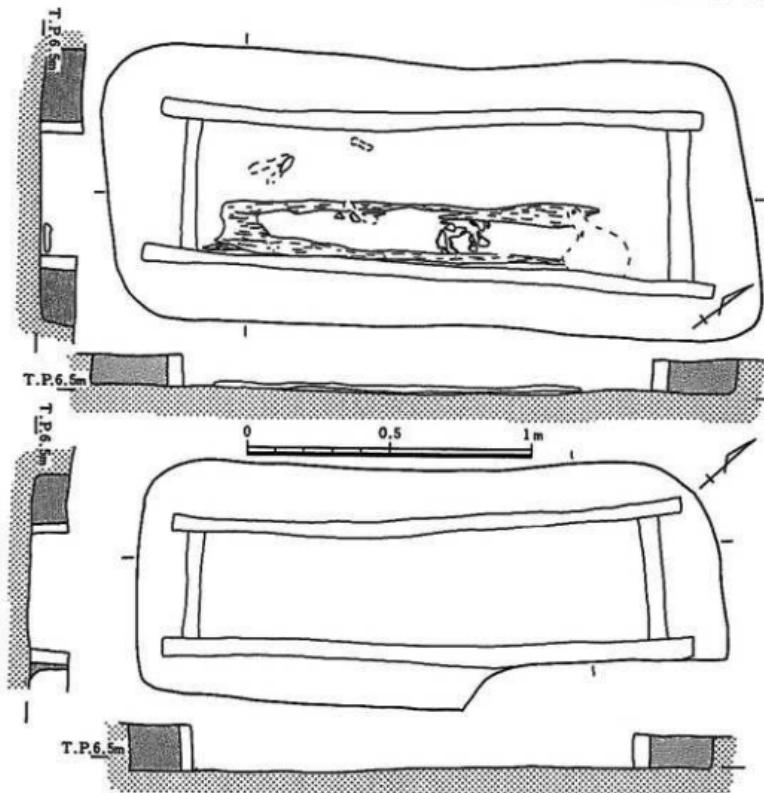
第61図 29号方形周溝墓19号・23号土器棺平面図・断面図



第66図 17号方形周溝墓 1号・2号・3号主体部平面図・断面図



第67図 17号方形周溝墓周辺全体図



第68図 17号方形周溝墓4号・5号主体部平面図・断面図

置された方向は判明しなかった。棺の主軸は、N-45°-Eの方位を示す。

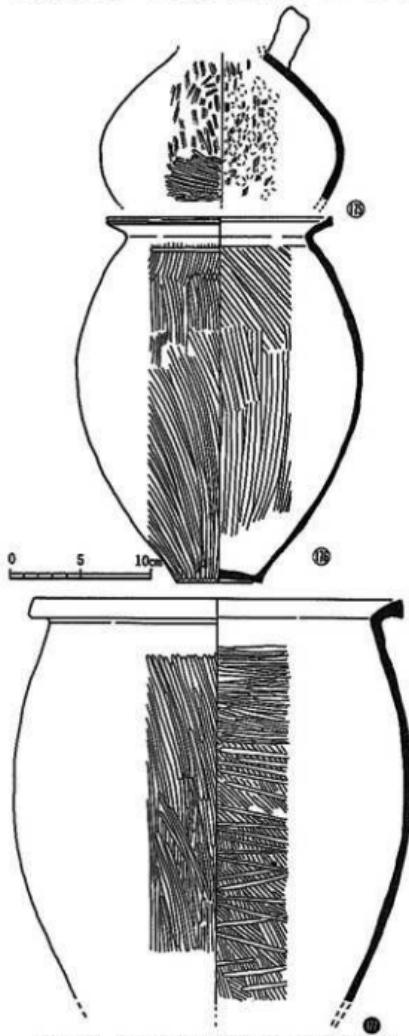
2号主体部 拡張部調査時、墓塚と棺の掘り方を確認した。規模は1号主体部とほぼ同様と推察される。主軸も1号主体部とほぼ平行で、N-45°-Eの方位を示すと考えられる。位置的には、当主体部が中心主体と考えられるが、盛土断面で見る限り1号主体部が先行して埋置されている。

3号主体部 2.45m×1mの墓塚に組み合わせ式木棺を埋置している。木棺の木質部は、灰黒色粘土に変化していた。側板2.05m、東小口板0.45m、西小口板0.4mを測る。棺内東側に人骨の痕跡をわずかに検出したが、腐朽が著しい。棺の主軸はN-55°-Eの方位を示す。

4号主体部 2.2m×0.95mの墓塚に組み合わせ式木棺を埋置している。側板、小口板は灰黒色粘土に変化していたが、底板の一部に木質部が遺存していた。側板2m、東小口板0.5m、西小口板0.45mを測る。棺内に腐朽の著しい人骨の痕跡がわずかに遺存していたが、その形状から頭部を北東に向け埋置されていたようである。棺の主軸は、N-50°-Eの方位を示す。墓塚の切り

合いの関係から、当4号主体部は、3号・5号主体部より後に埋置されたと考えられる。

5号主体部 2m × 0.8m の墓域に組み合わせ式木棺を埋置していた。棺の木質部は遺存せず灰黒色粘土に変化していた。側板 1.8m 、東小口板 0.45m 、西小口板 0.4m を測る。棺内に人骨は検出されなかった。棺の主軸は N-55°-E の方位を示す。



第69図 17号方形周溝墓 7号・8号土器棺

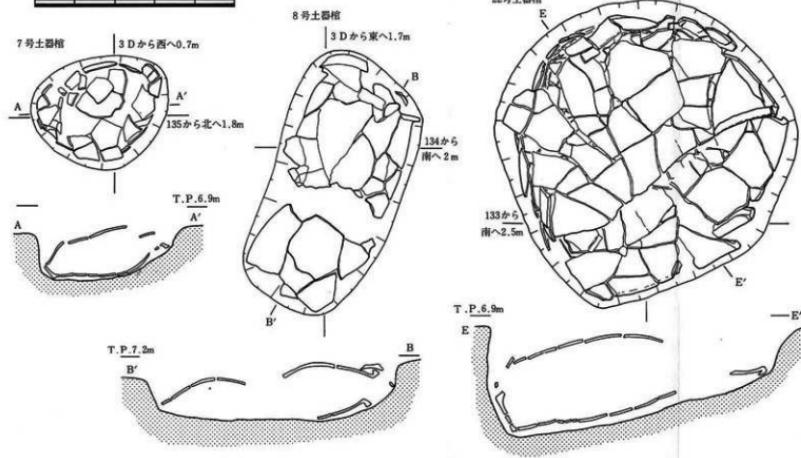
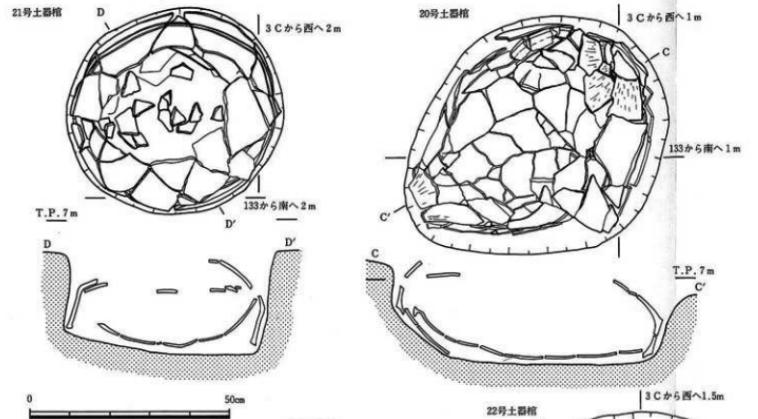
7号土器棺 墳丘上南隅に埋置されていた土器棺で、斐形土器(176)を身に、水差し形土器(175)を蓋に使用した小形のものである。棺の主軸は N-85°-E の方位を示し、蓋の口縁部はほぼ東に向いて埋置している。棺内に人骨は検出されなかった。

斐形土器(176)は、卵形の体部から斜め上方に外反する口縁部を有し、端部は上方に肥厚する。口縁部外面に凹線文を施す。体部外面上位が刷毛調整、中位から下位へラミガキ内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

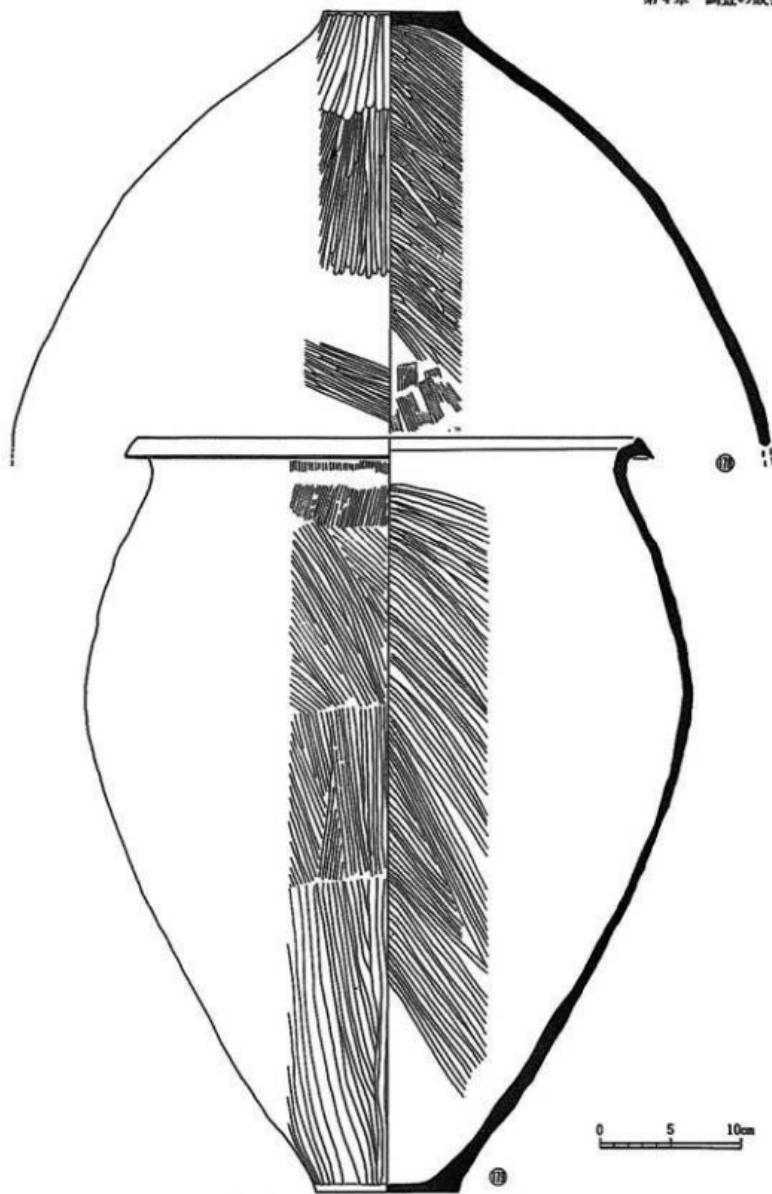
水差し形土器(175)は、底部と口縁部を欠損する。球形に近い体部に把手をもつ。無文で内外面共刷毛調整である。内面に指頭圧痕が残る。色調は淡褐色を呈す。

8号土器棺 墳丘上南隅やや東寄りに埋置されていた土器棺で、斐形土器(177)を身に使用し、蓋は特に設けていない。長方形を呈する土塚に、体部中位で半截した斐を上下に分けて埋置している。棺の主軸は、N-25°-E の方位を示す。棺内に人骨は検出されなかった。斐形土器(177)は、梢円形を呈す体部から外反する口縁部を有し、端部は下方に肥厚する。外面へラミガキで、内面は刷毛調整の後、螺旋状のヘラミガキ調整である。体部内面上位でヘラミガキは密になる。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

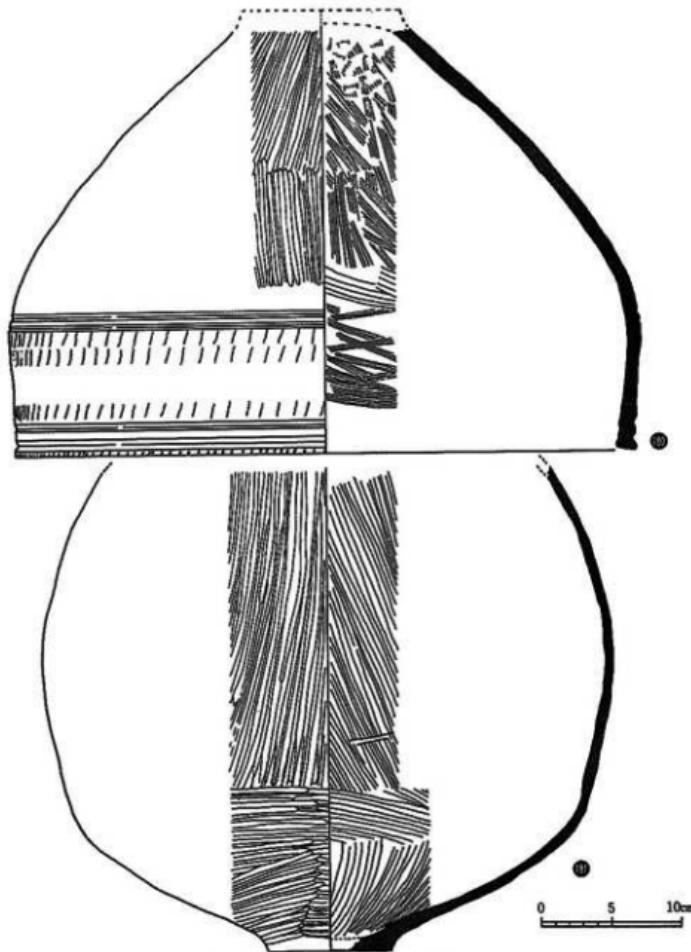
20号土器棺 墳丘上西隅に埋置されていた土器棺で、斐形土器(179)を身に蓋もしくは鉢形土器の底部(178)を蓋に使用していた。棺



第70図 17号方形周溝墓 7号・8号・20~22号土器棺平面図・断面図



第71図 17号方形周溝墓20号土器棺



第72図 17号方形周溝墓21号土器

の主軸は、N—60°—E の方位を示す。棺内に人骨は検出されなかった。

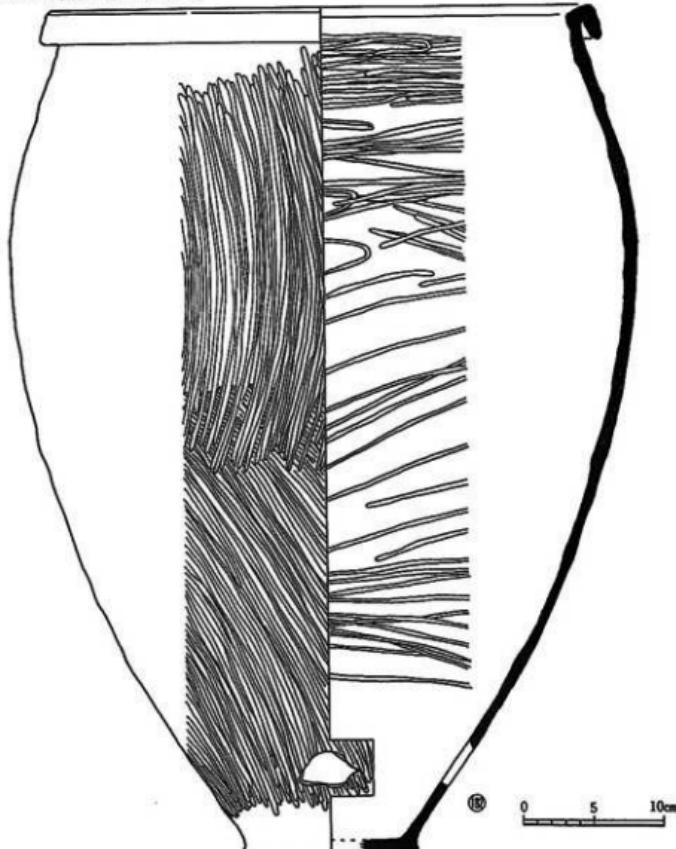
変形土器(179)は、上位に張りをもつ体部から短く立つ頸部を有し、水平に外反する口縁部の端部は上下両方に肥厚する。外面上位刷毛調整、中位から下位をヘラ削りしている。内面は刷毛調整で、色調は淡褐色を呈す。

(178)は、壺形土器か鉢形土器の底部でかなり大型の土器である。破損部内面に刷毛調整がみられる以外は内外面共ヘラミガキである。色調は淡褐色を呈す。

21号土器棺 墳丘上西隅に埋置された土器棺で、20号土器棺の南西に位置する。壺形土器の体部下半(181)を身に、鉢形土器(180)を蓋に使用している。ほぼ垂直に埋置されているが、蓋の底部はやや南東寄りに検出された。棺内に人骨は検出されなかった。

壺形土器(181)は、体部上位で打ち欠いたもので、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(180)は、ゆるやかに屈曲し内傾気味に直立する体部からそのまま口縁部につづき、端部が外方に肥厚する。屈曲部に2条、口縁部に2条の凹線文と直立する体部に3帯の列点文状の簾状文、口縁端部に刻目文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。



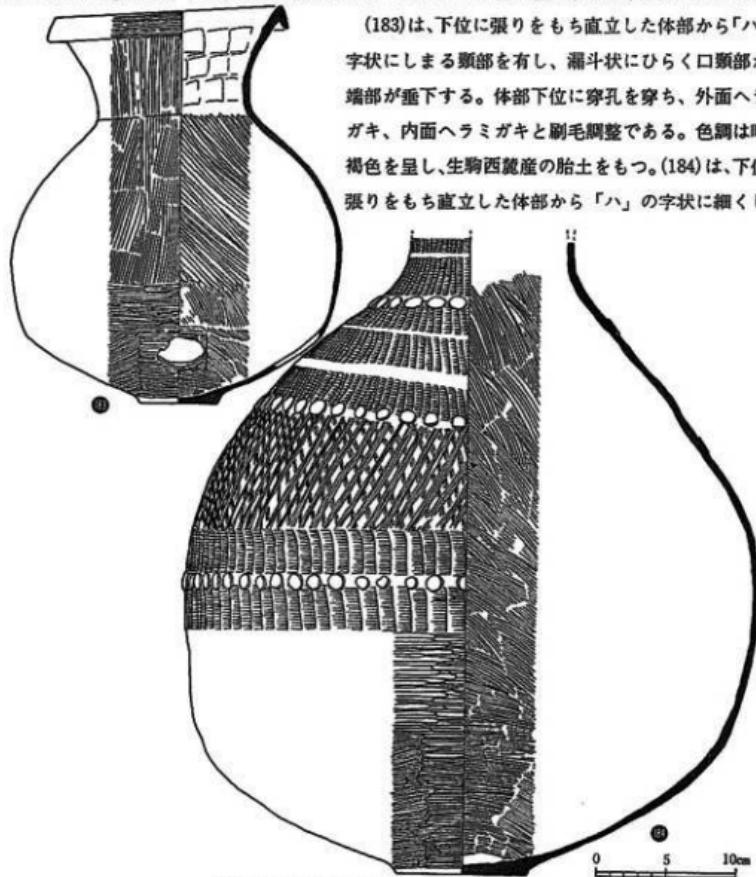
第73図 17号方形周溝墓22号土器棺

22号土器棺 墳丘上西隅に埋置された土器棺で、20号土器棺の南、21号土器棺の南東に位置する。変形土器(182)を身に使用しているが、蓋となる土器は破片すら出土していない。棺の主軸はS-35°-Eの方位を示し、蓋の口縁部を南東に向て埋置している。棺内に人骨は検出されなかつた。

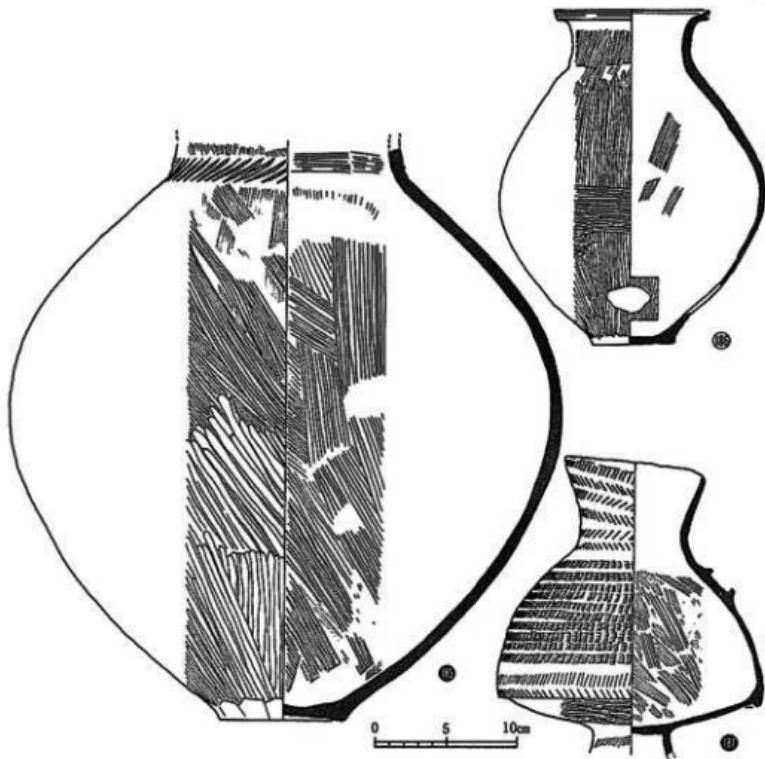
(182)は、大型の変形土器で、胴長の楕円形を呈す体部から屈曲し外反する口縁部に垂下する端部をもつ。体部外面に弧状のヘラミガキを二段にわけて施し、内面は螺旋状のヘラミガキを施す。体部下位に穿孔を穿ち、色調は淡茶色を呈す。

17号方形周溝墓北東周溝出土遺物 周溝内堆積層中から出土した土器で、出土量は少ないが、個体の残在状態は良好であった。蓋形土器(183~186)と、台付水差し形土器(187)が出土した。

(183)は、下位に張りをもち直立した体部から「ハ」の字状にしまる頸部を有し、漏斗状にひらく口頸部から端部が垂下する。体部下位に穿孔を穿ち、外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキと刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(184)は、下位に張りをもち直立した体部から「ハ」の字状に細くしま



第74図 17号方形周溝墓北東周溝出土遺物

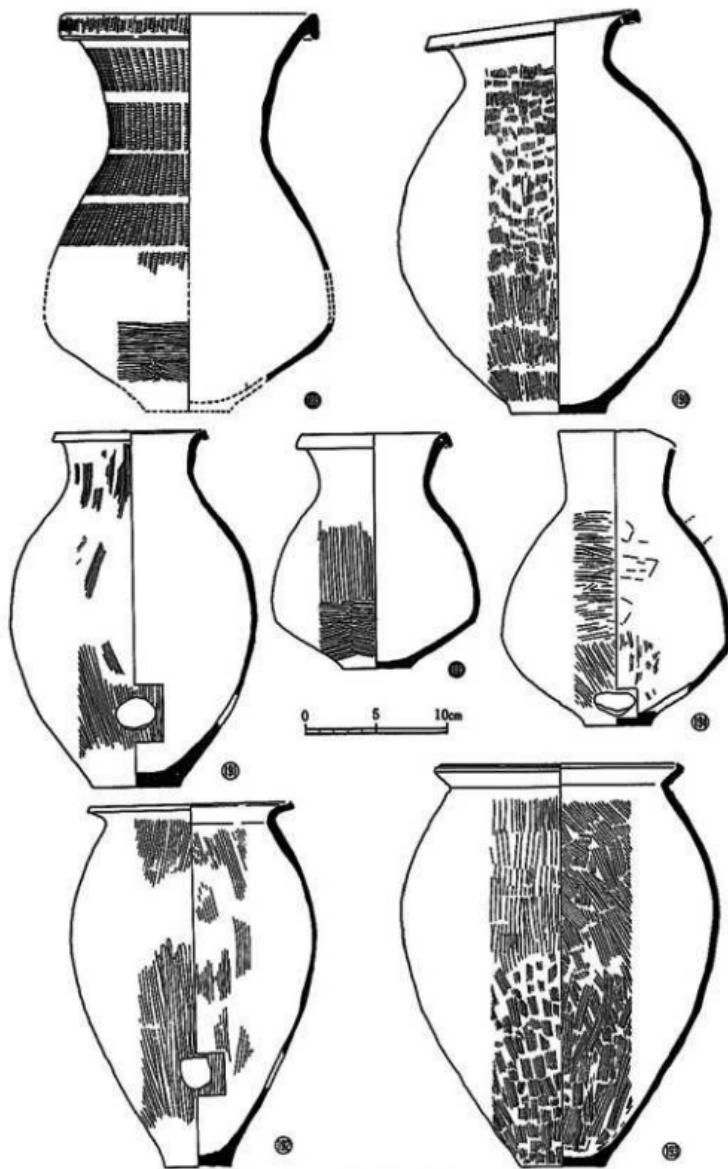


第75図 17号方形周溝墓北東周溝出土遺物

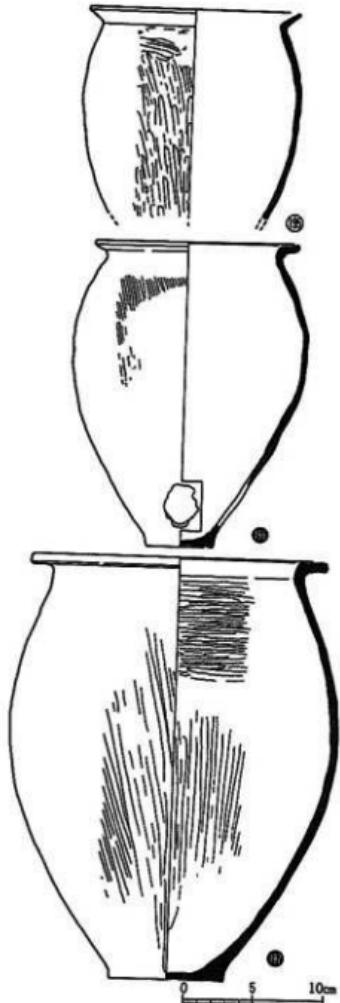
る頸部を有す。体部から頸部に7帯の簾状文、3列の円形付文、斜格子文などを施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(185)は、中位に球状の張りをもつ体部から頸部は細くしまる。頸部に刻目文を施し、外面体部下半をヘラミガキ、上半と内面は刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(186)は、中位に張りをもつ体部から直立する頸部をもち、水平に外反する口縁部の端部は上方に肥厚する。口縁部外面に凹線文を施し、体部下位に穿孔を穿つ。体部外面はヘラミガキで、頸部と内面は刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

台付水差し形土器(187)は、底部から体部へ移行する屈曲部に粘土紐を附加し垂下する。頸部は細くしまり斜め上方に立ち上がり、口縁部は短く直立し丸くおさめる。体部上位に把手を附す。口縁部から頸部に6帯の列点文、体部に10帯の簾状文、体部下位に2帯の列点文、台部に列点文を施す。底部外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。

17号方形周溝墓南東周溝出土遺物 周溝内堆積層中から出土しているが、他の周溝に比べ變形



第76図 17号方形周溝墓南東周溝出土遺物



第77図 17号方形周溝墓南東周溝出土遺物 壺形土器

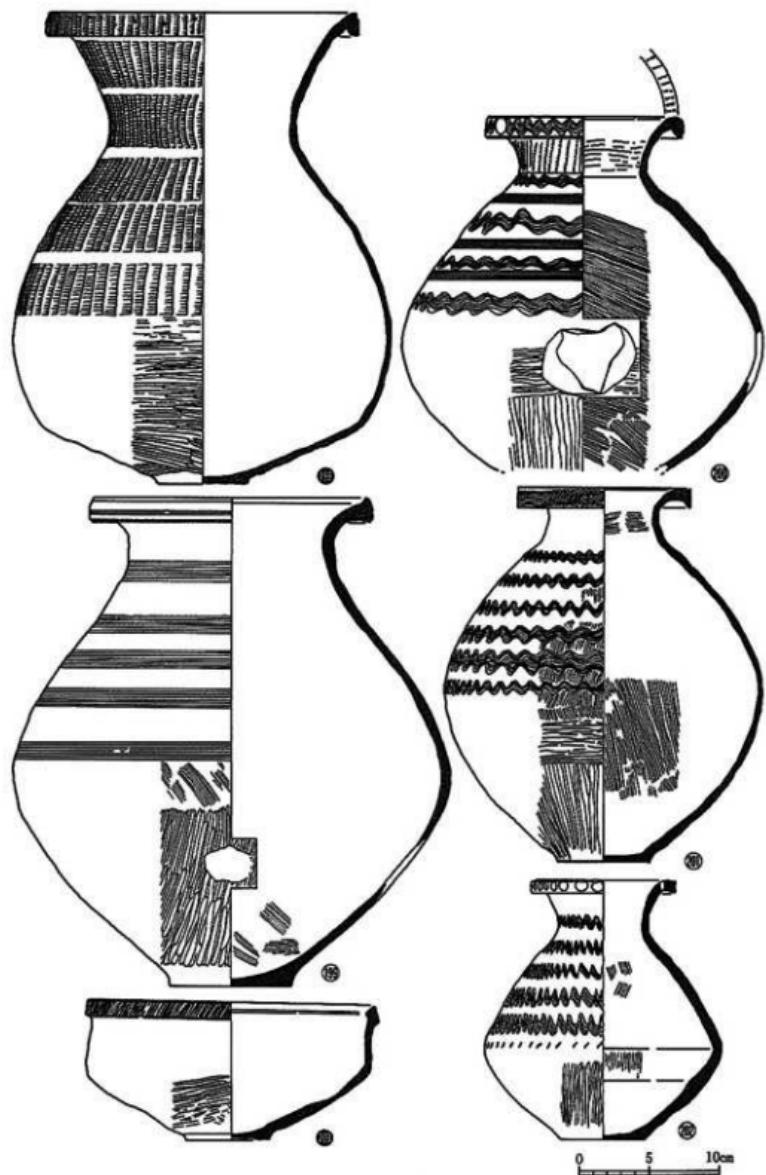
土器の出土量が多いようである。

壺形土器は、下位に張りをもつ体部からしまった頸部をもち、漏斗状にひらく口頸部から垂下する口縁部を有するタイプ(188、189)と、梢円形もしくは球形の体部から直立する頸部をもち、水平に外反する口縁部に肥厚する端部を有するタイプ(190、191)がある。(188)は、口縁部外面に1帯、口頸部から体部に5帯の簾状文を施し、外面ヘラミガキしている。色調は淡茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。(189)は無文で外面ヘラミガキである。暗茶褐色を呈し、これも生駒西麓産の胎土をもつ。(190)は外面下半はヘラミガキ上半が刷毛調整で、色調は淡褐色を呈す。(191)は体部下位に穿孔を穿ち、外面ヘラミガキと刷毛調整である。色調は淡茶色を呈す。

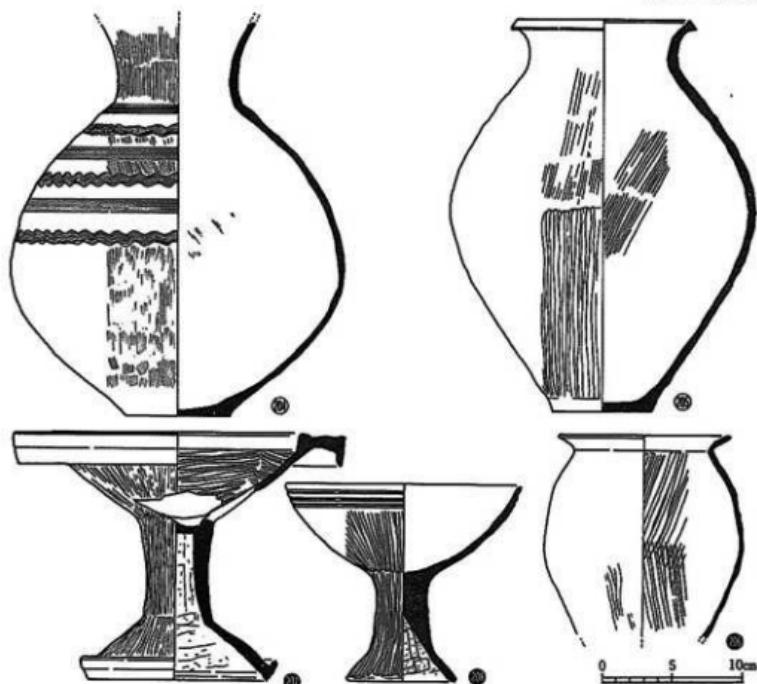
壺形土器は、水平に外反する口縁部を有するもの(192、196、197)と、斜め上方に外反する口縁部を有するもの(193、195)がある。(192)は体部下位に穿孔を穿ち、体部外面ヘラミガキと刷毛調整、内面刷毛調整で、淡茶色を呈す。(193)は、内外面共刷毛調整とヘラミガキで淡褐色を呈す。(195)は、ヘラミガキと刷毛調整で淡茶色を呈す。(196)は体部下位に穿孔を穿ち、ヘラミガキがわずかに残る。色調は淡茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土を含む。(197)は、内外面共ヘラミガキで淡茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。

水差し形土器(194)は、体部下位に張りをもち細くしまった頸部からややひらき気味に直立し、そのまま終わる口縁端部は丸くおさめる。把手は体部上端に附し、体部下位に穿孔を穿つ。無文で外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

17号方形周溝墓南西周溝出土遺物 ほぼ周溝全域にわたって出土した土器群で、壺形土器の出土量が圧倒的に多い。特に装飾性の高い壺形土器が多く出土している。これらは中位に張りをもつ体部から、短く直立もしくは外傾気味に直立する頸部をもち、ほぼ水平に外反する口縁部を有するタイプで、(199、200、201、202、204)などがある。他に、下位に張りをもつ体部が球状に頸部へつづき、漏斗状にひらく口頸部から口縁部が垂下するタイプ(198)や、無文で体部中位に張りを



第78图 17号方形周满墓南西周满出土遗物

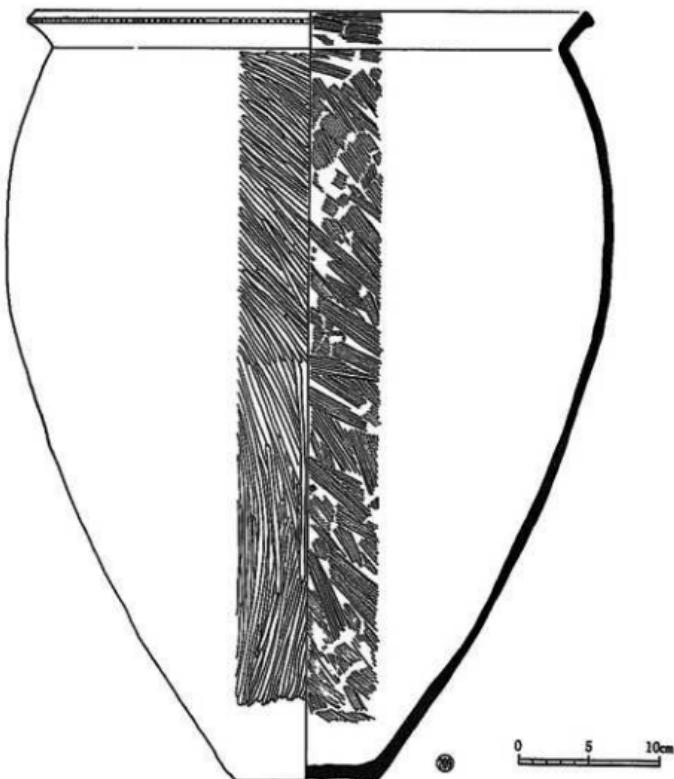


第79図 17号方形周溝基南西周溝出土遺物

もち、短く直立する頸部から斜め上方に外反する口縁部を有するタイプ(205)などもある。

(198)は、口縁部外面に1帯の簾状文と1列の刺突文、頸部から体部に5帯の簾状文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(199)は、体部下位に穿孔を穿ち、体部上半に5帯の直線文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は淡茶色を呈す。(200)は、口縁部外面に波状文1帯と円形付文、口縁部内面に扇形文、頸部に簾状文、体部に4帯の波状文とその間に3帯の直線文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で色調は淡褐色を呈す。(201)は、口縁部外面に1帯、体部に6帯の波状文を施す。施文前の刷毛調整も残る。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。(202)は、口縁部外面に円形付文、体部に5帯の波状文と1列の米粒状刺突文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。口縁外反部に紐孔を穿ち、色調は淡茶色を呈す。(204)は、体部に3帯の直線文と3帯の波状文を交互に施す。内外面共刷毛調整で色調は淡褐色を呈す。(205)は、外面刷毛調整とヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は淡褐色を呈す。

鉢形土器(203)は、屈曲し直立する体部からそのまま口縁部につづき、端部は段状口縁をなす。口縁部外面に、密の列点文を施し、外面ヘラミガキがみられる。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西



第80図 17号方形周溝墓南西周溝出土遺物

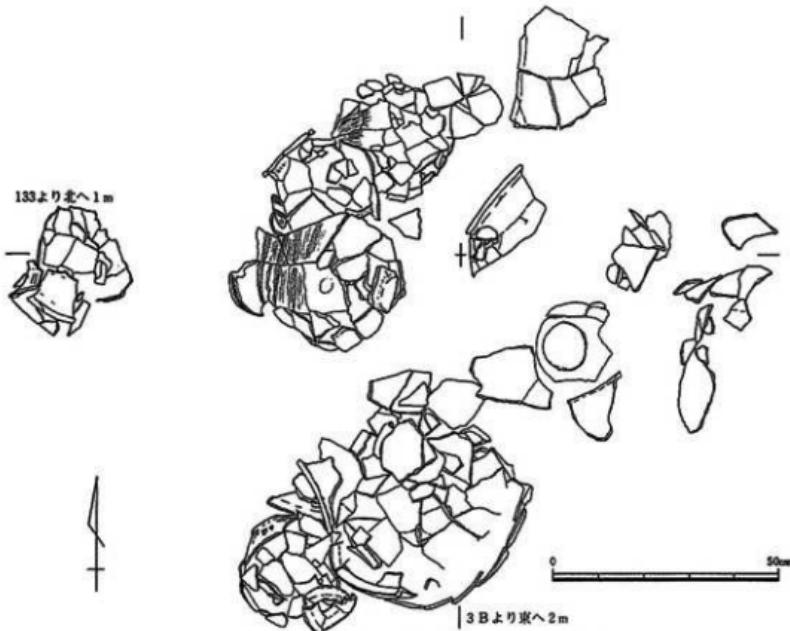
龍産の胎土をもつ。

高環形土器は、高環Bに属する(207)と高環Aに属する(208)がある。(207)は、口縁部内側に突帯をもち外端面が垂下する環部に筒状の脚部をもつ。屈曲してつづく裾部は、なだらかにひろがり端部が上方に肥厚する。環部下位に穿孔を穿つ。環部は内外面共ヘラミガキ、外面脚部から裾部がヘラミガキ、裾部内面へラ削りである。脚部内面にしばり痕が残る。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(208)は、楕形の環部に中実の脚部をもち、なだらかにひろがる裾部はそのまま終る端部につづく。環部上位に3条の回線文を施し、外面ヘラミガキである。裾部内面はへラ削りである。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

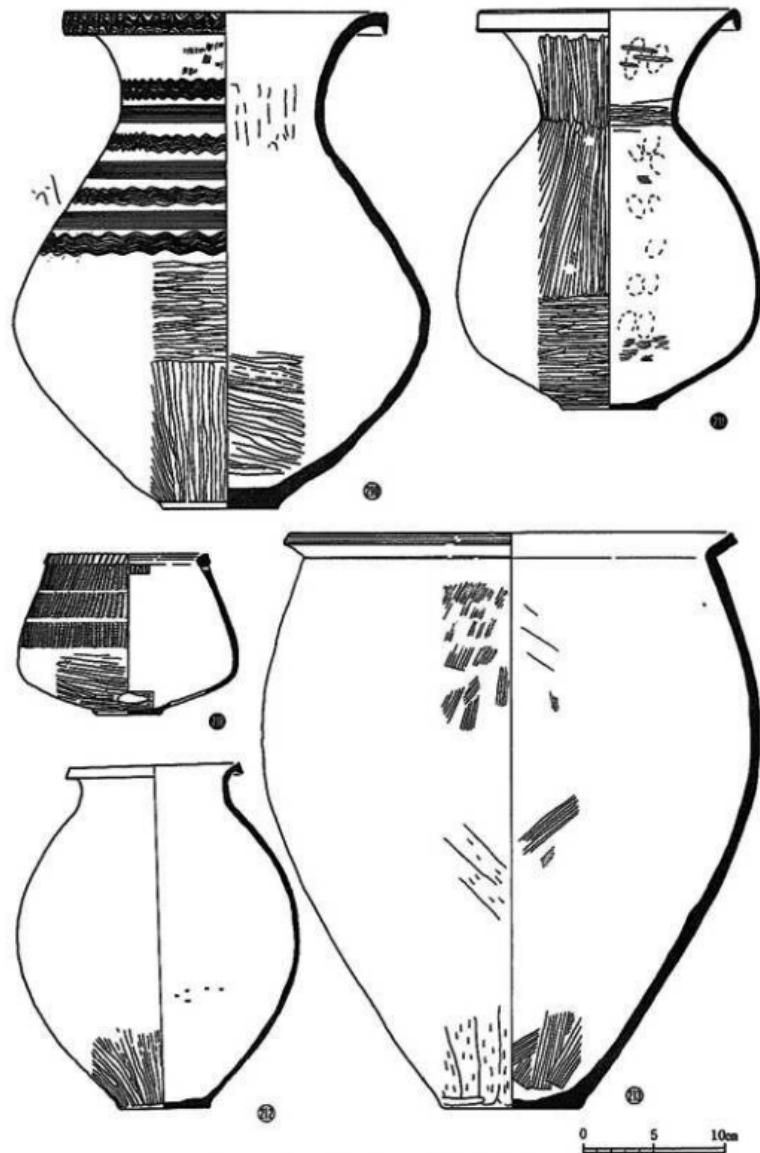
変形土器は、小型の(206)と大型の(209)がある。(206)は、卵形の体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部がそのままおわる。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。(209)は、体部上位に最大径をもち、屈曲して斜め上方に外反する口縁

部を有し、端部は下方に肥厚する。この端部に刻目文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈す。

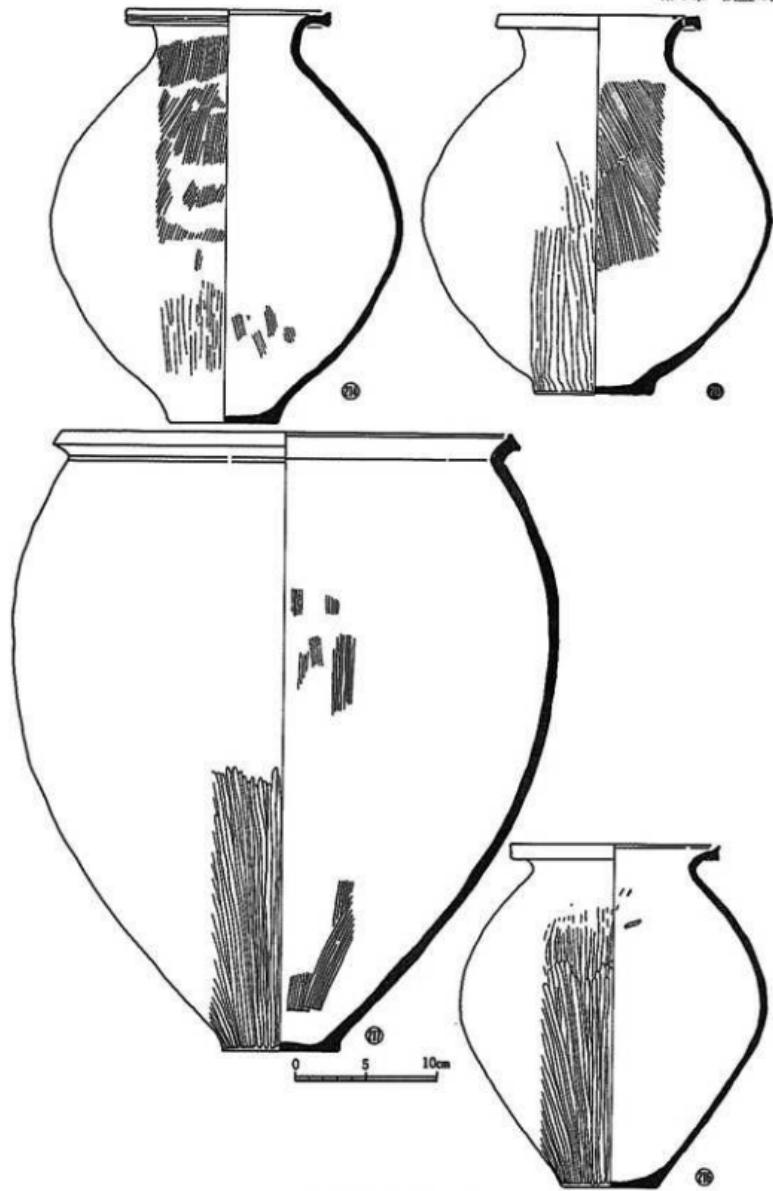
17号方形周溝墓北西周溝出土遺物 周溝南側と中央付近にまとまって出土した土器群である。この中でも、出土状態によって周溝北側の土器群同様29号方形周溝墓供獻土器としたものもある。出土量は、壺形土器が多い。施文しているのは(210)だけで、他は全て無文である。(210)は、中位に張りをもつ体部から漏斗状にひらく口頸部を有し、口縁端部が垂下する。口縁部外面に1帯の波状文、頸部から体部に4帯の波状文と3帯の直線文を交互に施す。外面ヘラミガキ内面刷毛調整で色調は淡茶色を呈す。(211)は、下位に張りをもつ体部から頸部が細くしまり、漏斗状にひらく口頸部から垂下する口縁端部を有す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で指頭圧痕が残る。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(212)は、中位よりやや上に張りをもつ体部から、屈曲して外反する口縁部を有し、端部が上方に肥厚する。外面ヘラミガキで、色調は淡褐色を呈す。(214)は、中位に張りをもつ体部から短く直立する頸部を有し、水平に外反する口縁部の端部が上方に肥厚する。口縁部外面に凹線文を施し、内外面共刷毛調整である。色調は淡茶色を呈す。(215)は、球状の体部から直立する頸部につづき、水平に外反する口縁部の端部がやや垂下する。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(216)は



第81図 17号方形周溝墓北西周溝遺物出土状況図



第82図 17号方形周溝基北西周溝出土遺物



第83図 17号方形周溝墓北西周溝出土遺物



第86図 17号方形周溝墓盛土下溝内出土遺物

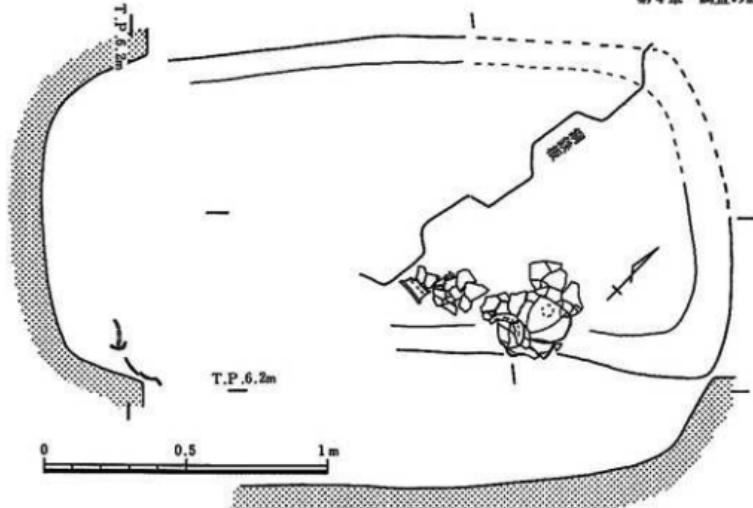
た。19号・23号方形周溝墓盛土下溝と同様に、ここでは問題提起としておきたい。

17号方形周溝墓盛土下溝出土遺物 壺形土器(225)は、中位に張りをもつ体部から外傾気味に直立する頭部を有し、そのまま水平に外反する口縁部につづく。端部は下方にやや肥厚し、下端に刻目文を施す。体部下面下位にヘラミガキ、中位に刷毛調整がみられる。内面調整は不明瞭で、色調は淡褐色を呈す。

壺形土器は、斜め上方に外反する口縁部の端部が、そのまま終わるもの(226)と、上下両方に肥厚するもの(227)がある。(226)は、体部下位に穿孔を穿ち、外面上半刷毛調整、下半ヘラ削り、内面ヘラ削りである。色調は淡茶色を呈す。(227)は体部下位やや上に穿孔を穿ち、外面上位刷毛調整、中位から下位がヘラ削り内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。

(30号方形周溝墓) 3B-135に位置する方形周溝墓で、墳丘北東斜面の一部を確認した。調査域外に在る為、規模は殆んど不明である。主軸はN-55°-Wの方位を示す。北東周溝は、17号方形周溝墓南西周溝と共有する。供獻土器は、斜面から破片が出土したが接合復元するに足るものではなかった。

(16号方形周溝墓) 3E~3G-134~136に位置する方形周溝墓である。トレチ部と拡張部Oトレチに墳丘の北西半分を確認した。短軸で墳丘上幅約5m、下幅約8m、溝底からの墳丘高約1mを測る。北西周溝は17号方形周溝墓と共有する。北東周溝は、古墳時代自然河川によって崩壊した方形周溝墓と共有する。主体部は、墳丘上北西寄りに一基確認したが、中心主体は別に埋置されていると考えられる。墳丘主軸はN-45°-Wの方位を示し、17号、29号方形周溝墓と縦列する。盛土は、上層が灰青綠色粘質シルトで下層が灰黒色粘質シルトと大きく分層が可能で、23号、19号、17号方形周溝墓の盛土下溝と同様の落ち込みがわずかに確認出来た。



第87図 16号方形周溝墓主体部平面図・断面図

供獻土器は、周溝北及び西隅と北東斜面に出土した。又、主体部墓域内に壺形土器も出土した。

16号方形周溝墓主体部 主体部は、トレンチ部と拡張部に鋼矢板をはさんで確認した。

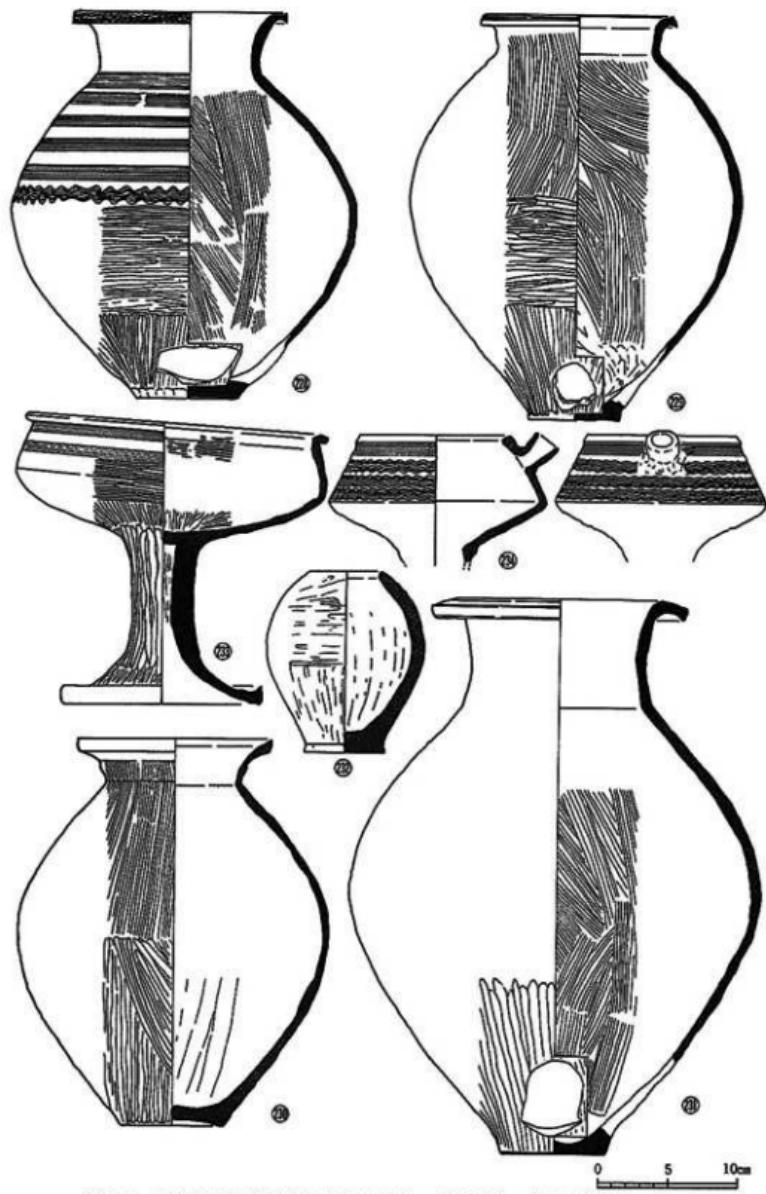
1.1m × 推定 2.3m、深さ 0.4m を測る墓域で、木棺は痕跡すら確認されなかった。主軸は墳丘短軸と平行に N-45°-E の方位を示す。墓域南東斜面に壺形土器(228)が出土した。

壺形土器(228)は、中位に張りをもつ体部から斜め上方に直立する頭部を有し、水平に外反する口縁部から端部が下方に肥厚する。体部下位に穿孔を穿ち、口縁部外面に1帯の波状文、体部に5帯の直線文と1帯の波状文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で色調は淡褐色を呈す。

16号方形周溝墓南西周溝・北東周溝・北東斜面出土遺物 南西周溝出土遺物は、墳丘裾部西隅に位置し(229、232～234)、北東周溝出土土器は、墳丘裾部北隅に位置する(235、236)の壺形土器で、北東斜面出土土器は(230、231)の壺形土器である。いずれも溝底や斜面直上に出土したものはない。

(229)は中位で球状に張る体部からやや外傾気味に直立する頭部を有し、水平に外反する口縁部の端部は上下両方に肥厚する。体部下位に穿孔を穿つ。体部外面上半が刷毛調整、下半がヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡褐色を呈す。(230)は、中位で球状に張る体部から屈曲して外反する頭部をもち、さらにやや外反する口縁部が上方に肥厚する。体部外面上半が刷毛調整下半がヘラミガキ、内面がヘラ削りとナデ調整である。色調は褐色を呈す。(231)は中位に張りをもつ体部から弧状に直立する頭部を有し、垂下する様に外反する口縁部の端部は上下にやや肥厚する。体部下位に穿孔を穿ち、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で色調は淡茶色を呈す。

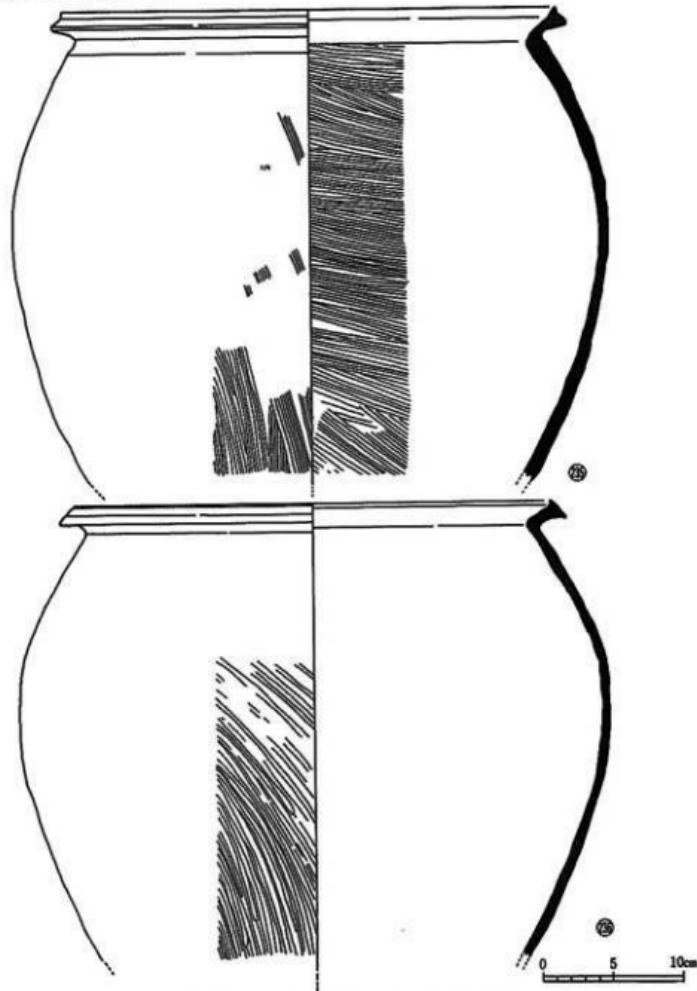
無頸壺形土器(232)は、肉厚で球状の体部が丸くおさまる口縁部にそのまま終わる。外面ヘラミ



第88図 16号方形周溝墓塚内出土遺物、南西周溝・北西周溝出土遺物

ガキ、内面指ナデ調整で、色調は淡褐色を呈す。

台付鉢型土器(233)は、鉢Bに属す。浅い器体が屈曲して直立し、短く外反する口縁部につづく、脚部は、筒状の柱状部からなだらかにひろがる裾部につづき端部が上方に肥厚する。体部外面に2帯の直線文を施し、外面は、体部から脚部までヘラミガキである。脚部内面にしづり痕が残る。色調は淡茶色を呈す。



第89図 16号方形周溝墓北西周溝出土遺物

台付注口土器(234)は、無頸壺形土器に注口を付したものである。脚部は欠損するが、接合方法は円板充填法である。するどく屈曲して張りをもつ体部が、内傾してそのまま段状口縁部につづく。体部に1帯の直線文と3帯の波状文を施す。調整は不明瞭で、色調は淡茶色を呈す。

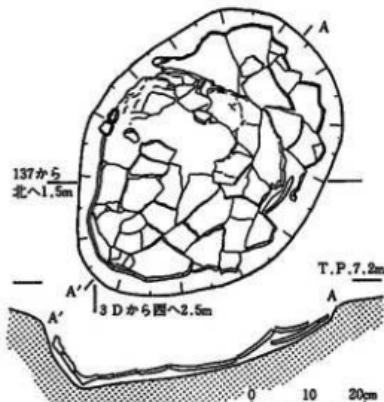
變形土器(235、236)は、球状の体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部が上下両方に肥厚する。(235)は、内外面を刷毛調整、(236)は、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は相方共、淡褐色を呈す。

(1号方形周溝墓) 3C~3E-136~138に位置する方形周溝墓である。墳丘上幅約6m×5m、下幅約9m×8m、墳丘高はベース面から約1mを測る。北東、南東に周溝を設けず、北西周溝は北隅で止めている様だ。南西周溝は2号方形周溝墓北東周溝と共有する。墳丘主軸は、N-30°-Wの方位を示す。埋葬施設は、土器棺が1基検出された。主体部については、遺構現状保存の為、盛土を掘削調査しないので不明である。供獻土器は極めて少なく、土製鉗錘車(243)が完型で出土した以外、接合復元出来るものはなかった。

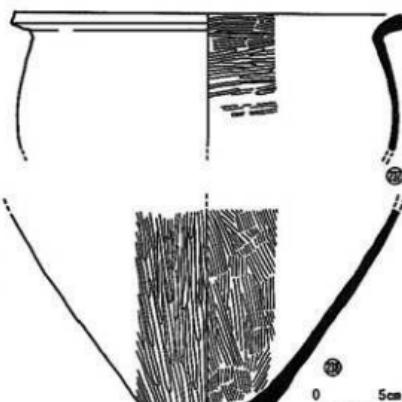
6号土器棺 墳丘上北隅やや西寄りに埋置されている土器棺で、變形土器(237、238)を合せ口にしている。破損が著しく、棺の底部が遺存したにすぎない。棺の主軸は、N-45°-Eの方位を示す。身になる變形土器(238)の口縁部を北東に向けて埋置している。棺内に入骨は検出されなかつた。

(237)は、体部下半を打ち欠いている。体部から屈曲して外反する口縁部は、下面がやや肥厚し端部はそのままおわる。外面調整は不明瞭で、内面口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキである。色調は淡茶色を呈する。(238)は、体部上半と口縁部が欠損する。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で色調は淡茶色を呈する。

1号方形周溝墓出土遺物 1号方形周溝墓から出土した土器は極めて少なく、小片がわずかに



第90図 1号方形周溝墓6号土器棺平面図・断面図



第91図 1号方形周溝墓6号土器棺



第92図 1号～4号方形周溝墓周辺全体図

付き鉢形土器などが出土した。出土した土器の残存状態は良好であるが、小片も含めた出土絶対量は少ない。又、周溝墓ベース面直上から出土したものはない。

3号方形周溝墓出土遺物

壺形土器(239)は、中位に張りをもつ体部から外反気味に直立する頸部を有し、水平に外反する口縁部につづく。端部は下方に肥厚する。口縁部外面に1帯の波状文、頸部下位から体部にかけて7帯の直線文と1帯の波状文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で淡茶色を呈す。

變形土器(240)は、小型で外反した口縁部がそのまま終わる。外面ヘラミガキ、内面刷毛原体によるかき上げ痕の後刷毛調整である。色調は暗茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(241)は、小型で把手と脚を附す。楕形の体部に直口の口縁部をもつ。脚部は、短い筒状の柱状部から「ハ」の字状にひろがる裾部をもち端部は丸くおさめる。口縁部外面に、刺突文と波状文の痕跡がわずかに残る。体部外面ヘラミガキで、脚部外面に指ナデ痕が残る。色調は淡茶色を呈す。

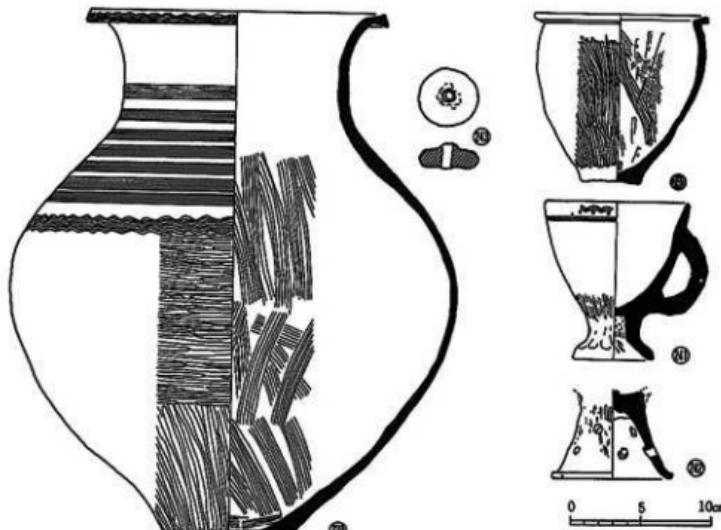
みられるにすぎない。但し、弥生時代前期土器片が、当方形周溝墓付近から出土し始める事を特記しておきたい。出土した土器片の中に完型の土製纺錘車(243)がある。色調は褐色を呈す。

〈2号方形周溝墓〉 3B～3C－138～139に位置する方形周溝墓で、墳丘東隅を確認した。墳丘の殆んどがトレンチ外に在る為、規模は不明である。周溝は、北東周溝が1号方形周溝墓と南東周溝が4号方形周溝墓とそれぞれ共有する。墳丘主軸は、N-30°-Wの方位を示し、1号方形周溝墓と平行、4号方形周溝墓と継列する。

供獻土器は少片をわずかに出土したにすぎない。

〈3号方形周溝墓〉 3E－139に位置する方形周溝墓で、墳丘西隅を確認した。墳丘高約1mを測る。墳丘幅は不明である。周溝は、北西に設けず南西は4号方形周溝墓と共有する。墳丘主軸は、N-35°-Wの方位を示す。

供獻土器は、墳丘裾部に壺形土器や把手



第93図 1号・3号方形周溝墓出土遺物

(242)は、鉢形土器の脚部である。「ハ」の字状にひろがる脚部は裾部でさらに短くひろがる。穿孔は、上下各5ヶ所に穿ち、色調は淡茶色を呈す。

〈4号方形周溝墓〉 3C～3E-139～141に位置する方形周溝墓である。規模は長軸約14m、短軸約9m、溝底からの墳丘高約1.4mを測る。墳丘上幅約9m×5m、下幅約13m×7mで平面プランが長方形を呈す。周溝は、約1～2mの幅で周囲に巡らされている。特に北東周溝は、3号方形周溝墓が接近する為、深い「V」字溝を呈する。墳丘西隅から南西迄中央部まで、古墳時代中期城山1号墳の周溝によって擾乱されている。墳丘主軸は、N-45°-Wの方位を示す。

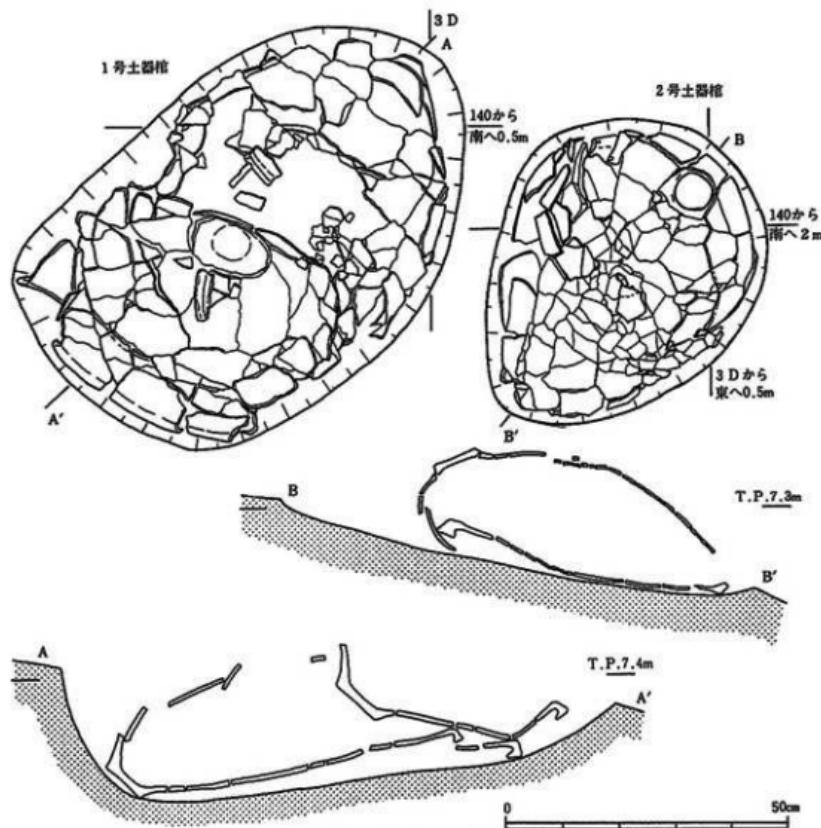
埋葬施設は、土器棺を2基検出した。遺構現状保存の為、盛土掘削調査は行っていないので、主体部については不明である。

供獻土器は少なく、北隅周溝内に(248～250)などが出土した。

1号土器棺 墳丘上ほぼ中央に埋置されている土器棺で、変形土器(245)を身に、鉢形土器(244)を蓋に使用している。鉢形土器の体部屈曲部で打ち欠いた一部を、身となる変形土器口縁部の下に設置し、残る鉢形土器は、底部を変形土器底部と同方向に置き、蓋としている。棺の主軸は、S-40°-Wの方位を示し、開口部を南西に向け埋置している。棺内に人骨は検出されなかった。

変形土器(245)は、上位に張りをもつ体部から外反する口縁部の端部が上下両方に肥厚する。口縁部外面に刺突文を施し、体部外面を丁寧にヘラミガキしている。内面は縦方向のヘラミガキの後、螺旋状のヘラミガキである。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(244)は、屈曲して内傾する体部から外反する口縁部を有し、端部が下方に肥厚する。



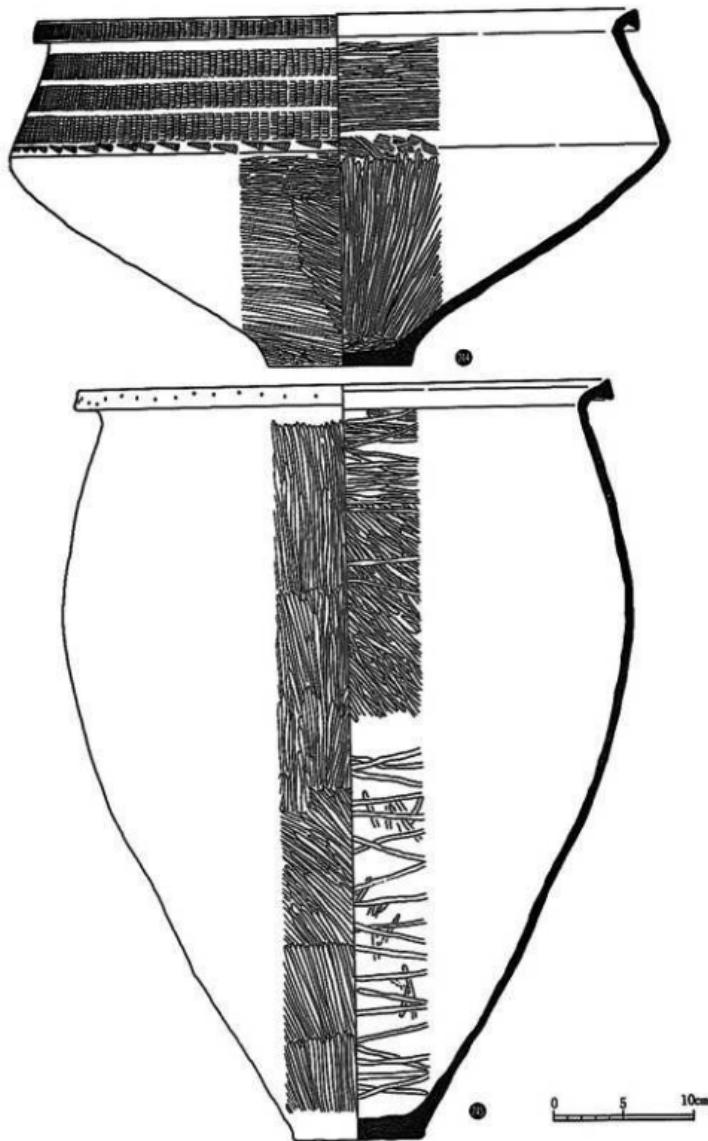
第94図 4号方形周満墓1号・2号土器棺平面図・断面図

口縁部外面に1帯、内傾する体部外面に3帯の簾状文、屈曲部に扇形文を施す。内外面共ヘラミガキで、内面屈曲部に刷毛調整が残る。茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

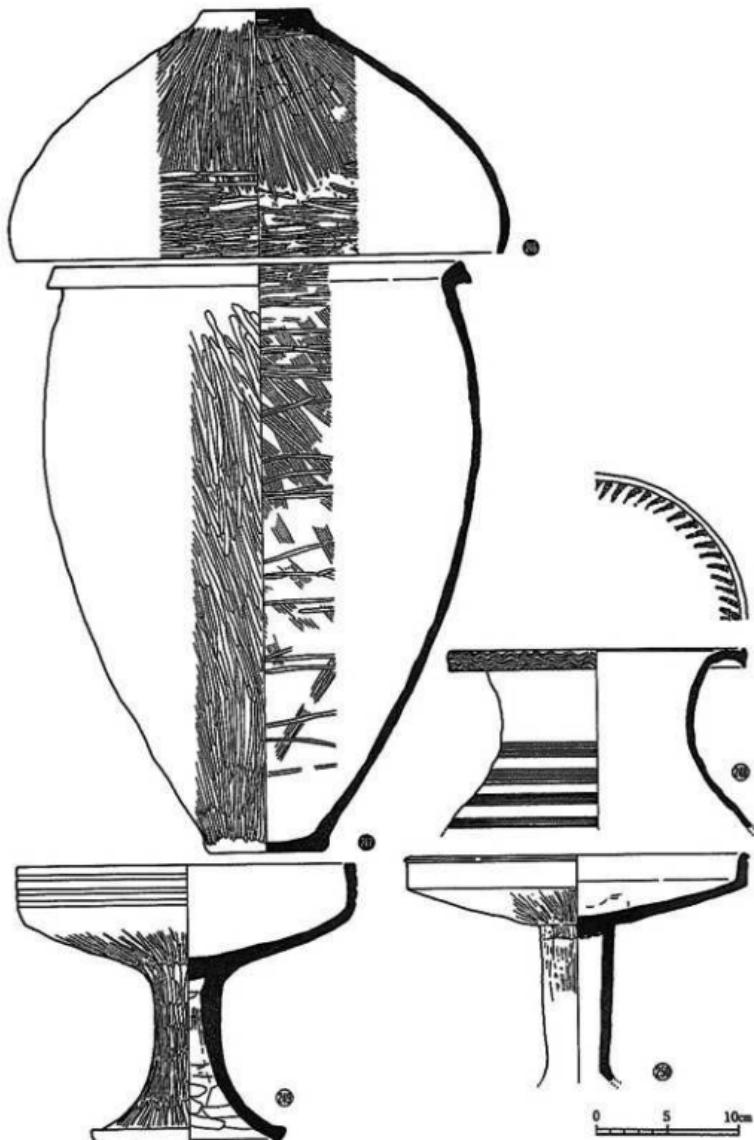
2号土器棺 墳丘上中心やや南西寄りに埋置されている土器棺で、1号土器棺の南に隣接する。變形土器(247)を身に、鉢形土器(246)を蓋に使用し、合わせ口にしている。棺の主軸は、N-40°—Eの方位を示し、身の開口部を北東に向て埋置している。棺内に人骨は検出されなかった。

變形土器(247)は、張りをもたない胴長の体部から外反する口縁部の端部が下方に肥厚する。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整の後螺施状のヘラミガキである。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(246)は、屈曲部や張りをもたない体部から内寄する口縁部につづき、端部を丸くおさ



第95图 4号方形周溝墓1号土器馆



第96図 4号方形周溝基2号土器館・周溝出土遺物

ラミガキで指頭圧痕が残る。内面はナデ調整である。淡茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土をもつ。有孔土製品(257)は、直な円形を呈す土製品で、つまみ部をもたない蓋形土器と考えられる。2孔1対の紐孔を穿ち、渦巻き状に疑似簾状文を施す。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

(258)は、自然縫の片側を敲打して紐掛けとする石錐である。平面円形、断面扁平な梢円形を呈す。

〈5号方形周溝墓〉 3B～3D—142～144に位置する方形周溝墓で、規模は約11m×10m溝底からの墳丘高1.1mを測る。墳丘上幅約6m×4.5m、下幅約9m×8mで、平面プランは正方形に近い長方形を呈す。墳丘主軸はほぼ真北の方位を示す。周溝は、南と西に設けるが北と東にはみられない。埋葬施設は、盛土を掘削調査したが確認できなかった。ベース面に不鮮明な色調の相違を認めたが確認するに至らなかった。供獻土器の出土量は少なかったが、盛土掘削中、縄文時代晚期土器片や多量の弥生時代前期土器片が出土した。盛土する際に混入した様な出土状態ではあるが、土器の残存状態は良好であった。付近に縄文時代晚期～弥生時代前期の遺構が存在した事を想像するに足る資料である。土器の詳細は、第3節に述べた通りである。

5号方形周溝墓出土遺物 (259)は、西周溝から出土した菱形土器で、球状に張りをもつ体部から外反する口縁部が上方に肥厚する。外面刷毛調整とヘラミガキ、内面刷毛調整とヘラ削りである。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土を含む。

(261)は、南斜面から出土した。上端部から「ハ」の字型に裾部につづき、端部が丸くおわる脚部である。調整は不明瞭で、色調は淡茶色を呈す。

(262)は北斜面から出土した菱形土器である。外縁気味に直立する頸部がそのまま水平に外反する口縁部につづく。頸部外面ヘラミガキで、色調は淡褐色を呈す。

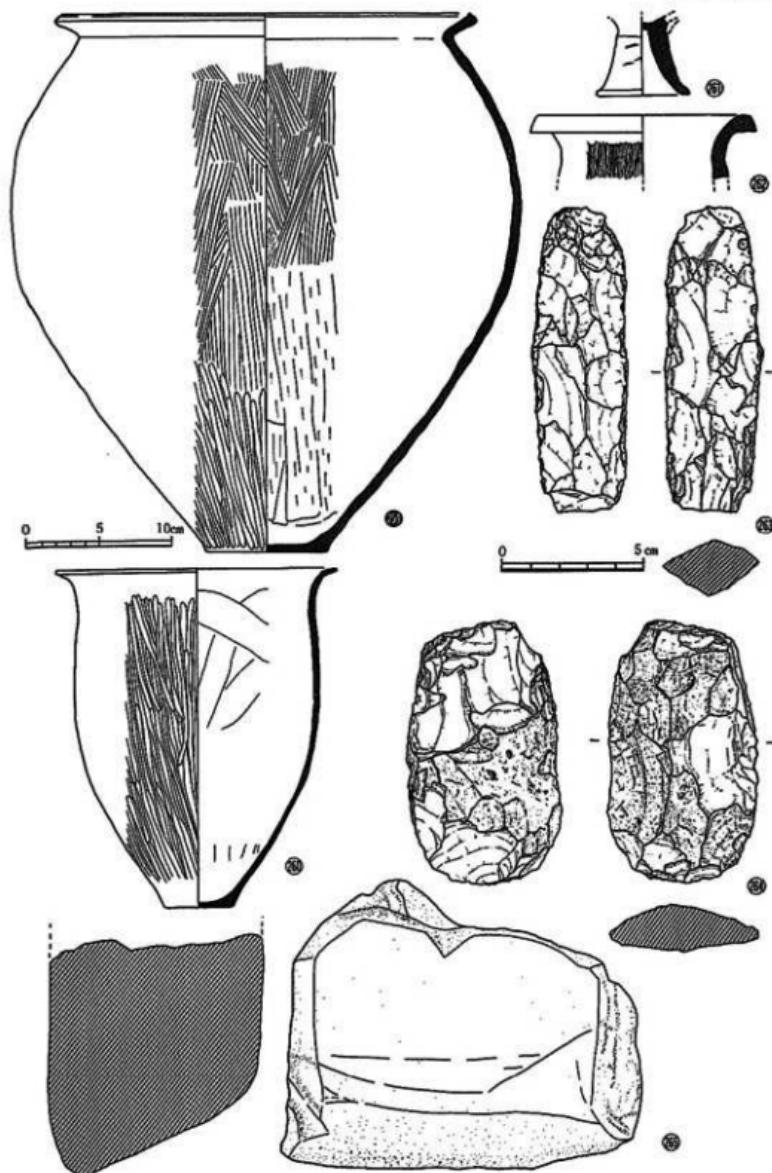
石槍(263)は、盛土内から出土した。先部を欠損する。細長く厚みのあるタイプで、全体に調整剝離を施す。両面に鋸が通り、断面菱形を呈す。

不定形石器(264)は、東斜面から出土した。平面隅丸長方形を呈し、両面に調整剝離を施す。A面に鋸が通り、B面に自然縫面を留める。

用途不明石器(265)は、南斜面から出土した。3面に平坦な面をもつ。

〈40号方形周溝墓〉 3C～3B—141～143に位置する方形周溝墓で、規模は約10m×7m溝底からの墳丘高0.8mを測る。墳丘上幅約5m×3m、下幅約8m×4mで、平面プランは長方形を呈す。墳丘主軸はほぼ真北の方位を示し、5号・6号方形周溝墓と平行する。東周溝は5号方形周溝墓と共有する。北に陸橋部を残し西周溝は深く掘削している。埋葬施設は、確認出来なかつた。出土した供獻土器は極めて少ない。

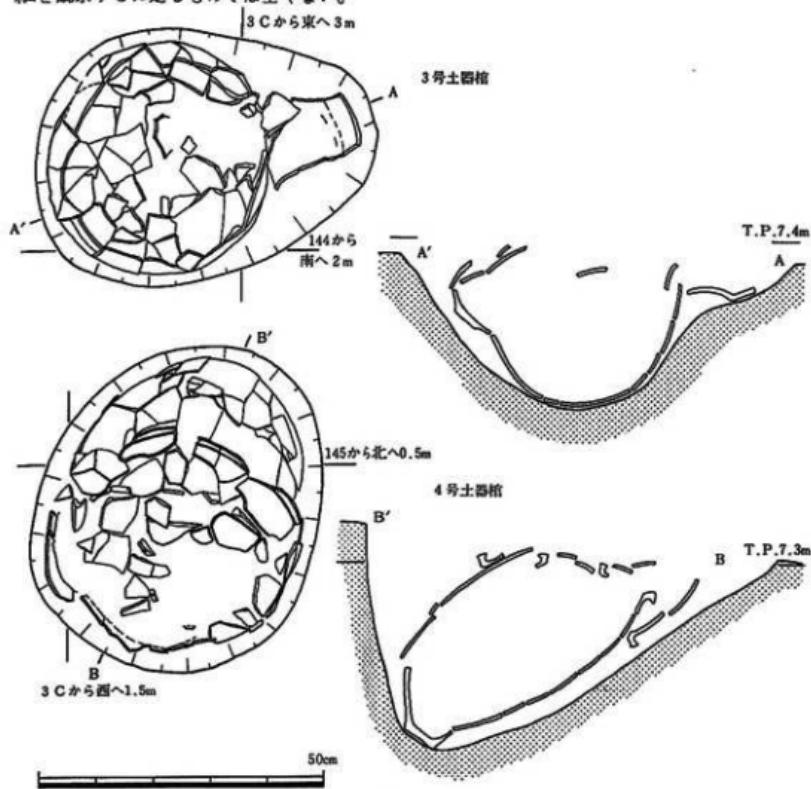
菱形土器(260)は、東周溝から出土した。胴部最大径が口縁部径を下回る。胴長のほぼ直立する体部から外反して丸くおわる口縁部をもつ。外面ヘラミガキ、内面ヘラ削りで、色調は淡茶褐色を呈す。



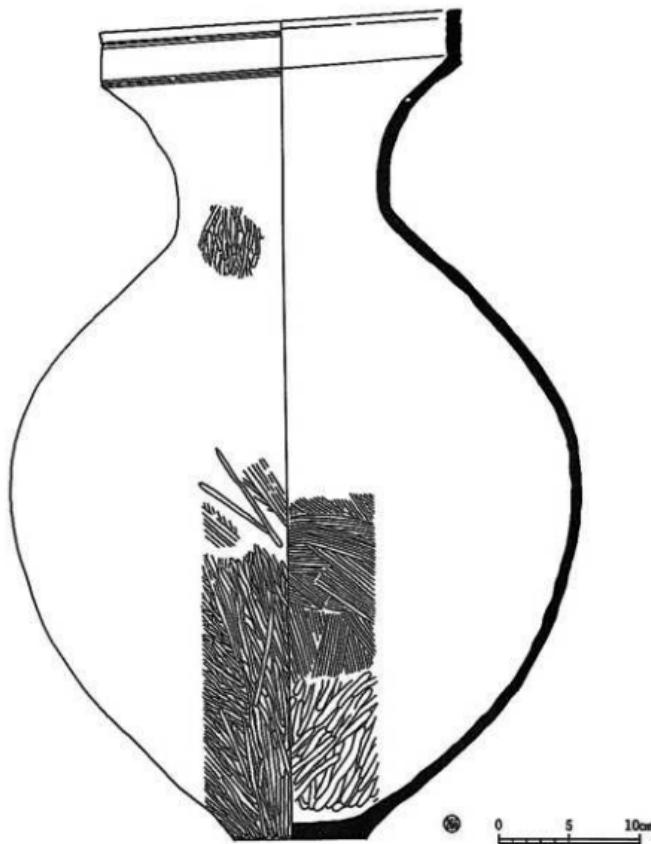
第101図 5号・40号方形周溝墓出土遺物

（7号方形周溝墓） 3 C～3 D—144～146に位置する方形周溝墓で、中央から西部分を確認する事が出来た。墳丘長軸は、ほぼ東西向で40号・5号・6号方形周溝墓と直行する方向に築造されている。規模は短軸約10m、墳丘高約1mを測る。墳丘短軸上幅約5m、下幅約8mで南北隅に陸橋部を残す。周溝は周囲の方形周溝墓と共有する。埋葬施設は、2基の土器棺を検出した。主体部については、遺構現状保存の為、盛土掘削調査を行わなかったので不明である。供獻土器は、付近の方形周溝墓と比較して各方向の周溝や斜面から多く出土したが、特に北周溝からの出土が多かった。

3号土器棺 墳丘上北東隅西寄りに埋置されていた土器棺で、臺形土器(266)を使用していた。特に他の土器を使用して蓋を設ける事はしていない。棺の主軸はN-70°-Eの方位を示し、臺口縁部を東北東に向けて埋置している。棺内に人骨の痕跡と思われる土色の違いを確認したが、詳細を観察するに足るものでは全くない。



第102図 7号方形周溝墓3号・4号土器棺平面図・断面図



第103図 7号方形周溝墓 3号土器棺

(266)は、球状の体部から外反する頸部をもち、屈曲して直立する受け口状口縁部を有する。口縁部に2条の凹線文を施し、外面ハラミガキ、内面刷毛調整である。内面底部にハラミガキもみられる。色調は淡褐色を呈する。

4号土器棺 墳丘南西隅やや北寄りに埋置されていた土器棺で、変形土器(268)を身に、鉢形土器(267)を身に使用している。棺の主軸はS-25°-Wの方位を示し、南南西に向け埋置している。棺内に入骨は検出されなかった。

変形土器(268)は、胴長の体部から斜め上方に外反する口縁部を有し、端部が下方に肥厚する。外面ハラミガキ、内面刷毛調整の後螺施状のハラミガキを施す。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器(267)は、丸味をもつ体部から屈曲して外反する口縁部につづき、端部が上方に肥厚する。外面刷毛調整の後ヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は淡茶色を呈す。

7号方形周溝墓出土遺物 確認した3方向の周溝及び斜面から出土した遺物で、方形周溝墓ベース面直上に出土したものはない。(269、273)が西周溝、(272、275)が北周溝、(270、274)が南西隅陸橋

部付近、(271)が南斜面からそれぞれ出土した。

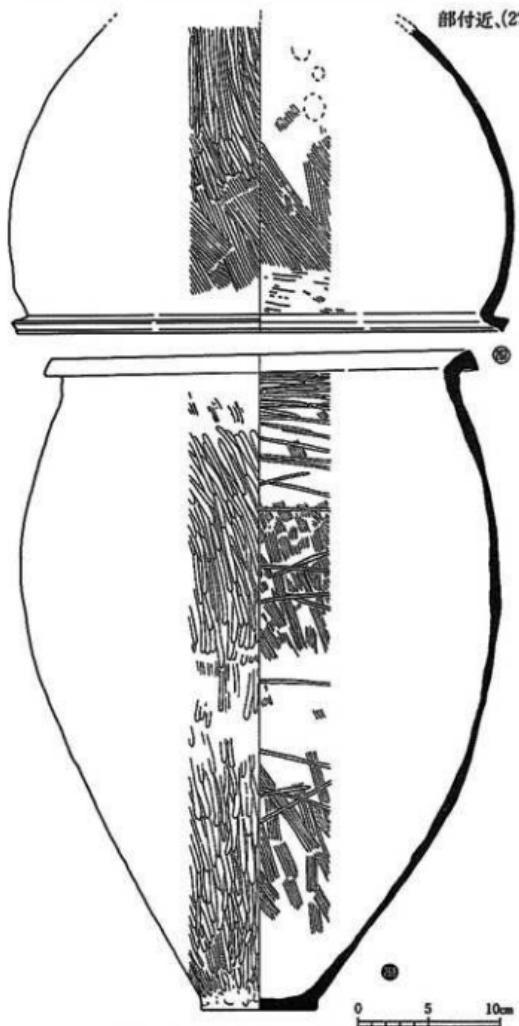
(269)は小型の壺形土器で、下位に張りをもつ体部が内傾し、そのまま外反する口縁部につづく。口縁端部は垂下する。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は暗灰茶色を呈す。

水差し形土器(270)は、下位に張りをもつ体部が内傾して細くしまる頸部につづき、外傾してそのままおわる口縁部をもつ。把手側の口縁部に抉りをもつ。

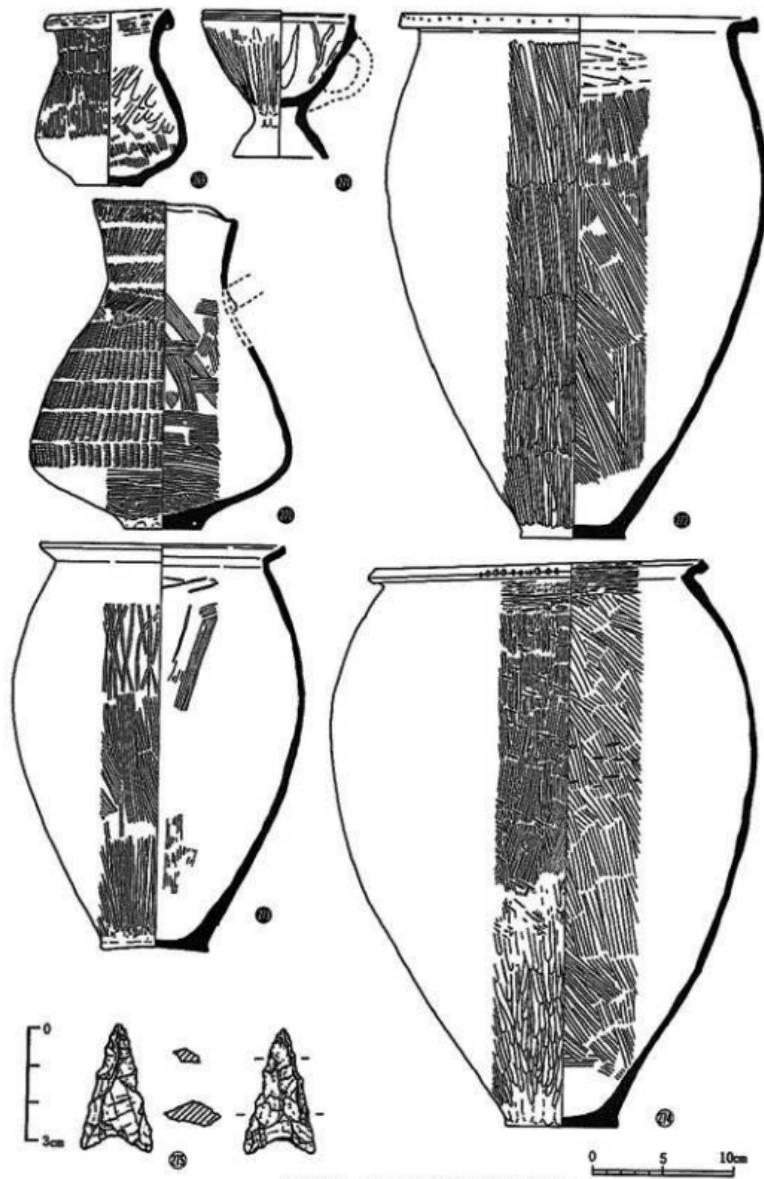
口縁部から頸部に5帯の点列文、体部に5帯の簾状文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は茶褐色を呈す。

鉢形土器(271)は、鉢Aに属し、把手と脚が付く。口縁部に回線文を施し、外面を丁寧にヘラミガキしている。色調は淡茶褐色を呈す。

壺形土器には胴長の体部から水平に外反して上方に肥厚するものの(272)、斜め上方に外反し上方にやや肥厚するもの(273)、屈曲して斜め上方に外反し、端部が上方に肥厚するもの(274)などがある。(272)は、口縁部外面に刺突文を施し、外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調



第104図 7号方形周溝墓4号土器館



第105図 7号方形周溝墓出土遺物

は茶褐色を呈す。(273)は、外面刷毛調整の後ヘラミガキ、内面刷毛調整で、色調は暗灰茶色を呈す。(274)は、口縁部外面下端に刻目文を施し、内外面刷毛調整、外面下位ヘラミガキである。色調は乳褐色を呈す。以上出土した土器は、(274)を除き、全て生駒西龍産の胎土をもつ。

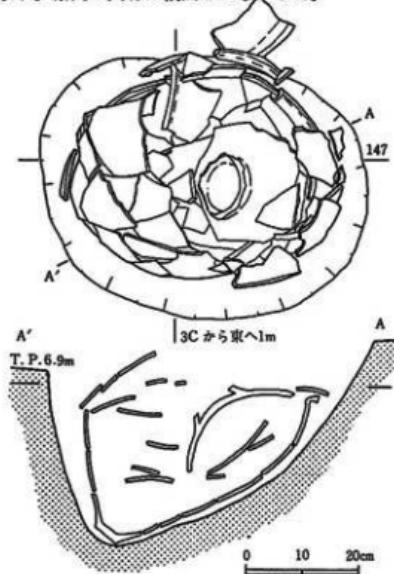
石鐵(275)は、四基無茎式で、全面に調整刺雕を施し、B面に鏽が通る。

〈9号方形周溝墓〉 3B-144~145に裾部東辺を確認した。墳丘の詳細については一切不明であるが、墳丘長軸は東西に位置し、7号方形周溝墓と継列する様である。埋葬施設、供獻土器共に不明である。

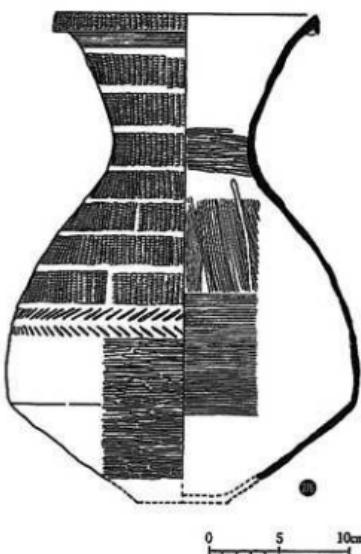
〈10号方形周溝墓〉 3B-145~146に、裾部東隅を確認した。墳丘の殆んどが、トレンチ外に位置する為に、墳丘規模、埋葬施設、供獻土器など詳細は一切不明である。裾部の形状から墳丘主軸は、N-48°-Eの方位を示すと考えられる。

〈8号方形周溝墓〉 3B~3D-146~148に位置する方形周溝墓で、古墳時代中期城山2号墳によって墳丘の中央部が大きく攢乱されている。墳丘の平面プランはほぼ正方形を呈し、上幅1辺約8m、下幅1辺約9mを測る。墳丘主軸はN-45°-Eの方位を示すと考えられる。埋葬施設は土器棺を1基検出した。供獻土器は、北隅に壺形土器(276)が出土した。

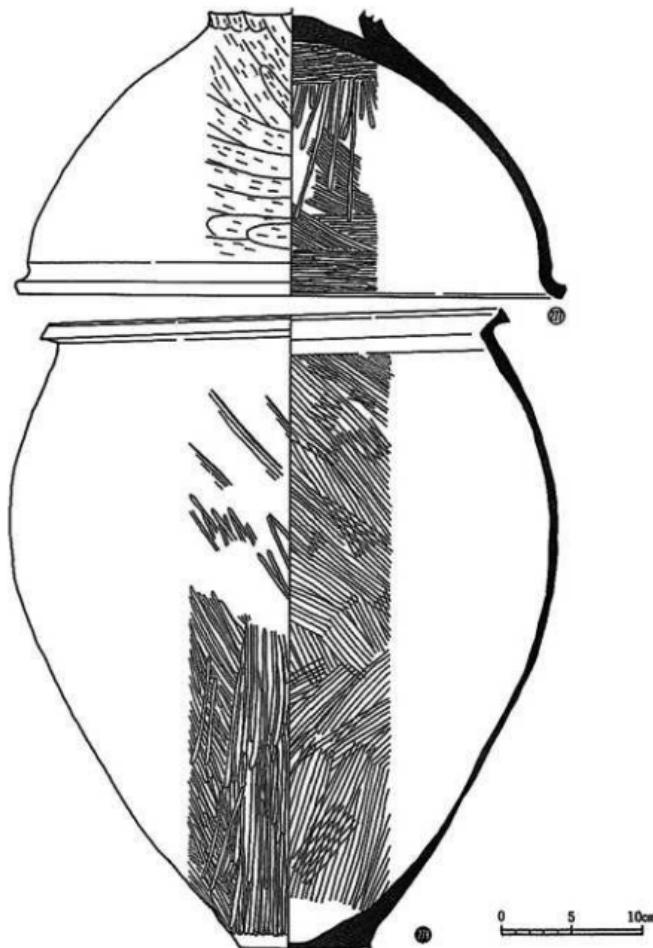
5号土器棺 墳丘上ほぼ中央に位置する土器棺で、古墳時代中期城山2号墳検出中に確認した。壺形土器(278)を身に、台付き鉢形土器(277)を蓋に使用している。棺の主軸はN-70°-Eの方位を示す。棺内に入骨は検出されなかった。



第106図 8号方形周溝墓5号土器棺
平面図・断面図



第107図 8号方形周溝墓周溝出土遺物



第108図 8号方形周溝墓 5号土器棺

菱形土器(278)は、上位に張りをもつ胴長の体部から屈曲して外反する口縁部の端部が上下両方に肥厚する。外面上位刷毛調整、中位から下位へラミガキ、内面刷毛調整である。色調は暗茶灰色を呈し、生駒西麓産の胎土を含む。

台付き鉢型土器(277)は、楕形の体部からそのまま外反する口縁部につづく。外面ヘラ削り、内面刷毛調整の後へラミガキである。色調は淡茶色を呈し、内面に赤色顔料を塗布する。

壺形土器(276)は、下位に張りをもつ体部が細くしまる頸部につづき漏斗状にひろがる口頭部か

ら垂下する端部をもつ。口縁部外面に1帯の簾状文、口頸部から体部にかけて1帯の直線文、7帯の簾状文、2帯の列点文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土を含む。

〈42号方形周溝墓〉 3E-150に、方形周溝墓の北西隅を確認した。墳丘規模、埋葬施設等殆んで不明であるが、確認した北西隅の周溝内に壺形土器(282)が出土した。

(282)は、下位に張りをもち直立した後内傾する体部がそのまま直立する頭部につづき、短く外反する口縁部を有する。外面頸部刷毛調整、体部ヘラミガキ、内面刷毛調整後螺旋状ヘラミガキである。色調は赤茶褐色を呈す。

〈41号方形周溝墓〉 3D-149~150に周溝の一部を確認した。墳丘は、古墳時代中期城山2号墳周溝によって擾乱されている。規模、埋葬施設等殆んど不明である。確認した周溝から推定される墳丘主軸はN-45°-Eの方位を示す。

〈11号方形周溝墓〉 3B~3C-148~149に位置する方形周溝墓であるが、これも古墳時代中期城山2号墳周溝によって擾乱されている。規模は墳丘上幅約7m×5.5m、下幅約8.5m×6.5mを測る。周溝は各方向に浅く巡る様で、北隅には陸橋部を残す。墳丘主軸は、N-45°-Wの方位を示す。供獻土器は、12号方形周溝墓と共有する南西周溝から出土している為、12号方形周溝墓北東周溝出土土器に一括した。

〈12号方形周溝墓〉 2T~3C-149~151に位置する方形周溝墓で、北西・北東部を確認した。墳丘中央に弥生時代後期の溝が南東↔北西に走り擾乱されている。墳丘規模、埋葬施設等は、墳丘半分以上がトレンチ外に位置する為不明である。主軸はN-45°-Wの方位を示すと考えられる。周溝は、37号・11号方形周溝墓と共有するが、特に11号方形周溝墓と共有する北東周溝に、壺形土器(279、280)が出土した。(279)は、東隅の斜面から出土し、12号方形周溝墓の供獻土器と特定出来るが、(280)は、北隅東寄りの周溝中央から出土している為、11号・12号のいずれの方形周溝墓に供獻されたものか確定出来なかった。いずれにしろ、付近から出土する遺物はその殆んどがⅡ様式に比定される為、当方形周溝群がⅡ様式から築造され始め、11号・12号方形周溝墓が最古であるとした。

(279)は、球状の体部から外彎しながら口縁部につづく長い頭部を有す。口縁端部は下方に肥厚する。口縁部外面下端に刻目、頭部に8帯の直線文を施す。外面ヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(280)は、完形で出土した。器体の形態は(279)とほぼ同じで、頭部がやや細い。口縁部外面に1帯の波状文、頭部から体部上端にかけて7帯の直線文と1帯の波状文を施す。又体部中位に「十」字状のヘラ記号を施す。外面ヘラミガキ調整で、色調は乳茶色を呈す。

〈36号方形周溝墓〉 2T~3B-147~149に位置する方形周溝墓で、拡張部1トレンチに南隅と周溝を確認した。墳丘は、弥生時代後期、溝によって一部擾乱されている。墳丘規模、埋葬施設共に不明である。墳丘主軸はN-45°-Wの方位を示し、11号・12号方形周溝墓と継列する。



第109図 42号・12号・36号方形周溝墓出土遺物
周溝から出土した土器の中に壺形土器体部片(281)があつた。球状の体部がそのまま頭部につづくもので、3帯の直線文と、扇形文が施され、調整はヘラミガキである。色調は茶褐色を呈す。

〈37号方形周溝墓〉 2 T—148～149に位置する方形周溝墓で、拡張部トレンチに周溝墓東隅を確認した。墳丘の殆んどがトレンチ外に位置する為、墳丘規模、埋葬施設等詳細は不明である。周溝は、12号、36号方形周溝墓と共有する。墳丘主軸はN—45°—Wの方位を示し、周囲の周溝墓と平行又は継列する。供獻土器の出土量は少ない。

〈13号方形周溝墓〉 3 A～3 B—156～158に位置する方形周溝墓で、Bトレンチに確認した。全容を明らかにする事は出来なかったが、墳丘高約1mを測り、墳丘主軸N—18°—Eの方位を示す。約0.2mの深さをもつ周溝は、北西隅から北西方向に向って伸びる。盛土の掘削調査は、造構現状保存の為行っていない。従って埋葬施設については不明である。供獻土器は少なく、むしろ石器の出土が目立った。

13号方形周溝墓出土遺物 供獻土器と考えられるものは壺形土器底部(283)で、變形土器(285)は周溝横土塁から、壺形土器(284)と變形土器(286)は、拡張部トレンチの周溝墓ベース層相当層上面からそれぞれ出土したものである。石器は全て13号方形周溝墓検出時に出土したものである。

(283)は、壺形土器の底部で、外面ヘラミガキ、色調は褐色を呈す。

(284)は、中位に張りをもつ体部から直立する頸部につづく。頸部に2帯の簾状文、体部上半に2帯の斜格子文と2帯の直線文を施す。外面ヘラミガキ、内面刷毛調整で、褐色を呈す。

(285)は、楕円形を呈す体部から屈曲して外反する口縁部を有し、端部が上下にやや肥厚する。外面刷毛調整の後、体部下半をヘラミガキ、内面刷毛調整である。色調は淡茶色を呈す。

(286)は、胴長の体部から頸部で丸く外反し口縁部につづき、端部が丸くおわる。外面刷毛調整 内面ヘラ削りで、色調は淡茶色を呈す。

(287)は、直線刃で三角形状の形態をもつ大型石包丁である。刃は両刃であるが、稜線は不明瞭である。肩部はほぼ直線的で、背部は尖る。背部に縦孔を一ヶ所に穿つ。

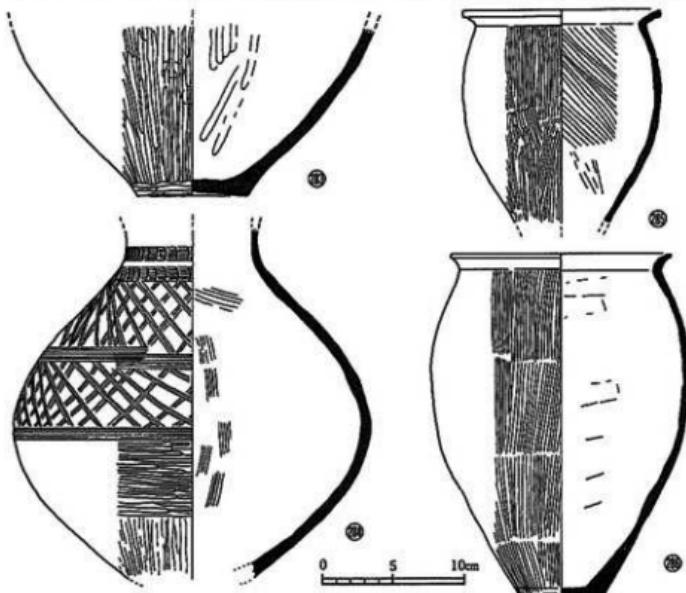
(288)は尖頭器状の不完形石器である。両面に大剝離面を留めるものの調整剝離も一部に施す。

(289)は平面長方形、断面正方形を呈す砥石で、A面の中央長軸方向に溝をもつ。溝の断面は、丸味を帯びた三角形で、片端に向って除々に浅くなり終わる。B面にも研磨痕がみられる。

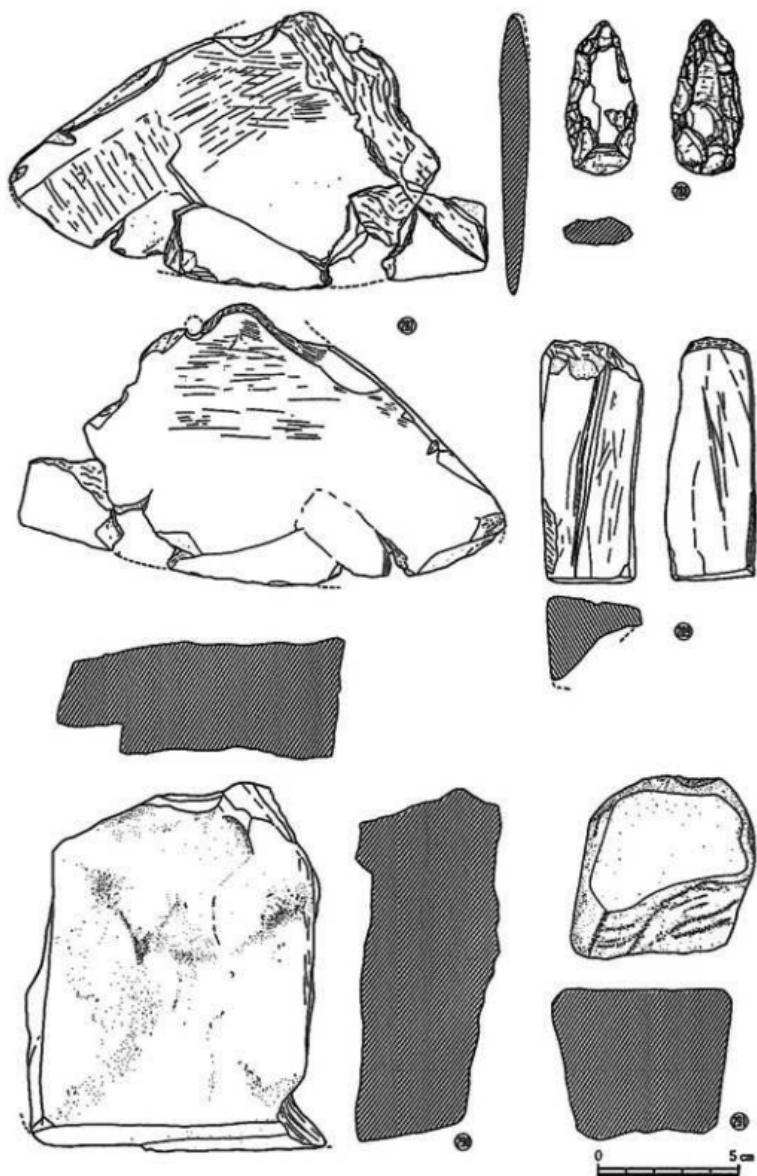
(290)は、板状の不明石器である。加工により面をなしているが、割れた後に焼成痕がみられる。

(291)は、加工により面をなす不明石器である。

〈14号方形周溝墓〉 2S～2T-167～170に位置する方形周溝墓で、cトレンチ中央に確認した。規模は約13m×8m、墳丘高約0.6mを測る。幅約1m、深さ約0.2mの周溝がめぐる。墳丘主軸はN-10°-Eの方位を示す。埋葬施設は検出されなかった。供獻土器は壺形土器(292～



第110図 13号方形周溝墓出土遺物

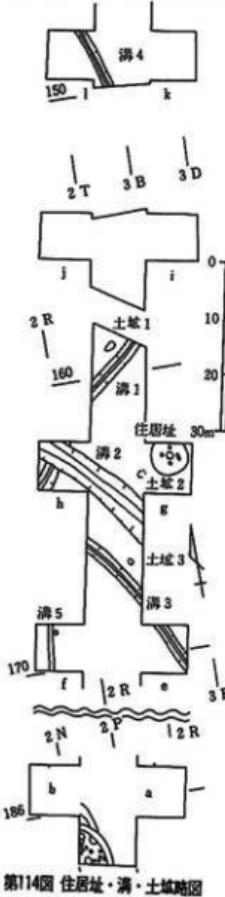


第111図 13号方形周溝墓付近出土遺物

第2項 弥生時代中期 穫穴住居址、溝、土塁

前項であげた方形周溝墓のほかに、弥生時代中期に属する造構としては、緑青色粘土上面で竪穴住居址、溝、土塁などを検出した。これらの造構は主として方形周溝墓群の南に隣接するように検出された。以下個々の造構について概説する。

《竪穴住居址》 Cトレンチの切り抜き部であるc-gトレンチの3A~3B、162~163の地区で検出した円形の平面プランを有する竪穴住居址である。平面プランのうちの約5分の4を検出したが、北端部は調査区外にのびており確認できなかった。直径約6.1mのほぼ円形で、床面積は推定で29m²程のものと思われる。壁高は検出面で約20cmを測ったが、トレンチ北壁断面の観察の結果、約30cmを有するものと判明した。構築時の床面はわずかに西に傾斜しているが、約10cmの厚

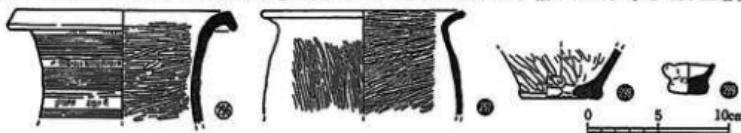


さで灰褐色粘土を貼った、いわゆる貼り床を施しており、居住面はほぼ水平を呈している。検出した平面プランでは周縁よりやや内側に幅約30cm、深さ約10cmの溝を巡らしているが、床面に粘土を貼った際にその粘土で埋まっている。したがってこの溝は竪穴住居を構築する際の排水溝であり、完成時には埋められてしまうものと思われる。生活面に伴った排水溝（壁溝）は認められなかった。平面プランの中央には、長径1.1m、短径1mの炉跡とみられる土塼があり、その床面には炭や炭化物が堆積していた。又、土塼の壁も焼土化しており、さらに埋土にも炭化物や灰が多く含まれていた。土塼の深さは約25cmを測った。炉跡を中心にしてほぼ対角的位置にピットが4ヶ所検出された。これらは径30cm~40cmの円形を呈し、深さはいずれも約50cm内外であり、竪穴住居の主柱穴であると思われる。又東柱穴の外側にもピットが1ヶ所検出された。これは径約40cmの円形で、深さ約30cmを測った。ほかのピットに比べるとやや浅い。住居址内及びその周辺からは、弥生時代中期中葉の土器、石器などが検出された。住居址内の埋土は、床面からほぼ住居址が埋まり切る直前まで堆積した暗灰色粘土と灰黒色粘土の混合層、そしてその上層の、竪穴住居を覆いつつトレンチ全体に堆積する暗灰色粘土の2層に分けられる。遺物は暗灰色粘土と灰黒色粘土の混合層から出土しており、したがって、竪穴住居址の時期は出土土器の時期と考えて良いと思われる。弥生時代中期中葉に属するものと考える。

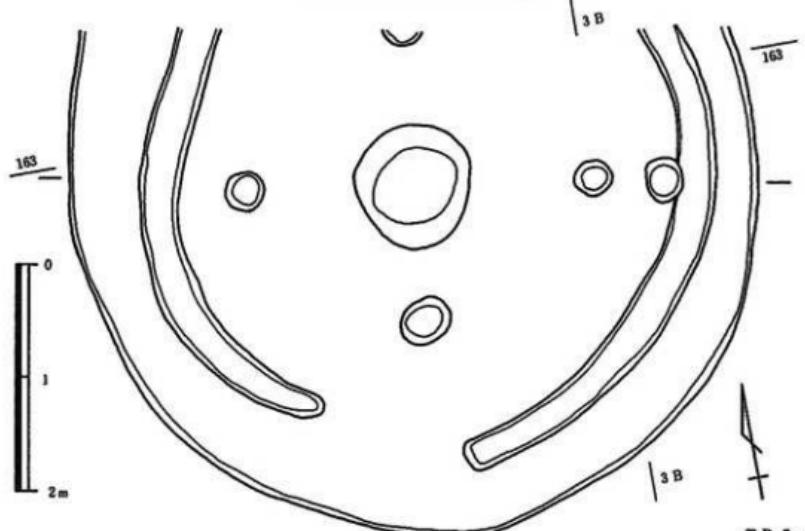
出土遺物（296~299、300~304、305、306~307）（296）は広口壺の口縁部及び頸部の破片である。頸部外面に直線文を3帯配している。内面に密なヘラミガキを施している。（297）は甕の口縁部及び体部上半の破片で、口縁部は短く外反し、口縁端部は

第114図 住居址・溝・土塼跡図

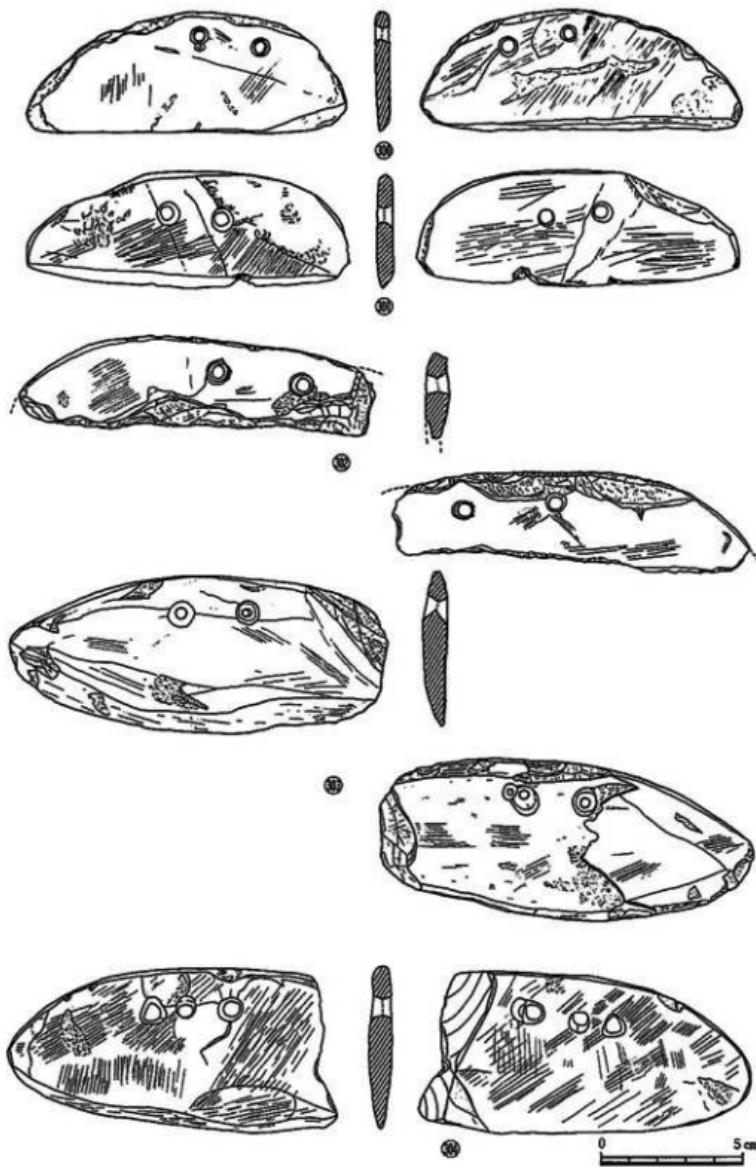
丸く収めている。体部は少し丸味を持つが、張りは少ない。口径と体部最大径がほぼ同じ数値を示す。内外面ともヘラミガキを施す。(298)は壺の底部であるが、焼成後の穿孔が見られ、瓶として使用されたものと思われる。(297, 298)は同一個体の可能性がある。(299)はミニチュア土器である。手づくねで外面に指の圧痕が強く残る。(300~307)は石器で、そのうち(300~304)は石包丁である。直線半月形態を呈するもの(300~302)と、杏仁形態を呈するもの(303, 304)がある。刃の部分を破損している(303)を除いて、すべて片刃である。原形をほぼ留めているのは(300, 301)の2個体のみで、各々長さ11.2cm、11.3cm、幅4.2cm、4cm、厚さ0.5cm・0.6cmを測った。他は破損が著しく計測できなかった。紐孔は(304)3ヶ所、その他には2ヶ所、いずれも体部の背寄りの部分にみられた。紐孔間の距離は1.8cm~3cmを測った。石の材質はいずれも緑色片岩である。(305)は磨製大型石包丁である。いわゆる外弯刃の形態を呈しており、長さ22.5cm、幅11.5cm、厚さ0.8cmを測



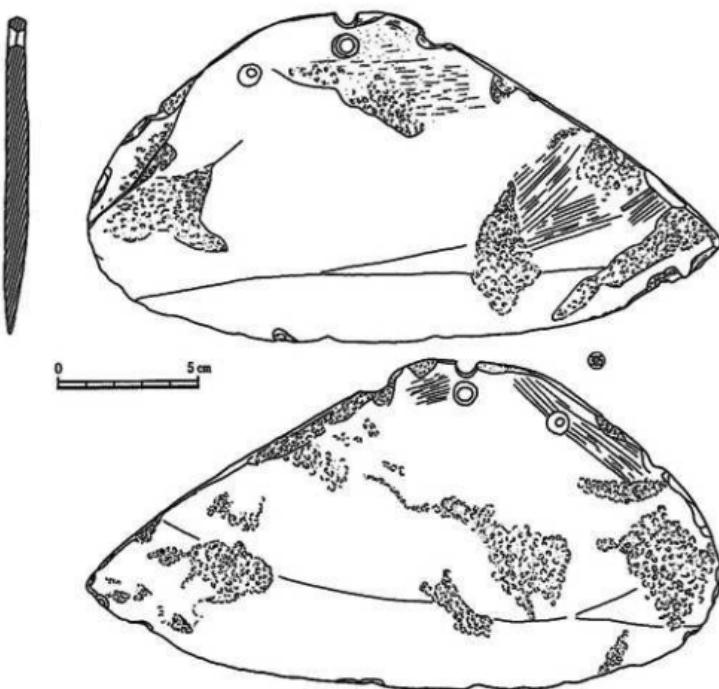
第115図 穂穴住居址出土遺物



第116図 穂穴住居址平面図・断面図



第117 穹穴住居址付近出土遺物

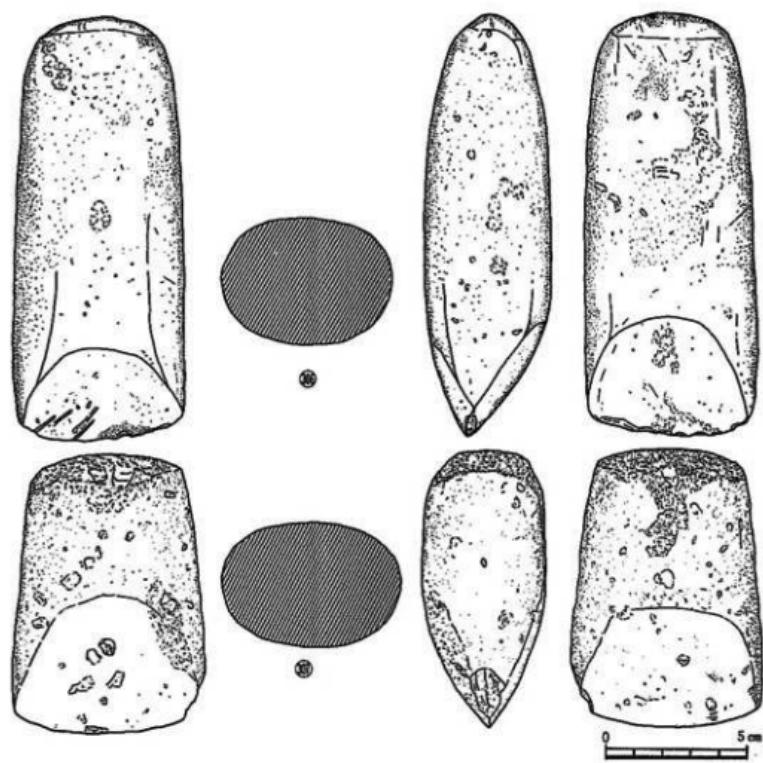


第118図 穂穴住居址付近出土遺物

った。刃先は両刃で、刃こぼれが数ヶ所に認められるものの残存状況は良好である。体部中央附近に縦孔が1ヶ所みられ、これが通常の紐孔の位置であるが、この他に約3.5cm離れた地点にもう1ヶ所円孔がみられる。石の材質は緑色片岩である。(306, 307)は磨製石斧で、大型蛤刃石斧である。(306)は長さ15cm、幅6cm、厚さ4.5cm、(307)は長さ9.8cm、幅6.6cm、厚さ4.3cmを測った。いずれも刃部の極く一部に刃こぼれが見られる程度で、全体的に遺存状態は良好である。刃部は鋭く研磨されている。(306)は基部と刃部の幅がほぼ等しく、厚味は基部に比べて刃部のほうが厚い。刃面は両面ともに見られるが、一面が他面より長い。(307)は基部に比べて刃部が広い形態を呈しており、側面は同一の厚味を持つ。

石器類は穂穴住居址内部からの出土ではなく、すぐ西側の周辺部からの出土である。

〈溝1〉 Cトレンチの北端部の、2S~2T、158~160の地区で検出された。トレンチの北端から西壁に向って斜めに走る溝である。幅2.2m、深さ0.9cmを測った。断面はV字形に近い逆台形状を呈しており、溝内の埋土は3層に分けられる。トレンチ北端部付近では、両側の肩を城山3号墳と城山4号墳の周溝によって切られている。溝内より土器、石器等が多数検出された。弥



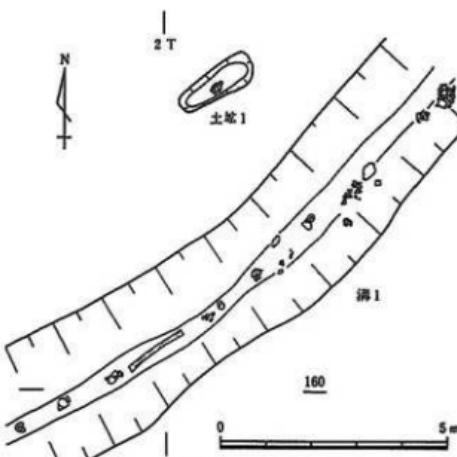
第119図 穂穴住居址付近出土遺物

生時代中期後葉に属するものである。

出土遺物(308~316, 317~320, 323, 324, 325~329) (308~310)は広口壺の口縁部である。口縁端部が下方に屈曲するもの(309)と、口縁端部が上下に少し肥厚するもの(308, 310)がある。(308)は口縁端部外面下端に刻目文、頸部外面に直線文、(309)は口縁端部外面、頸部外面に簾状文、(310)は口縁端部外面に斜格子文を配する。

(311~313)は受け口状口縁を有する壺である。(311)は頸部からゆるやかに外反して口縁部に至り、口縁端部は受け口状に内傾するが、端部下端が下方に肥厚する形状を呈するもので、(312, 313)は頸部が外反しつつ口縁部に至り、口縁端部が内傾して終るもので、端部上端に平らな面をもつ。(313)は丸味を持ち大きく張る体部で、体部の最大径は中位よりやや下方にある。(311)は口縁端部外面に2帯の簾状文、頸部外面に直線文を3帯配する。(312)は口縁端部外面の上端と下端に各々刻目文を配する。(313)は無文である。(314)は短頸壺で、胴張り丈高の体部から頸部が「くの字」状に外反し、直立気味に外上方へ立ち上る。端部は丸く收めている。体部上半に直線文を6帯配

している。(315)は壺で、胴張り丈高の体部から頸部がゆるやかに外反しつつ立ち上る。頸部外面



第120図 溝1・土塙1遺物出土状況

から体部上半にかけて8帯の直線文を配し、その下に1帯の波状文を配する。頸部外面に一部分赤色顔料が付着している。

(316)は高杯で、杯部の口縁部を欠損している。(317)は大型の鉢で、口縁部は短く外反する。

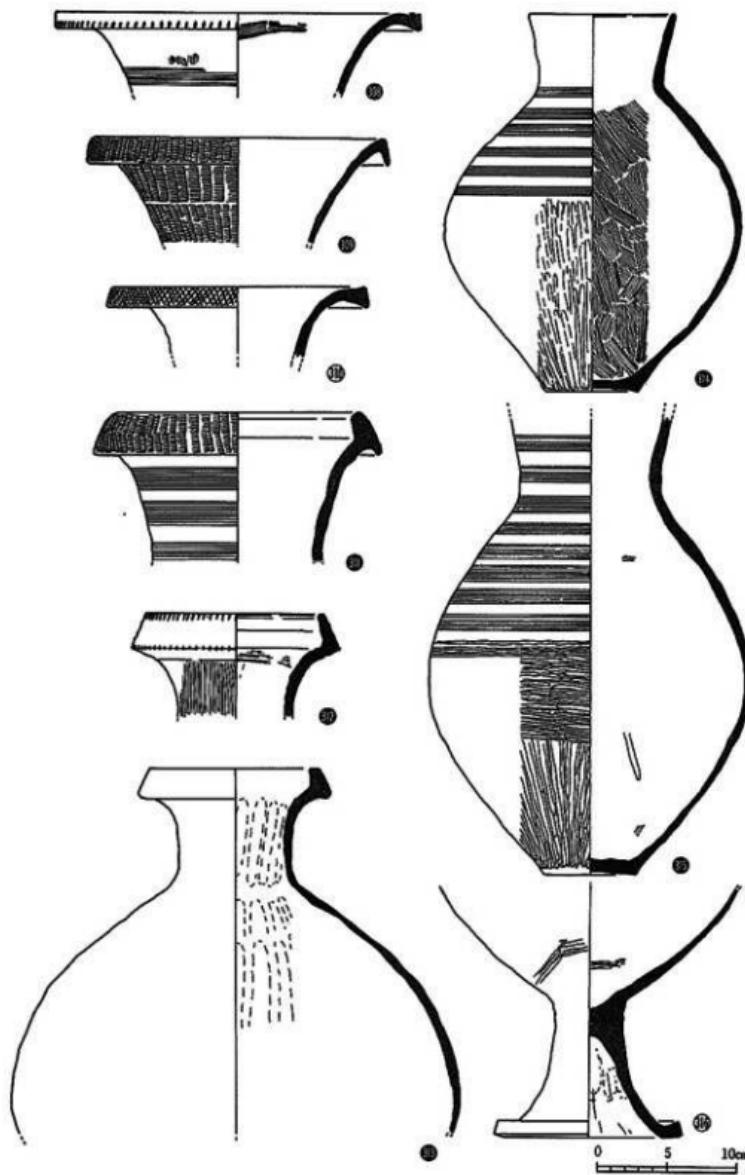
体部は頸部にははっきりした後は持たず丸味をおびる。口縁端部外面に刻目文、体部上半に5帯の直線文を配する。(318)は比較的小型の鉢で、丸味をおびたやや扁平な体部に、水平に近い短い口縁部がつく。体部外面上端付近に2帯の扇形文を配する。(319, 320, 322, 324)は甕である。

(319)は短く外反する口縁で、口縁端部が上下に肥厚するもので、体部は上位から中位でなだらかに張り出す。内外面ともにヘラミガキを施している。(320)は小型の甕である。短く外反する口縁部で、口縁端部は丸味を持って終る。体部は中位よりやや上方で張っており、体部最大径が口径よりわずかに大きい。(323, 324)はともに口縁部付近のみの破片である。形態的には(319)とほぼ同じであるが、器面の調整が異なり刷毛調整による。(324)は口径46cmと大型である。(325~329)は石器である。(325)は石槍である。上下端とも欠損している。器面調整はやや粗雑な剝離痕によってなされている。断面はいびつな菱形状を呈する。幅約4.5cmを測った。(326)は長さ6.5cm、幅5cmの梢円形状の石器で、断面は扁平な三角形状を呈する。搔器と思われ、刃の部分は両側から剝離させ刃先を作っている。(328)は小刀状石器である。全体的に粗い剝離痕をなしているが、丸味を持つ面は特に鈍い感じがし、したがって直線的な面を刃部として使用したものと思われる。長さ3cm、幅7cm厚さ1.5cmを測った。(329)は大型蛤刃石斧の基部である。ていねいに研磨されており、特に側面の面取りは精良である。石の材質は(325~328)がサスカイト、(329)は緑色片岩である。

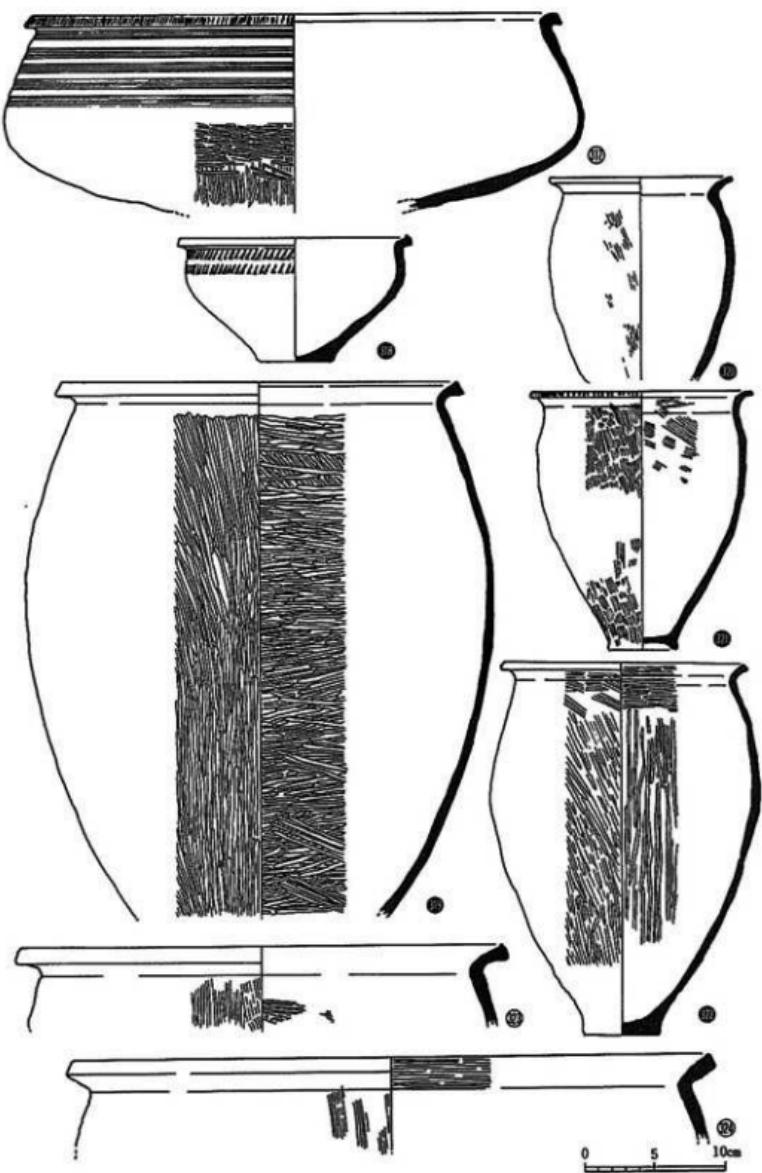
これらの遺物は弥生時代中期中葉から後葉に比定されるものと思われる。

(土塙1) Cトレントの北端部で、2T、159の地区の、溝1のすぐ西側で検出した。1.4m × 0.5mの長方形状の土塙である。深さ約30cmを測った。内部より甕が2個体ほぼ完形で出土した。

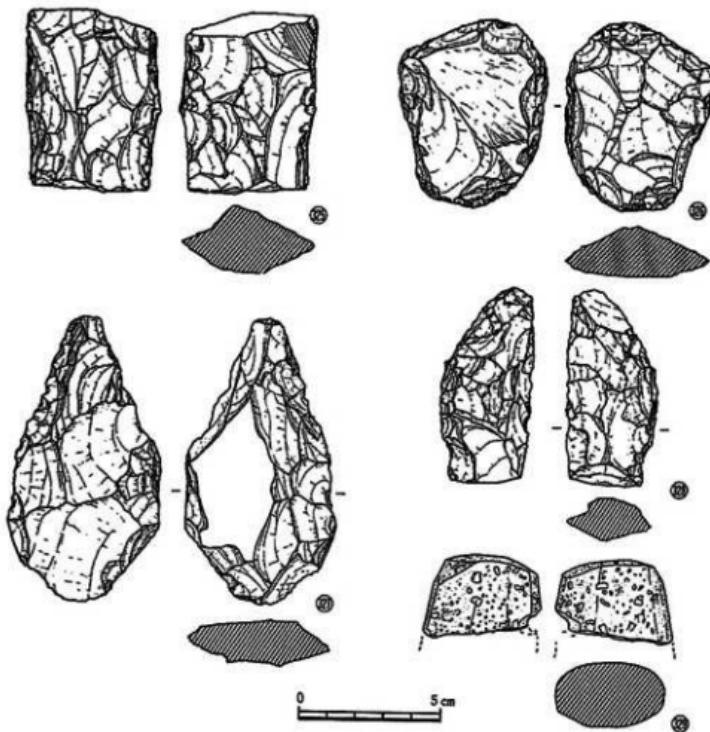
出土遺物(321, 322) ともに甕である。(321)はいわゆる倒鐘形の体部とゆるやかに外反する口縁部を持つもので、口縁端部外面に刻目文を配する。調整は刷毛調整による。口径が体部最大径を凌駕している。比較的小型である。(322)は中型の甕で、体部中位付近が丸く張り出しており、口縁部は短く外反して終る。口径は体部径を凌駕しない。器面の調整はヘラミガキによる。



第121図 溝1出土遺物



第122図 溝1出土遺物



第123図 溝1出土遺物

（溝2）Cトレンチの北半部から切り抜げ部のC-hトレンチにかけての、2Q～2T、160～166の地区で検出した溝である。溝幅約2m～4m、深さ約0.6mを測った。断面逆台形状を呈する。埋土の状況から見て一気に埋没したものと思われる。溝内より数片の土器が出土した。

出土遺物(330～333)(330)は壺の口縁部及び頸部の破片である。頸部は薄手で、ゆるやかに外反して口縁部に至り、口縁部は内弯して端部が肥厚し、断面三角形状を呈する。端部外面に棱を持ち、上端につまみ出す感じで終る。頸部に貼り付け突帯を有し、口縁端部外面の棱の部分に刻目文、更にその上部に波状文を配する。(331)は口縁端部が下方に肥厚するもので、壺の口縁部である。端部外面下端に刻目文を配する。(333)は小型の無頸壺である。平らな底部から体部が内弯しつつ外上方へ立ち上がり口縁部に致る。端部は丸く收める。端部外面付近に4ヶ所円孔を有する。

（溝3）Cトレンチの北半部から切り抜げ部C-eトレンチにかけての、2R～3A、165～170の地区で検出した。幅約2m、深さ約0.7mを測った。断面逆台形状を呈する。溝3の埋没

後に14号方形周溝墓(弥生時代中期後葉)が築造されている。溝内からミニチュア土器(336)が1個体出土したのみで、この他には検出されなかったが、14号方形周溝墓との関係から弥生時代中期中葉付近に比定できるものと考える。

〈土塙2〉 溝2のすぐ北側の、Cトレンチの東壁内で検出した径50cm内外の土塙である。深さ約30cmを測った。

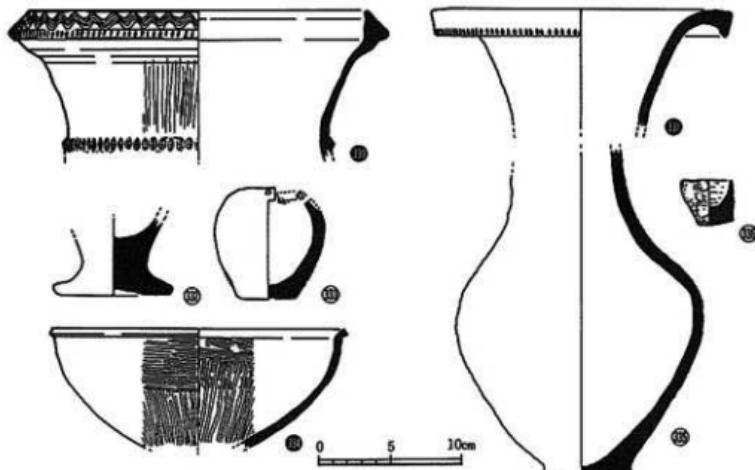
出土遺物(334) 鉢と思われる。底部を欠損している。体部は内寄気味に外上方へ立ち上り口縁部に至る。端部は短く外反して終り、少し上下に肥厚する。

〈土塙3〉 溝3の北側の、Cトレンチ東壁付近で検出した径80cmの不整円形状の土塙で、深さ約30cmを測った。内部から壺(335)が出土した。

第3項 弥生時代後期溝・土塙・ピット

弥生時代後期の造構面となるのは黒灰色粘土直下の黒灰色粘土上面であるが、調査区のうちCトレンチ北半部から北側では、対応する層が弥生時代中期の方形周溝墓の周溝部分で検出される。すなわち方形周溝墓が、弥生時代後期の時点でも部分的な盛土のくずれは認められるものの、依然として存在していたものと思われ、そのため調査区北半では弥生時代後期のフラットな面は検出されなかった。Cトレンチ南半部では黒灰色粘土上面で比較的フラットな面を検出したが、造構が検出されたのはC-fトレンチ及びCトレンチ南端部のみであった。遺物は造構の内部及び周辺では皆無で、ANトレンチの弥生時代後期相当層から比較的まとまった量の土器が出土した。

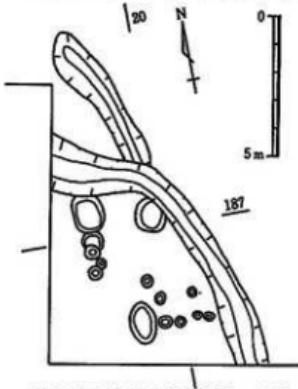
〈溝4〉 Cトレンチの切り抜き部のC-fトレンチの中央やや西寄りを南北に走る溝である。幅約40cm、深さ約20cmで、V字形の断面を呈する。更に溝4の付近で径約60cm、深さ約15cmの円



第124図 溝2・溝3・土塙2・土塙3出土遺物

形状を呈する土塙及び径約20cm、深さ約20cmの円形ピットを2ヶ所の、計3ヶ所の遺構が検出された。遺物はまったく出土しなかった。

〈溝5〉 Cトレンチの南端部で検出された。Cトレンチ南壁から約7mの北西へ走り、その後西に折れてトレンチ西壁へ出る。幅1m、深さ約20cmを測った。溝内から遺物は出土しなかった。尚、溝5が西へ折れる地点で、溝5の北側に幅約1m、長さ約5mの長楕円形状を呈する土塙を検出した。この土塙は溝5に切られた状態で検出された。深さ約20cmで、遺物は出土しなかった。

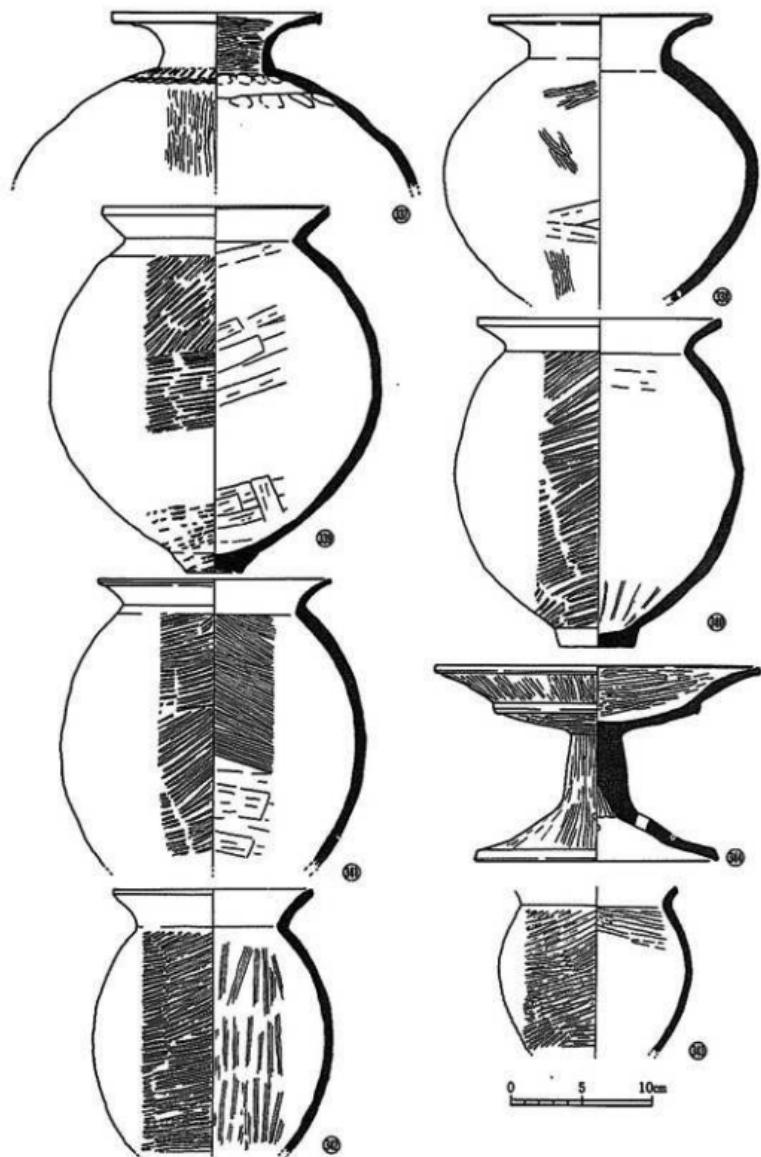


第125図 弥生時代後期溝・土塙・
ピット平面図

粘土からの出土である。(337, 338)は壺で、頸部は極く短く、口縁部はほぼ水平にまで外反する。大きく張る丸い体部を有する。体部外面にヘラミガキが見られる。(337)には体部上端に刻目文と波状文を配する。(344)は高壺で壺底部と口縁部の境に稜が見られる。口縁は外上方に低く立ち上がる。外面と壺部内面はヘラミガキ、脚胴部の内面にはしばり目が見られる。脚部に4ヶ所円孔を有する。(342, 343)は甕で、外面に平行タタキが頗著に残る。

又、溝5の南西側に楕円形状の土塙を3基、ピットを11基検出した。いずれも遺物は出土しなかった。土塙は長径1.2m～1.5m、短径1m内外、深さ約20cm、ピットは径30cm～50cmの円形で、深さ約20cm～30cmを測った。

〈包含層から検出された土器〉(337～344) 弥生時代後期から古墳時代前期前半にわたって堆積した3層(下より灰黒色粘質シルト、黒灰色粘土、黒色粘土)から土器が出土した。これらの土層は、いずれも方形周溝墓の周溝内に堆積した土である。(339～341)は黒色粘質シルトから検出されたものでいずれも壺である。口縁の立ち上がりは、外反するものと直線的に外上方へ伸びるものとがある。体部は丸味をおびており、外面に頗著な平行タタキが見られる。(337, 338, 339)は黒灰色粘土からの出土である。(337, 338)は壺で、頸部は極く短く、口縁部はほぼ水平にまで外反する。大きく張る丸い体部を有する。体部外面にヘラミガキが見られる。(337)には体部上端に刻目文と波状文を配する。(344)は高壺で壺底部と口縁部の境に稜が見られる。口縁は外上方に低く立ち上がる。外面と壺部内面はヘラミガキ、脚胴部の内面にはしばり目が見られる。脚部に4ヶ所円孔を有する。(342, 343)は甕で、外面に平行タタキが頗著に残る。



第126図 ANトレンチ出土弥生時代後期土器